

ウイグル文字音写された漢語仏典断片について
—ウイグル漢字音の研究—

庄垣内 正弘

0. はじめに

中央アジア古文献の中に、表音文字で漢文を音写した文献のあることは知られている。とりわけチベット文字とブラーフミー文字で音写された文献は昔の漢語西北方言音の性格を知る上で重大な役割をはたしてきた。また、最近においては小断片ではあるがソグド文字による音写の研究も提出された⁽¹⁾。

一方、中央アジア古文献の中で、かなり大量の文献を遺したウイグル文字文献にも同様の音写漢文のあることがG.カラ氏によって報告されている⁽²⁾。この文献はベルリンのトルファン蒐集品に所属するもので、韻文仏典の漢文をウイグル文字で音写し、その一部はウイグル語訳と対照させてあるという。今のところ、数行が見本として提出されたのみで全体の行数などについては不明である。

ところで、筆者はつい最近ロシア科学アカデミー・サンクトペテルブルグ支所に10点ほどのウイグル文字で音写された漢文断片の存在を知った。すべて仏典であるが、そのうちの8点については内容が同定できたので、それらについて以下に論じたい。なお、これらウイグル文字音写漢文断片をここでは「ペテルブルグ所蔵断片」とよぶことにする。

1. 文献の体裁

「ペテルブルグ所蔵断片」の文献番号、サイズなどについて以下に表示してみる。

テキストA 文献番号 Kr. IV 271

サイズ 縦25cm×横30cm

⁽¹⁾ 「漢語西北方言」とはここでは河西地方あるいは西域の漢語を指す。チベット文字とブラーフミー文字文献に関しては「参考文献」に掲げた羅常培、高田時雄、R. Emmerick 各氏の著作、ソグド文字文献に関しては吉田豊氏の著作を参照されたい。

⁽²⁾ Kara(1991). Cf. 梅村(1982).

形式 卷子
文字 草書体ウイグル文字
裏面 ウイグル文字表記漢文数行、判読困難
その他 表面に見える漢字は他の漢文断片のものからの付着

テキスト B 文献番号 K r . IV 2 6 6
サイズ 縦 2 6 cm × 横 2 5 cm
形式 卷子
文字 草書体ウイグル文字
裏面 漢文、ただし付着した他の文献のもの

テキスト C 文献番号 K r . IV 8 2 1
サイズ 縦 1 1 cm × 横 3 4 cm
形式 卷子
文字 草書体ウイグル文字
裏面 ウイグル文字表記ウイグル文

テキスト D 文献番号 K r . IV 8 1 9
サイズ 縦 1 1 cm × 横 1 6 cm
形式 卷子
文字 草書体ウイグル文字
裏面 ウイグル文字表記漢文
その他 両面とも同一人の手による

テキスト E 文献番号 K r . IV 8 1 7
サイズ 縦 1 2 cm × 横 7 cm
形式 卷子
文字 草書体ウイグル文字
裏面 ウイグル文字表記漢文 4 行、判読困難
その他 裏打ちされた面を表面として扱った

テキスト F 文献番号 K r . IV 2 9 1
サイズ 縦 1 4 cm × 横 1 8 cm
形式 卷子
文字 草書体ウイグル文字

	裏面	漢文
	その他	表面下半分はウイグル文字表記ウイグル文
テキスト G	文献番号	K r. IV 285
	サイズ	縦 15 cm × 横 25 cm
	形式	卷子
	文字	草書体ウイグル文字
	裏面	漢文
テキスト H	文献番号	K r. IV 309
	サイズ	縦 15 cm × 横 22 cm
	形式	卷子
	文字	草書体ウイグル文字 漢字
	裏面	漢文

文献番号に付せられた K r. というのは、ウルムチの総督であった、クロトコフ (N.I.Krotkov) の蒐集した文献を指す。しかし、これがもともとどこに存在し、いつ発見されたのかは明白でない。使用されたウイグル文字は後期ウイグル仏典にしばしばみられる草書体で、多音字性の大きなものである。すべてを卷子と推定したが、D E などの小断片はあるいは別の形式の文献であったかもしれない。E の表面には 4 行のウイグル文字があり、2, 3 の単語は確認できる。D と同じく両面に同一仏典を書いたものと推定できるが、今のところ同定はむずかしい。

2. テキストの内容

2. 1 断片の所属

これら 8 断片の内容は『聖妙吉祥真実名経』と『四分律比丘戒本』に所属する。

『真実名経』（頌番号）

テキスト A	0 ————— 27
テキスト B	30 ————— 44
テキスト C	2 ————— 23
テキスト Dr	5 — 7
テキスト D v	26 ——— 37
テキスト E	42 — 45
テキスト F	— 2

『四分律比丘戒本』(大正1429 1022頁)

テキストG 上22行――中4行

テキストH 上22行――中1行

2. 2 『聖妙吉祥真實名經』

『聖妙吉祥真實名經』⁽³⁾は元朝時代に釈智の手で漢訳された明本が伝わっている
まず「大正大藏經」(No.1190)に収められている内容と、「ペテルブルグ所蔵断片」
の内容とを比べてみたい。序文に続いて表題部分が掲げられているが、その部分は
ウイグル文字表記テキストのAとFに現れるので「大正大藏經」の漢文と対照させ
てみる：

梵語阿耶曼祖悉哩捺麻捺機訂

此云誦聖妙吉祥真實名經

聖妙吉祥真實名經

元講經律論習蜜教

土番譯主聶崖沙門釋智譯

敬禮孺童相妙吉祥

(大正 第20卷 p.826-b)

A

(0) <v'>mywñ ' ' ry- ' <m' n>cwsyry

梵云 阿耶 曼祖悉哩

< sy y>wn swñkš- ' pywkyrsw

捺麻捺機訂此 云 誦聖 妙吉祥

cynšyrmy : kyly <swd>wnk

真實名 敬禮 孺童

⁽³⁾ Skt.*[Ārya]mañjuśrīnāmasaṃgīti. Cf.P.Demiéville, *Répertoire du canon bouddhique sino-japonais*, 1978 Paris-Tokyo, p.106,no.1190. 『真實名經』の類本としては、『文殊所説最勝名義經』(大正 No.1188)『仏説文殊菩薩最勝真實名義經』(大正 No.1189)が存在するが、いずれもウイグル文字音写漢文とは対応しない。

F

(12)'wn: v'm ywn 'ry-' <m'n cw šy ry

梵 云 阿 耶 曼 祖 悉 哩

sy ywn swnk š-' pyw kyr sw cyn>

捺 麻 捺 機 訂 此 云 誦 聖 妙 吉 祥 眞

(13)sy<rm>y: kyly swdwn<k>

實 名 敬 禮 孺 童

Fは大きく破損しているが、Aと一致するものといえる。両ウイグル文字表記には漢字漢文に存在するかなりの文字が欠落している。すなわち、經の表題、訳者名を記した部分と、「此云誦聖妙吉祥眞實名經」の末尾の「經」、「敬禮孺童相妙吉祥」の「相妙吉祥」とが欠けている。また冒頭の「梵語」には「梵云」の音写形が表記されている。

漢字漢文には上掲の表題に先行して、大明太宗文皇帝の序文が付いている。テキストFにも同一箇所には序文が書かれているが、内容は全く別物である。

このように、本文に入るまではウイグル文字表記と漢字漢文との間には大きな差異がみられるが、本文の頌では、第25頌と26頌の間に挿入されている陀羅尼がウイグル文字表記に存在しない点と、第1頌第3句「勇猛超出三界内」の「内」に対して「中」の字の音写が与えられている点をのぞけば両者の内容は一致している。

これらのことから、ウイグル文字表記の原典漢文は、「大正大藏經」に収められた明本ではないが、もとは同一のテキストであったと推定できる。したがって、このウイグル文字音写『眞實名經』の作成は元朝以前のものでありえない。

2. 3 『四分律比丘戒本』

「四分律」は5世紀に仏陀耶舎の手で漢訳された戒律聖典である。「四分律」系各本のなかで、ウイグル文字音写ともっともよく対応するのは「四分律」を基に懷素(7世紀の人)によって比丘戒、比丘尼戒の条文を抜粋編集した『四分律比丘戒本』である⁽⁴⁾。「大正大藏經」(No.1429)の注記からは、「宮内省図書寮本(旧宋本)」と一致している。テキストGの末尾には漢文音写に連続してウイグル文が書かれている:sadu bolzun yamu tip mn kyys///³「善哉!と、われ kyys///³」(G 1.6)。このウイグル文との併記は、漢文のウイグル文字音写がウイグル語話者の手で行われたことを示している。テキストGHとも字体は後期ウイグル語のものであるし、Hには、後期ウイグル語仏典にしばしばみられる、借用漢語のウイグル語化

⁽⁴⁾ 水野弘元ほか編『仏典解題事典』(第2版 春秋社)1993 pp.108-109 参照。

-70-

45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29
 無於言離作十具尊十欲大廣主此住尊大三復具有大具以於大大解普持大大大大大
 我無說彼諸種知者彼得密大下在者緊有大大大慈足大大施幻者聞於明境欲供供供
 師二真無利義十十岸十呪正圖二於大即大神神智自大禪忍主化執妙廣及色即養養養
 子中實垢益相種地到種中覺故十彼種是山通通慧性力定辱中內持聞大與與是者者者
 具說不戲無義之自是到令衆讀四大即大悉大及具無大住即最喜大皆智大廣於大即是
 音無諱論有中自在清彼出明清頭乘殊雄能名大大量方靜堅爲中幻廣慧廣大貪大大
 聲二句主遺義性者淨岸現主淨三相勝勇壞称力智邊便慮固尊喜化大器大身樂欲忿癡

法句

外住如真具自持住即住有具界是大上於持大大大亦大以以大大大顯鉤大大大一即亦
 道於其如有在於在是於大大一出乘師大大力力解是願大大持幻幻中煩中色安切是愚
 惡具所自十寂十於十密寂百現相密怖堅令及即大勝智精戒化化即惱圍并樂貪忿癡
 獸實說性種默種彼種種呪默八衆中呪中固他與是悲智慧進中中中是鉤者及者欲悲心
 極邊而清大十清十彼彼自大名明最大施大令大大勝是令悉持施成廣大是大大皆之除
 怖際依淨自力淨地岸岸性寂數殊殊怖金摧速方智大持棄殊幻利大中廣形喜除冤愚
 畏中行王在主者中理中理默勝勝畏剛伏疾便慧海身捨勝術益顯勝大像足斷饑癡

(「大正大藏經」第20卷 pp.826-827)

3. 1. 2 <ウイグル文字テキスト>⁽⁶⁾

テキスト A (KrIV 271)

(0) <v>'mywñ 'ry-' <m'n>cwsyry<⁽⁷⁾ sy y>wn swñkš-'

梵云 阿耶 曼祖悉哩 捺麻捺機訂 此 云 誦聖

pywkyrsw cyñšyrmy : kyly <swd>wnk

妙吉祥 眞實名 敬禮 孺童

1 (1) <vw>q̄sy kyrsw cykymq̄w :

復次 吉祥 持金剛

t'ndy<w vwq cwnk synk dyw vwq> :

難調 伏 中 勝 調 伏

ywnkm' cywcwr s'mq'ycwnk< :>⁽⁸⁾

勇猛 超出 三界中

⁽⁶⁾ ウイグル文字テキスト中、< >は欠落部分を示し、同一漢字がほかに現れる場合はその漢字の音写形式と同じものをそこに入れ、同一漢字が現れない場合は*印を付けて推定形を入れた。また、()付きの番号はウイグル文字テキストの行番号を示し、太字の番号は頌の節番号を示す。

⁽⁷⁾ 'ry-' <m'n>cwsyry (阿耶 曼祖悉哩) は Skt. Ārya-mañjuśrī の、漢語以外の言語を経由した音写形式であり、arya-mančuśiri と転写できる。「捺麻捺機訂」に対応する部分は欠落している。nāma-saṃgīti を音写した n'm'-s'nkkydy(nama-saṃgiti) が書かれていた可能性はある。庄垣内(1993a) p.329 参照。

⁽⁸⁾ s'mq'ycwnk (三界中) は「大正大藏經」では「三界内」となっている。

- sys'y kymq̄w pyrcwnk s<y nk :>
自在 金剛 密中 勝
- 2 (2) <q'>nsw p'q̄lyñ pywd'ncy :
眼如 白蓮 妙端正
myñp<'w wyn m'n š'q lyn q-' :>
面貌 圓 滿 若 蓮 華
sy<š>yw cypcy syñkkymq̄w :
自手 執持 勝金剛
šyšy kws w s'q̄p'wcyk< :>
時時 仰上 作拋擲
- 3 (3) <vw>qsy dykyn pyñdynks w :
復次 第現 忿等像
yykyw 'wpyn <cy kym qw :>
亦有 無邊 持 金 剛
ywnkm' dywv wq̄ d'ñdywc' :
勇猛 調伏 難調者
kw'w <m' sw kyk vw 'wy :>
具威 猛 相 極 怖 畏
- 4 (4) <'w>kym qwsym cwsyñkq w :
於 金 剛尖 出勝光
sysyw kws w <ly p'w cyk :>
自手 向上 令 拋 擲
yywd'y sypy kypcykw :
有大 慈悲 及智慧
wypyn <yyk šy kyk šw šynk :>
方便 益 生 極 殊 勝
- 5 (5) <k>wswq̄ kyl'q̄ <'n 'yn sym :>
具足 喜樂 安 隱 心
<*šy yw pyn *dw> cyk<y sw :>
示 有 忿 怒 之 形 相
'wqy <c>yqwq̄ qycwñks wñ :
於行 正覺 行中尊
cwñkq'y l<'y *syp šyn kwnk ky :>
衆皆 來 集 身 恭 謹
- 6 (6) kwpy šwl'y p'k'v'ñ :

向彼 如來 未過 錢
 k'wky cyqwq <ly ky yy> :
 究竟 正覺 禮 敬 已
 'wsyñ kwnkky syñq'pcw :
 於前 恭敬 伸合掌
 t'ñz-' cydym <šy q'w p'q :>
 端坐 正念 而 告 白

7 (7) pyñcw ywq' s'qšyvyk :
 遍主 與我 作饒益
 yykq' sypy 'wq'q'w :
 益我 慈悲 於我故
 šwq'ñ 'wcwñk šyñkkywky :
 如幻 網中 成究竟
 kwñq' <c>yñsy q'q *pw *dy :>
 願我 真實 獲 菩 提

8 (8) yywcw v'ñd'w l'ñkysym :
 有諸 煩惱 亂其心
 vwq'y tycwnk <šy pyr dyk :>
 不解 泥中 而 沒 溺
 vy<l>y 'yrsy yywsylwy :
 爲利 一切 有情類
 lyq'q' 'wšw c<y q' qw :>
 令獲 無上 之 果 故

9 (9) kywky cyqñq cwryw q'y :
 究竟 正覺 出有 壞
 syyy<w sy šy kyp t'w šy :>
 是有 情師 及 導師
 vykd'y k<y kw> t'rcyñsy :
 亦大 記 句 達真性
 lywcy qyñsym šwšyn<k c' :>
 了知 根心 殊勝 者

10 (10).....

彼出有壞之智身

.....

是大頂旋言詞主

<yy šy cy šyn> sy< cyw cwr :>

亦 是 智 身 自 超 出

pywkyrs w c<yw ywnk šyk c' :>

妙 吉 祥 智 勇 識 者

11 (11).....

誦彼殊勝真實名

.....

是甚深義廣大義

.....

無比大義勝柔軟

<cw šyn> c<w>nksyn< kyp qyw šyn :>

初 善 中 善 及 後 善

12 (12).....

過去正覺等已說

.....

於未來中當演說

.....

現在究竟等正覺

.....

亦遍數數皆宣說

13 (13)t'yq'n< q' 'w pyn swq >cwnk :

大 幻 化 網 本 續 中

<cy t'y kym q>w cypyr cyw :

持 大 金 剛 持 密 呪

<šw py 'w >pyñ cwvyrcyk :

如 彼 無 邊 諸 佛 勅

p<yw 'ym *swyn *cw *kym tw šwr :>

妙 音 宣 暢 今 當 說

14 (14)<s>yswn k<yw ky cy>qwqdyñk :

世 尊 究 竟 正 覺 等

kwnšw <cyn>syr c<y cyw qw :>

願 成 真 實 持 呪 故

<šw q' *kwr t>y v(y)cwrq'n :

如 我 決 定 未 出 間

t<w kyn qw qw šy *šyw cy :>

當 勤 堅 固 而 受 持

15 (15)vyñly v'nd'w ly'wyw :

遠離 煩惱 令無餘

'wcv pywq'y š'(l)y<q>w :

於諸 謬解 捨離故

sy<k yy 'w> pyr 'wyysym :

即 以 無 別 無異心

vycw yy<w sy kwn *swyn> šwr :

爲諸 有 情 願 宣 說

16 (16)pyrsy s'yc' cykymq̄w :

密自 在者 持金剛

kwšwl'y syn šwršy<y>yn< :>

向如來 前 說是言

q'wp'<q> pyryy syq'pcw :

告白 畢已 而合掌

yyšyn kw<nk ky> s'ky syn< :>

以身 恭 敬 坐其 前

17 (17)<vw>qsy šyk' cwrywq̄'y< :>

復次 釋迦 出有壞

kywky cyqwq lwsq̄ swn< :>

究竟 正覺 兩足 尊

'ws<y> myñmwñ š<wq>šynkšyr :

於自 面門 殊 勝舌

qwcw qwp<y>n lyšwyyn< :>

廣長 橫遍 令舒演

18 (18)kynk<y>n s'mcwnk syq'ydwy :

顯現 三種 世界內

dywvwq syp' cw'wn<dyk :>

調伏 四魔 諸怨敵

<yyw sy q'y> kw s'm''q̄sw :

有 情 皆 具 三惡趣

vykyn sysy vysywsy :

爲現 清淨 微笑相

19 (19)'wky sys<y> v'<m>'ymcwñk :

於其 清淨 梵音中

pyñm' n <s'>mcwnk sy<q'>y<yy :>

遍滿 三種 世界已

<vy cy ky>mqw t'ylykyc' :

爲 持 金剛 大力者

pyrsy s'ycw <šy *t'p šwr :>

密 自 在 主 而 答 說

20 (20)<kw>swq yywd'y sypyc' :

具足 有大 慈悲者

swvy lyyyk yy<w sy qw :>

汝爲 利益 有 情 故

<kw swq cy> šyñ pywkyrsy :

具 足 智 身 妙 吉 祥

sw<nk cyn šyr my šy t'y yyk :>

誦 真 實 名 是 大 益

21 (21)<nynk s'>q sysy cwsy kyp :

能 作 清 淨 除 罪 業

'wq' sykyn <'nk *ty *ty :>

於 我 精 勤 應 諦 聽

<šyn s'y> kyrsy cykymqw :

善 哉 吉 祥 持 金 剛

.....

手持金剛汝善哉

22 (22)<pyr>cw q'vy sysyqw :

密 主 我 爲 此 事 故

vys<w> q'wpyw lys<wyn šwr :>

爲 汝 巧 妙 令 宣 說

.....

汝今一心應諦聽

.....

唯然未過鏤善哉

23 (23)<vwq sy šy>k' cwryyqw'y :

復 次 釋 迦 出 有 壞

.....

一切密呪大種性

.....

密呪明呪持種性

.....

於其三種令觀察

24 (24) <šy q'>n kypcwr syq'nsy< :>

世 間 及 出 世間性

.....

顯作世間大種性

.....

殊勝廣大手印種

.....

大種大髻應觀察

25 (25) <y>ynsy cycw yynkyswnk :

言 詞 之 主 演 偈 頌

pyrcyw <ww c' kw *lwq cwnk :>

密 呪 王 者 具 六 種

.....

將令顯出於無二

.....

無生法者自宣說

26 (26) swsy cy<qw>q cwrywq'y :

如 是 正 覺 出 有 壞

k<yw ky cy qwq *'' cwnk cwr :>

究 竟 正 覺 啞 中 出

.....

啞者一切字中勝

.....

是大利益微妙字

27 (27) cwky cydwy cwr'ws<y :>

諸 境 之 內 出 無 生

.....

即此遠離於言說

.....

是諸說中殊勝因

.....

令顯一切諸言說

テキスト B (KrIV266)

30 (1)<t'y kwnk yw c' t'y t'>m ywq

大 供 養 者 大 貪 欲

.....

一切貪欲皆除斷

<t'y ywq (2)sy>kšy 'wd'y l'q̄ :

大 欲 即 是 於 大 樂

t<'>y 'n l'q c' t'yky s<wq> ::

大 安 樂 者 大 喜 足

31 <t'>yky šyqyw qwd'y šyn :

大 境 色 與 廣 大 身

(3)t'yšyq pykyp t'yky sw :

大 色 并 及 大 形 像

t'ymykyp y<w> t'y qwd'y :

大 明 及 與 大 廣 大

t'ycwnk vyc' šyqwd'y ::

大 中 圍 者 是 廣 大

32 (4)cy'wqwd'y cykwy :

持 於 廣 大 智 慧 器

qyw v'nd'w qyw t'ycwnk šynk :

鉤 煩 惱 鉤 大 中 勝

vw'wn p'w 'wn (5)qyyqwd'y :

普 聞 妙 聞 皆 廣 大

kyñcwnk syksy qwd'ykyn ::

顯 中 即 是 廣 大 顯

33 q'yc' cypcy t<'>yq̄'n q- :

解 者 執 持 大 幻 化

t'yq̄'n (6)q'cwnk šlyyyk :

大 幻 化 中 成 利 益

t'yq'n q'dwy kycwnk ky :

大 幻 化 內 喜 中 喜

- t'yq'ñ q'- (7)cwnk šyq'n šwr ::⁽⁹⁾
 大 幻 化 中 施 幻 術
- 34 t'yšy cwc<wnk> swyvyswn :
 大 施 主 中 最 爲 尊
 t'ycy q'y cwnk cyšwšyñk :
 大 持 戒 中 持 殊 勝
 (8)<'w>d'y š<y>ñšwq sykkynq̄w :
 於 大 忍 辱 即 堅 固
 <yy t'>ysysyñ <syr *ky š'> ::
 以 大 精 進 悉 棄 捨
- 35 yyd<'y> <*šyn>dy cw (9)sylw :
 以 大 禪 定 住 靜 慮
 yyd'y cykw lycyšyñ :
 以 大 智 慧 令 持 身
 kswq̄ t'ylyk t<'y>vwpyñ :
 具 足 大 力 大 方 便
 t'ykwñ (10)šynk cy šyd'y q'y ::
 大 願 勝 智 是 大 海
- 36 t'ysw swsy <'w>lw pyñ :
 大 慈 自 性 無 量 邊
 vykšy t'yvy šynk (11)cykw :
 亦 是 大 悲 勝 智 慧
 yyw d'y cykw kwd'y cy :
 有 大 智 慧 具 大 智
 t'yq'y sykšy t'yvw pyñ ::
 大 解 即 是 大 方 便
- 37 (12)kwd'y šyndwnk kyp t'ylyk :
 具 大 神 通 及 大 力
 t'ylyk kyp yw t'yswq̄ syr :
 大 力 及 與 大 速 疾
 vwq̄d'y s<yn> (13)twñk t'ymycyñk :
 復 大 神 通 大 名 稱

⁽⁹⁾ t'yq'ñ q'- (大幻化) の前にもうひとつ t'yq'nq' (大幻化) が書かれているが、これは不要であるので省略した。

- t'ylyk lyd' lyswyvwä ::
大力 令他 令摧伏
- 38 s'myyw t'yš'ñ syr ññkq'y :
三有 大山 悉 能壞
(14)cyd'y kyñq̄w t'ykymqw :
持大 堅固 大金剛
t'ykyn sykš<y> t'yywñk ywñk :
大緊 即是 大雄 勇
'wdy vwcwñk šy (15)vw 'wy ::
於大 怖中 施 怖 畏
- 39 swnc' t'ycwnk sykšwšynk :
尊者 大種 即殊勝
šwšypyr̄cyw t'yšwšyñk :
上師密呪 大殊勝
(16)cws'y 'wpy t'ysynk sw :
住在 於彼 大乘 相
t'<ysynk> sw cwnk swyšwšynk :::
大乘 相 中 最殊勝
- 40 (17)<qw t'y cy qwq cwn>k mycw :
廣大 正覺 衆 明主
kwd'y syk pyk t'ysyk pyk :
具大 寂 默 大寂 默
t'ypyr (18)<cyw cwnk ly cwr kyn :>
大密 呪 中 令 出 現
yyw d'y pyrcyw swsyly ::
有 大 密呪 自性理
- 41 ywq dyk <šyp cwnk t'>w (19)<py q'n :>
欲 得 十 種 到 彼岸
<cw 'w šyp cw>nk pyq̄'n cwnk :
住 於 十 種 彼岸 中
šyppy q'n t'w šysysy :
十彼 岸 到 是清淨
s<yk (20)šy šyp cwnk py q'n ly ::>
即 是 十 種 彼岸 理
- 42 swnc' sypdy <s>ws<'y>c' :
尊者 說 大 乘 經

尊者 十地 自在者
cws'y 'wpy sypdy cwn<k> :

住在 於彼 十地 中

(21)..... :

具知十種之自性

<cy ' >w sypcwnk <s>ysy c' ::

持 於 十種 清淨 者

43 sypcwnk kysw kycwnk ky :

十種 義相 義中 義

(22)..... :

自在寂默十力主

<s' q cw ly yyk 'w> yyw yw :

作 諸 利 益 無 有 遺

kwyw šypcwnk t'ysw<s'y> :

具有 十種 大自在

44 (23)..... :

離彼無垢戲論主

..... :

眞如自性清淨王

<yyn šwr> cysyr vwkyk<w:>

言 說 眞實 不諱句

テキスト C (KrIV 821)

(1) <myn p'w > wyñm'ñ š'q lyñq'-' ::

面 貌 圓 滿 若 蓮 華

swš<yw cyp cy šynk kym qw :>

自 手 執 持 勝 金 剛

(2) <šy šy kw sw s'q p'w c>yk ::

時 時 仰 上 作 拋 擲

3 vwqsy tykyn pyñdynk <sw :>

復 次 第 現 忿 等 像

.....

亦有無邊持金剛

(3) <ywnk m' dyw vw>q:: t'ñd<y>w c'

勇 猛 調 伏 難 調 者

- kw'wm'swq⁽¹⁰⁾ <kyk vw 'wy ::>
 具威猛相 極 怖 畏
- 4 (4) <'w kym qw sym cwr šynk q>w :
 於 金 剛 尖 出 勝 光
 sw syw kws w lyp'w c<yk :>
 自 手 向上 令拋 擲

 有大慈悲及智慧
- (5) <vw pyn> yyk <šy> kyk swšynk< ::>
 方 便 益 生 極 殊勝
- 5
 具足喜樂案隱心
- (6) <*šy yw pyn *d>w cyky sw :
 示 有 忿 怒 之形 相
 'wqycy< qwq qy cwnk sw n :>
 於行正 覺 行 中 尊
- (7) <cwnk q'y l'y *syb>syn kwnk kyn :
 衆 皆 來 集 身 恭 謹
- 6 kwpy <šw l'y p'k'v'n :>
 向彼 如 來 末過鏤

 究竟正覺禮敬已
- (8) <'w syn k>wynk ky syn q'p cw< ::>
 於 前 恭 敬 伸 合 掌

 端坐正念而告白
- 7 (9) <pyn cw>ywq-' s'<q> s'w yyk :
 遍 主 與我 作 饒 益

 益我慈悲於我故
- (10) <šwq'n 'wcwnk š>y kywky< ::>
 如幻 網中 成 究竟
 kwn q-' cynsyw <q'q *pw *dy ::>

⁽¹⁰⁾ swq は sw「相」の誤写と考えられる。A18 B16 21 C6 E3 etc. 参照。

- 願 我 眞 實 獲 菩 提
 8
 有 諸 煩 惱 亂 其 心
 (11)<vw q'y t>ycwnk sypyr dyk< :>
 不 解 泥 中 而 沒 溺

 爲 利 一 切 有 情 類
 (12)<ly q'q 'w š>w cyq'q̄w ::
 令 獲 無 上 之 果 故
 9 kywky cy<qwq cwr yw q'y :>
 究 竟 正 覺 出 有 壞
 (13)<šy yw sy šy ky>p t'w šy :
 是 有 情 師 及 導 師
 yykd'y kykw <t'r cyn sy :>
 亦 大 記 句 達 眞 性
 (14)<lyw cy qyn sym šw š>nk c' ::
 了 知 根 心 殊 勝 者
 10
 彼 出 有 壞 之 智 身
 (15)<šy t'y> tyswyn yynsw cw< :>
 是 大 頂 旋 言 詞 主

 亦 是 智 身 自 超 出
 (16)<pyw> kyr sw cy ywnk šyk c' :>
 妙 吉 祥 智 勇 識 者
 11
 誦 彼 殊 勝 眞 實 名
 (17)šyšym šymky qwd'y ky< :>
 是 甚 深 義 廣 大 義

 無 比 大 義 勝 柔 軟
 (18)<cw šyn cwnk> šyn kyp qyw šyn ::
 初 善 中 善 及 後 善
 12
 過 去 正 覺 等 已 說

(19)<'w vy l'y cwn>k twyyn swr :

於 未 來 中 當 演 說

kyns'y kywky tyn<k cy qwq :>

現 在 究 竟 等 正 覺

.....

亦遍數數皆宣說

13 (20)t'yq'n q''w pynswq cw<nk :>

大 幻 化 網 本 續 中

テキスト D

D r (KrIV 819(recto))

5 (1)<kw swq ky l'q ''n '>ynsym< :>

具 足 喜 樂 安 隱 心

š<y y>yw <pyn *dw cy ky sw :>

示 有 忿 怒 之 形 相

(2)<'w qy cy qwq qy c>wnk swn :

於 行 正 覺 行 中 尊

cwnk <q'y l'y *syp šyn kwnk ky :>

衆 皆 來 集 身 恭 謹

6 (3)<kw py> swl'y p'k'v'n :

向 彼 如 來 末 過 鏝

.....

究竟正覺禮敬已

(4)<'w syn kw>nk ky šyn q'pcw :

於 前 恭 敬 伸 合 掌

t<'n s' cy tym šy q'w p'q :>

端 坐 正 念 而 告 白

7 (5)<pyn cw y>wq' s'q s'w yy<k :>

遍 主 與 我 作 饒 益

D v (KrIV 819(verso))

(1)<' ' c' 'yr sy *sy cw>nkšynk< :>

啞 者 一 切 字 中 勝

šy d'y lyyk <vy pyw *sy :>

是 大 利 益 微 妙 字

- 27
諸境之內出無生
.....
即此遠離於言說
(2) <šy c>wšwr cwnk šw šynk'y<n :>
是 諸說 中 殊 勝因
.....
令顯一切諸言說
- 28
大供養者是大欲
(3) <'yr sy yw sy> lyq'ňky :
一 切 有 情 令歡喜
t'ykwnk ywc<' syk t'y *cyn :>
大供 養者 即 大 曠
.
.
.
(4) <*pw 'wn pyw 'wn q'y qw t'>y :
普 聞 妙 聞 皆 廣 大
kyñcwnk sykšy qwd'y<kyn :>
顯中 即是 廣大顯
- 33
解者執持大幻化
(5) :
大幻化中成利益
t'yq'ňq'dwy kycw<nk ky> :
大幻化內 喜中 喜
t'yq<'n q' cwnk šy q'n šwr :>
大幻 化 中 施 幻 術
- 34
大施主中最為尊
(6) <t'y cy q'y cwnk cy š>wšynk :
大 持 戒 中 持 殊勝
'wd'y syñšwq sy<k kyn qw :>
於大 忍辱 即 堅 固

.....

以大精進悉棄捨

35 (7) :

以大禪定住靜慮

yyd'y cykw lycysyn :

以大 智慧 令持身

.....

具足大力大方便

.....

大願勝智是大海

36 (8) <t'y s>w swsy 'wlwpyn :

大 慈 自性 無量邊

yykšy t'ypyšy <cy kw :>

亦是 大悲勝 智慧

.....

有大智慧具大智

.....

大解即是大方便

37 (9) <kw t'y> šyñdwnk kyp t'ylyk :

具 大 神通 及 大力

.....

大力及與大速疾

(10)..... :

復大神通大名称

t'ylyk <ly t' ly swy vwq :>

大力 令 他 令 摧 伏

テキスト E (KrIV 817)

(2) cws'y 'wp<y šyp ty cwnk :>

住在 於彼 十 地 中

.....

具知十種之自性

(3) <c>y 'wšypcywnk sysyc' ::

持 於十種 清淨者

43 sypcwnk kysw <ky cwnk ky :>

十種 義相 義 中 義

.....

自在寂默十力主

(4) <s'q cw l>yyyk 'wywyw :

作 諸 利益 無有遺

kwywsypcwnk <t'y sy s'y :>

具有十種 大 自在

44

離彼無垢戲論主

(5) <cyn šw sy sy sy sy> ww< :>

真 如 自 性 清 淨 王

yynswr cysyr vwkykw< :>

言說 真實 不諱句

.....

如其所說而依行

45 (6) <'w 'w šy cwnk> šwr 'w< šy :>

於 無 二 中 說 無 二

cw<'w>cysyr pyns'y cwnk< :>

住於真實 邊際 中

テキスト F (KrIV 291)

(1) 'wnswsyly

(2) <>ysy <>yñsyñ

(3) qwy yyw< >y

(4) ::(?) šys< >

(5) ''q yyp t'mcyn q< >

(6) swqy: swvy qwnk(?)

(7) y< >cw'ly : cw' 'ym(?)

(8) y'k yyw s< >

(9) wn: swvy s< >

(10) yyp yyk s< >

(11) syv yy ''p' (?) qw'< >

(12) 'wn : v'm ywn 'ry-' <m'ncwsyry

梵 云 阿耶 曼祖悉哩 捺麻捺機磻

sy ywn swnk š-' pyw kyr sw cyn>

此 云 誦 聖 妙 吉 祥 眞

(13)sy<rm>y : kyly swdwn<k>

實 名 敬 禮 孺 童

1

復 次 吉 祥 持 金 剛

(14)<t'n tyw> vwqcnk s<yn>k< :>

難 調 伏 中 勝 調 伏

.....

勇 猛 超 出 三 界 中

(15)<sy s'y ky>mqw pyrcwnk <šynk :>

自 在 金 剛 密 中 勝

2

眼 如 白 蓮 妙 端 正

.....

面 貌 圓 滿 若 蓮 華

.....

(16)sw< šyw cyp cy šynk kym qw :>

自 手 執 持 勝 金 剛

3. 2 ウイグル文字音写『四分律比丘戒本』

3. 2. 1 <漢文テキスト>

如	清	諸	應	應	應	應	應	應	若	諸
是	淨	大	與	與	與	與	與	與	比	大
持	不	德	如	多	覓	自	不	憶	現	丘
諸	諸	我	草	人	罪	言	癡	念	前	有
大	大	已	覆	語	相	治	毘	毘	毘	諍
德	德	說	地	當	當	當	尼	尼	尼	事
是	七	當	與	與	與	當	當	當	起	諍
中	滅	與	多	覓	自	與	與	與	即	法
清	淨	如	人	罪	言	不	憶	現	應	半
淨	法	草	語	相	治	癡	念	前	除	月
默	今	覆				毘	毘	毘	滅	半
然	問	地				尼	尼	尼	月	
故	諸								說	
是	大								戒	
事	德								經	
	是								中	
	中								來	

3. 2. 2 <ウイグル文字テキスト>

テキスト G (KrIV285)

- (1) cwd'y tyksy syrpyr cyp'p p'nkwr p'nkwr swrq<'y ky cwnk l'y
諸大 德是 七滅 諍法 半月 半月 說戒 經 中 來
š'q py kyv yw cy šy *ky>
若 比丘 有 諍 事 起
- (2) syk'ynk cwpyr :: 'ynkyw kynsyn pyny twyw kynsyn py<ny 'ynk yw
即應 除滅 應與 現前 毘尼 當與 現前 毘尼 應 與
'yk tym py ny tw yw 'yk tym py ny>
憶 念 毘 尼 當 與 憶 念 毘 尼
- (3) 'ynkyw vwcy pyny twyw vwcy pyny :: 'y<nk yw sy kyn cy
應與 不癡 毘尼 當與 不癡 毘尼 應 與 自 言 治
tw yw sy kyn cy 'ynk yw pyk swy sw tw yw pyk swy sw 'ynk yw>
當 與 自 言 治 應 與 覓 罪 相 當 與 覓 罪 相 應 與
- (4) t'synkw twyw t'synkw 'ynkyw sws'w pwdy <tw yw šw s'w pw ty
多人語 當與 多人語 應與 如草 覆地 當與 如草 覆地
cw t'y tyk q' yy šwr syr pyr cy p'p *kym *'wn>
諸 大 德 我 已 說 七 滅 諍 法 今 問
- (5) cwd'y tyk sycwnk sy'sy vw :: cwd'ytyk s<y cwnk sy sy pyk *šyn qw
諸大 德 是中 清淨 不 諸大德 是 中 清淨 默 然 故
šy šy šw šy>
是 事 如 是
- (6) cy :: s'dw bwlz-wn y'mw typ mn kyys< >
持 sadu bolzun yamu tip mn kyys///
善哉！ と われ kyys///

テキスト H (Kr309)

// 龜音惠驚音敬 ///

// 月 :: 說戒竟衆來若 ///

⁽¹¹⁾ 「大正大藏經」本文の字句を注記の「宮内省図書寮本(旧宋本)」のものに入れ換えて掲げた。また、左から2行目の「不」と「諸」の間には小文字で「如是三説」と入っているが、ウイグル文字音写には対応部分がない。

// 佛當與現先 mw ny 應與 ///

(1)// kwr šwr q'y ky cwnk l'y š'q py kyv ///

月 說 戒 經 中 來 若 比 丘

(2)/// pw ny 'ynk yww 'yk tym pw ny: ///

毘 尼 應 與 憶 念 毘 尼

(3)// yww sykyncy 'ynk <yw>w pyk swy sw tw yww py<k> ///

與 自言治 應 與 覓 罪 相 當 與 覓

(4)/// yww šw s' pwtý tw yww sw s'w> ///

與 如 草 覆地 當 與 如 草

4. 音写に使用された漢字音について

ウイグル文字は音韻構造の大きく異なる漢語音を表記するにはかなり不便な文字である。この文字を用いてどのような漢語音を表示しようとしたのかを以下に論じてみたい。

後に述べるように、ここで表記された漢語音は一種の漢字音であったと推定されるので、その音価はウイグル語音に近いものであったと考えられるが、ウイグル語音に完全に適合したものではなかった。たとえば、種<中古漢語音 tɕion>は cywnk (E3)のように、ウイグル語には存在しない母音結合 iu(yw) をもって漢語の介母音を直接表示している。したがって、ここでは漢字音の再構に2段階を設定せねばならない。第1段階には漢字音がウイグル語のもつ音素目録のどの音に所属するかを推定し、第2段階において文献表記者のもつ漢字に対する実際の発音形式、すなわち漢字音の音価を推定せねばならない。たとえば、来母・魚韻の「慮」<lio>は lw と表記されている。声母はウイグル語音の l に所属し、[l]の漢字音価を立てることができる。韻母表記の w はウイグル語表記体系からはウイグル語音の o か u に所属させざるをえない。チベット文字で音写された漢文など、漢語側の情報からは両者のうちの u を選択できる。だが、実際の漢字音価はウイグル語のものよりは若干前舌位のものであったと推定できるので [v] を与えることになる。

ウイグル文献中には、大量の漢語が音写形式で導入されている。筆者はそれらについて以前に論じたことがある。そこでは、五代末から宗初の間にウイグル語訳されたと推定できる『大慈恩寺三蔵法師伝』中の漢語形式を検討し、ウイグル文献中の他の漢語形式との関係などについて述べた⁽¹²⁾。『大慈恩寺三蔵法師伝』中の漢語は翻訳当時の漢語西北方言音の一種を直接に表記したものであり、その他のウイ

⁽¹²⁾ 庄垣内(1987)。

グル文献中の借用語として定着した漢語形式と同一体系内に収まるものではあるが、字音として一般に通用していた形式を用いたとは考えられなかった。

ここでは、「ペテルブルグ所蔵文献」漢字音の再構に当たって、この、以前の筆者の記述内容を取りわけ参考にしたい。また、ウイグル文献ではないが、やはり西北方言音を表記した、チベット文字、ブラーフミー文字、ソグド文字で書かれた漢語形式⁽¹³⁾、さらに「ペテルブルグ所蔵断片」の書かれた時代である元代の漢語音形式も参考にして論じたい⁽¹⁴⁾。

4. 1 声母

ウイグル語の子音体系は次のごとくである：

p	t	k
b	d	g
(ts) č		
(f)	s š	x
v	z (ž)	γ
y		
m	n	ŋ
l		
r		

括弧内は借用語のみに使用される。č=[tʃ] š=[ʃ] ž=[ʒ]

以下、中古漢語音形式を < > に括ったが、中古漢語声母音は、『韻鏡』などに付せられた「三十六字母」に正歯音2等と喉音の喻母3等を加えた体系を用いた⁽¹⁵⁾。

4. 1. 1 唇音

4.1.1.1 重唇音

⁽¹³⁾ 以下、チベット文字音写漢文を「チベット文字資料」、ブラーフミー文字音写漢文を「ブラーフミー文字資料」、ソグド文字音写漢文を「ソグド文字資料」とよびたい。

⁽¹⁴⁾ 「元代の漢語音形式」として『中原音韻』に現れる形式を使用したい。ちなみに、元代のウイグル文献には『中原音韻』の漢語音体系に収まる借用語形式が多数みられる。

⁽¹⁵⁾ 庄垣内(1987) p.23. なお、本論における中古漢語音形式は庄垣内(1987)の記述に従った。

(1) 幫母・滂母・並母

滂母

拋 <p'au> p'w

普 <p'o> vw

並母

毘 <biěi> py~pw

便 <biɛn> pyn

白 <bak> p'q

幫母

彼 <piě> py

邊 <pien> pyn

悲 <piěi> py~vy

遍 <pien> pyn

比 <piěi> py

畢 <piět> pyr

半 <puân> p'n

本 <puən> pyn

別 <piet> pyr

井 <piɛŋ> py

中世漢語⁽¹⁶⁾への過程で、もとの平声の有声子音は有気無声音に、上去入声の有声子音は無気無声音になったので、並母も幫母（平声）と滂母（上去入声）に合流する。チベット文字資料では p p' b の区別をもつ文献もみられるが、高田氏によれば「十世紀の河西方言」では気音の対立は存在したが、声の対立は無くなって無声化していたという⁽¹⁷⁾。ソグド文字資料からは並母は無声子音であったことが推定されている⁽¹⁸⁾。

ウイグル文字にはこの3声母を区別できる表記がない。ウイグル語閉鎖音には有声と無声の対立があり、文字上その区別の可能な音は、t と d である。後に述べるように舌頭音有声の d が有声性を保持していた可能性はあるので、並母がソグド文字資料のように、無声音化していたと容易には判断できない。また、ウイグル語には気音の対立はないし、その表記法も知らない。少なくとも、幫母と滂母はウイグル語音の p の範疇に所属していた。表記者のもつ漢字音の実際の音価が、幫母[p]、滂母[p']の音価をもっていた可能性はある。並母の p もここでは p の範疇に入れておきたい。

幫母の悲と滂母の普には v- が表記されている。これらは、いずれもテキスト B (10)に現れる。悲は『真実名経』の B と同一文中のものがテキスト D (Dv8)にもみられ、そこでは py と表記されている。『慈恩伝』にはこのような v は現れないが、元朝時代のウイグル文献には八<puât> を v'r で表記した例がある⁽¹⁹⁾。この v'r

⁽¹⁶⁾ 『中原音韻』の漢語音体系を指す。

⁽¹⁷⁾ 高田(1988a) p.52, p.65, p.70 pp.107-108.

⁽¹⁸⁾ 吉田(1994) p.26.

⁽¹⁹⁾ 庄垣内(1987) p.25.

はウイグル語内での発展形式である。おそらく悲の v- も、軽唇音化形式をモデルにした、ウイグル側での類推形であろう。文字 v はウイグル語音の v 音を表示するのが常であるが、借用ソグド語の f 音を表示することもできるので⁽²⁰⁾、悲普の v- はウイグル語音の f- の範疇に所属するものと考えたい。

(2) 明母

A		B
魔 <muâ> p'	没 <muet> pyr	滿 <muân> m'n
謬 <miəu> pyw	密 <miēt> pyr	面 <miɛn> myn
貌 <mau> p['w]	默 <mək> pyk	門 <muən> mwn
妙 <miəu> pyw~p'w	覓 <miek> pyk	猛 <mag> m'
末 <muât> p'		明 <miaŋ> my
滅 <miɛt> pyr		名 <miɛŋ> my

『慈恩伝』と同じく⁽²¹⁾、韻尾に鼻子音をもたない上の A グループは p- で、もつ B グループは m- で表記されている。このような明母の脱鼻音化はチベット文字資料やソグド文字資料においてもみられる。脱鼻音化は鼻音前出子音[^mb]を経ておこなわれ、チベット文字資料やソグド文字資料にはこの音形の表示がある⁽²²⁾。しかし、ウイグル文献中の借用漢語には後に述べる泥母と同じく、前出鼻音を表記した例はない。ここでは、文字 m はウイグル語音の m, 文字 p はウイグル語音の b の範疇に所属するものと推定したい。ただし、末 p' (A6) は漢語の音写形とは考えられないので上記議論に馴染まない (cf. 4.2.7)。

4.1.1.2 軽唇音

(1) 非母・奉母・敷母

非母	奉母
不 <fiəu> vw	梵 <viuəm> v'm
法 <fiuɛp> p'p	煩 <viuɛn> v'n
方 <fiuân> vw	佛 <viuət> vyr
	復 <viuk> vwq̃
	伏 <viuk> vwq̃~vwq

⁽²⁰⁾ 庄垣内(1987) p.28.

⁽²¹⁾ 庄垣内(1987) pp.25-26.

⁽²²⁾ 高田(1988a) pp.87-88, 吉田(1994)pp.26-27.

敷母

忿 <fiuən> pyn

覆 <fiəu> pw

非敷奉の3声母はチベット文字資料からは、合流していたと推定されている⁽²³⁾。『慈恩伝』では非母奉母はふつうは文字 v で表記されている。ここでも非母と奉母は、非母の1例をのぞいてすべて v で表記されている。v は f の範疇に入るものと推定したい。ソグド文字資料でも非母奉母は f で表示されている⁽²⁴⁾。

敷母の2例、忿(A3 C2) 覆(G4)は p で表記されている。『慈恩伝』には敷母の例がないので判断はむずかしいが、この2例をもって、敷母の軽唇音化が進んでいなかったとはいいがたい。むしろ、上で例外とした非母の法(G1)の p- も含めて、ウイグル語に本来存在しない f 音を p- で表示しようとしたものか、あるいはウイグル語内で p 音化したものと考えるべきである。文字 p は p 音の範疇を表示したと推定したい。非母の法も p で表記されている。法は『四分律比丘尼戒本』に現れるので(G1)、この文献表記の特徴といえるかもしれない。チベット文字資料とソグド文字資料では非母の不が重唇音として表示されるが⁽²⁵⁾、ここでは明らかに軽唇音化している。

(2) 微母

無 <miu> 'w	鏐 <miuəm> v'n
未 <miuəi> vy	聞 <miuən> 'wn
微 <miuəi> vy	網 <miān> 'w

微母はチベット文字資料やソグド文字資料でも脱鼻韻化している⁽²⁶⁾。『慈恩伝』も文字 v で表記されている。ここでは、v のほか 'w でも表記されている。'w はウイグル語ではふつう初頭の後舌円唇母音を表示する。しかしここでは、'wpyn 無邊(A3)などのごとく初頭に立つほか、ly'wyw 令無餘(A15) q'w 化網(C20)のように、中位にも現れる。中位における後舌円唇母音の表記は ' を必要としない。この ' の使用は、後に述べる影母と同じく、声母の声門閉鎖音化を表示したのと考えられる。中世漢語あるいは近世漢語の音韻体系に近い『高昌館訳語』の微母表記にも

⁽²³⁾ 高田(1988a) pp.96-97.

⁽²⁴⁾ 吉田(1994) pp.27-28.

⁽²⁵⁾ 高田(1988a) p.98, 吉田(1994) p.26.

⁽²⁶⁾ 高田(1988a) p.95, 吉田(1994) p.27-28.

これと同じ方法がみられる：文<ɲiuən>（中古漢語）→vuən（中原音韻）→
·uən（等韻図経）'wwn（高昌館訳語）⁽²⁷⁾。ここの無間網の微母は、円唇母音と
結合して影母化した比較的新しい時代の形式といえる。文字 v の表記は v 音の範
疇に所属し、文字 ' の表記は ·[ʔ] を表示したといえる。

ただし、鏤 v'n は漢語の音写形式ではないので上記の議論に馴染まない（cf.4.
2.7）。

4. 1. 2 舌音

4.1.2.1 舌頭音

(1)端母・透母・定母

端母

多 <tâ> t'
到 <tâu> t'w
端 <tuân> t'n~-d'n
當 <tân> tw
等 <təŋ> -dynk~tynk
得 <tək> dyk
德 <tək> tyk
頂 <tien> ty
通 <tun> -dwnk~twnk

定母

大 <dâi> t'y~d'y~-d'y
第 <diei> dy~ty
地 <diēi> ty~-dy~-ty
導 <dâu> t'w
調 <dieu> dyw~-dyw
達 <dât> t'r
定 <dieŋ> -dy
童 <duŋ> twnk~dwnk

透母

他 <t'â> -d'

定母音は中世漢語では端母、透母音に合流している。ウイグル文字の d はウイグル語の語中位においては d 音以外に、しばしば t 音表記にも使用される。ここでは地の -ty(H4) 以外はすべて -d で表記されている。すなわち中位の t d 表記は中和されているといってよい。ウイグル語では本来語頭に d 音は立たないので、初頭の d 文字表記は特別な意味をもっている。端母と定母を比べてみると初頭に d の表記されているのは端母では得の 1 例であるのに対して、定母では大第調童の 4 例がある。このことは、定母の有声性が字音として残っていて、それが現れているといえなくはない。実際、次の(2)に掲げる泥母は有声子音をもっていたと推定でき

⁽²⁷⁾ 庄垣内(1987) p.100. なお、『等韻図経』とは、『重訂司馬溫公等韻図経』（除孝 1602年）のこと。

るが、やはり文字 d- は多出する。しかしもしそうなら、定母に所属する地が語中位で -t で表記されていることは逆に説明できない。一方で、チュルク語は漢語の有気音を無声音で、無気音を有声音で表示する性質があるので、端母の得を含めて d 表記が単に無気音性を表そうとした可能性もある。何れにしても、今の段階で確かな判断はむずかしい。『慈恩伝』では「定母の端母透母への合流は完了していたか、完了しかかっていたと推定」できたので⁽²⁸⁾、ここでは一応、t d 文字表記をすべて t 音に所属するものと考えておきたい。ただし、透母の音価が[tʰ]であった可能性はある。

(2) 泥母・来母

泥母

泥 <niei> ty	難 <nân> t'n~d'n
内 <nuâi> -dwy	能 <nəŋ> nynk
惱 <nâu> d'w	溺 <niek> dyk
念 <niem> dym~tym	

来母

慮 <lio> lw	利 <liěi> ly	樂 <lâk> l'q~l'q
來 <lâi> l'y	理 <liəi> ly	兩 <liân> lw
禮 <liei> ly	了 <lieu> lyw	量 <liân> lw
類 <luâi> lwy	亂 <luân> l'n	力 <liək> lyk
離 <liě> ly	蓮 <lien> lyn	令 <liəŋ> ly

明母においては、韻尾に非鼻子音をもつものは脱鼻音化した。泥母においても同様の現象がみられるが、念<niem> dym(A6)~tym(H2)と難<nân> t'n(A1 C3)~d'n(A3)は韻尾が鼻子音にもかかわらず声母は脱鼻音化している。しかし、念はソグド文字資料でも脱鼻音化しており⁽²⁹⁾、難もチベット文字資料に同じ平行例がみられるので⁽³⁰⁾、これらは西北方言において特別に脱鼻音化した単語であったといえる。なお、脱鼻音化形式の表記は d と t で表示されている。中位においては中和して -d- で表記されているが、初頭位でも難 d'n 溺 dyk(C11)のように d- が表記されるのは、やはり有声音を表示しようとしたものといえる。この音に対してチベット

⁽²⁸⁾ 庄垣内(1987) p.29.

⁽²⁹⁾ 吉田(1994) p.28.

⁽³⁰⁾ 高田(1988a) p.89.

文字資料やソグド文字資料では、鼻音前出子音[^hd]が表示されているが、ここでは、前出鼻音はなかったものと判断して、ウイグル語の d の範疇に入るものと推定したい。

来母はすべて l で表記されているので、l 音の範疇に所属する。

4.1.2.2 舌上音

知母

智 <tiě> cy

知 <tiě> cy

中 <tiung> cwnk

徹母

癡 <tiəi> cy

超 <tiəu> cyw

勅 <tiək> cyk

澄母

除 <diə> cw

住 <diu> cw

治 <diəi> cy

持 <diəi> cy

長 <diān> cw

擲 <diək> cyk

娘母

尼 <niěi> ny

澄母は中世漢語への過程で知母と徹母に合流する。また知母は正齒音照母に、徹母は穿母<tɕ>に合流する。チベット文字資料では澄母を有声音表記した文献もみられるが、「十世紀河西方言」では無声音化していたという⁽³¹⁾。ここでは、舌上音の知徹澄の3声母はすべて文字 c で表記されている。これは『慈恩伝』においても同じである⁽³²⁾。c は、ウイグル語の齒茎無声破擦音 ɕ の範疇に所属するものとした。ただし、上の定母との関係を考慮すれば澄母が有声音性をもっていた可能性もある。また徹母が[ʃ]の音価をもっていた可能性もある。娘母は「切韻系」では泥母の反切上字と混同され、泥母の範疇に入れられる。しかし、チベット文字資料では脱鼻音化はあるものの、泥母とは区別されている⁽³³⁾。この、尼<niěi> ny を泥母と比べてみると、韻尾に鼻子音をもたないのに脱鼻音化されていない点が異なっているように見える。だが、この尼 ny はいずれも『四分律比丘戒本』に pyny (G2 G3)~pw-ny(H2)として現れる。これはサンスクリット vinaya の音写形式であ

⁽³¹⁾ 高田(1988a) pp.70-72 p.108.

⁽³²⁾ 庄垣内(1987) p.31.

⁽³³⁾ 高田(1988a) p.92-93.

って、むしろ特殊な使用と考えねばならない⁽³⁴⁾。娘母は一般に泥母と同じく脱鼻音化して、泥母の範疇に所属していた可能性が大きい。

4. 1. 3 齒音

4.1.3.1 齒頭音

精母

最 <tsuâi> swy
 尖 <tsiɛm> sym
 尊 <tsuən> swn
 進 <tsiɛn> syn
 作 <tsâk> s'q̄~s'q
 即 <tsiək> syk
 精 <tsiɛŋ> sy
 速 <tsiɛk> swq̄
 足 <tsiok> swq̄~swq

清母

趣 <t'siu> sw
 切 <t'siei> sy
 此 <t'siě> sy
 次 <t'siěi> sy
 草 <t'sâu> s'w
 七 <t'siět> syr
 清 <t'siɛŋ> sy

心母

四 <siěi> sy 悉 <siět> syr
 笑 <siɛu> syw 相 <siâng> sw
 三 <sâm> s'm 性 <siɛŋ> sy
 心 <siɛm> sym

從母

坐 <dzuâ> z'~s'
 在 <dzâi> s'y
 罪 <dzuâi> swy
 摧 <dzuâi> swy
 慈 <dziəi> sy~sw
 自 <dziěi> sy~sw
 前 <dzien> syn
 疾 <dziět> syr
 淨 <dziɛŋ> sy
 靜 <dziɛŋ> sy
 情 <dziɛŋ> sy
 寂 <dziek> syk

邪母

詞 <ziəi> sy~sw 續 <ziok> swq
 旋 <ziuɛn> swyn
 祥 <ziâng> sw
 像 <ziâng> sw
 誦 <zioŋ> swnk
 頌 <zioŋ> swnk

⁽³⁴⁾ Skt.vinaya のウイグル語定着形式は vinay である。この形式と漢語音写形式 pydy との混成の可能性もある。

中世漢語への過程で従母は精母と清母とに合流する。チベット文字資料では「十世紀河西方言」で従母は無声音化して精母に合流していたという⁽³⁵⁾。『慈恩伝』ではソグド文字資料と同じく、精清従は基本的に *ts* で表記されている⁽³⁶⁾。これらに対して、ここでは1例をのぞいて他はすべて *s* で表記されている。しかしウイグル文献中の借用語の多くが *s* を用いるので、これは特別の表記ではない⁽³⁷⁾。おそらく *ts* というウイグル語に存在しない破擦音が、摩擦音として反映されたものと考えられる。ここでは *s* 表記に *s* 音を推定しておきたい。ただ、従母の坐は *s* のほか *z* でも表記されている。文字 *s* はウイグル語では *s* 音のほか *z* 音も表示する。文字 *z* は母音文字を直接後続させることができないので、母音に前接する場合は分かち書きせねばならず、しばしばこれに *s* を代用する。ここで *t'ñz-* 端座(A6)の *z* が特に有声音を表わそうとしたことは確かで、従母になお有声音が存在した可能性はある。したがって、従母の *s* はすべて *z* 音の範疇に入れるべきかもしれないが、先に推定したとおり、*s* を掲げておきたい。ただし、例外的に現れたこの文字 *z* には *z* 音を当てておきたい。

一方、中世漢語への過程で有声音をもっていた邪母は心母に合流する。チベット文字資料にもこの合流はみられる⁽³⁸⁾。『慈恩伝』と同様に⁽³⁹⁾、ここではすべて *s* で表記されている。この *s* を *s* 音の範疇に入りたい。

4.1.3.2 齒上音・正齒音

(1) 莊母・照母・穿母

莊母

諍 <tsǎŋ> cy

穿母

出 <tɕiuë̃t> cwr

称 <tɕiəŋ> cynk

照母

者 <tɕia> c'

執 <tɕiəp> cyp

種 <tɕiəŋ> cwnk~cywnk

呪 <tɕiəu> cyw

眞 <tɕië̃n> cyn

諸 <tɕio> cw

掌 <tɕiāŋ> cw

主 <tɕiu> cw

正 <tɕiɛŋ> cy

之 <tɕiəi> cy

衆 <tɕiug> cwnk

⁽³⁵⁾ 高田(1988a) p.108.

⁽³⁶⁾ 庄垣内(1987) p.32, 吉田(1994) p.31.

⁽³⁷⁾ 庄垣内(1987) p.33.

⁽³⁸⁾ 高田(1988a) p.108.

⁽³⁹⁾ 庄垣内(1987) pp.33-34.

中世漢語への過程で莊母と照母は合流する。チベット文字資料ではこの2声母に区別があったとされるが⁽⁴⁰⁾、ここでは『慈恩伝』と同じく⁽⁴¹⁾、これに穿母も含めてすべて c で表記されている。この c を、無声破擦音 č の範疇に入れておきたい。ただし、穿母の č が[ʃ]の音価をもっていた可能性はある。

(2) 牀母・山母・神母・審母・禪母

牀母		審母
事 <dzīəi> sy		捨 <qia> š'
		手 <qīəu> syw~š(yw)
神母		舒 <qio> šw
舌 <dziət> šyr		世 <qīəi> sy
神 <dziēn> šyn~syn		施 <qīē> šy
實 <dziēt> šyr~syr		深 <qīəm> šym
術 <dziuēt> šwr		十 <qīəp> šyp~syp
乘 <dziəŋ> synk		說 <qīuət> šwr~swr
		伸 <qīēn> syn~šyn
山母		身 <qīēn> šyn~syn
師 <šīēi> šy		勝 <qīəŋ> synk~šynk
色 <šīək> šyq		識 <qīək> šyk
生 <šan> sy		聖 <qīəŋ> š'
		釋 <qīək> šy(k)
禪母		
殊 <ziu> šw~sw	善 <ziən> syn~šyn	
時 <ziəi> šy	上 <ziāŋ> sw~šw	
是 <ziē> šy~sy	成 <ziəŋ> šynk~šw~šy	
甚 <ziəm> šym		

チベット文字資料では神母禪母は無声化しており、神審禪と牀山はそれぞれ合流して q と š になったと考えられている⁽⁴²⁾。ウイグル文字 s はウイグル語の硬口蓋齒茎音の š も表示できる。一方でウイグル語には頻繁に使用されることはないが、š を表示するのに文字 š も用いられる。ここでは山神審禪の表示に š が多用され

⁽⁴⁰⁾ 高田(1988a) p.54 pp.57-58.

⁽⁴¹⁾ 庄垣内(1987) p.34.

⁽⁴²⁾ 高田(1988a) p.108.

ている。これは、これらの声母が硬口蓋の特性をもった子音であることを示そうとしているのである。山神審禪では、文字 *s* と *š* が *ś* 音を表示したものといえる。牀母は1例しかないが、その *s* も *ś* の範疇にあると考えたい。

(3) 日母

如 <nzio> sw~šw	饒 <nziəu> šyv~s'w	辱 <nziok> šwq̄
汝 <nzio> sw	人 <nzien> syn	
孺 <nziu> sw	忍 <nziěŋ> šyn	
而 <nziəi> sy	若 <nziak> š'q̄~š'q	

日母の鼻音性はチベット文字資料においても無くなっている⁽⁴³⁾。ここでは *s* と *š* で表記されている。『慈恩伝』ではこの声母に *ś* の有声音 *ž* を表す専用文字を使用している⁽⁴⁴⁾。ウイグル語で文字 *s š* は *ś* とともに *ž* も表示できるので、日母の *s š* が *ž*[ʒ] 音の範疇にあるものと推定したい。

4. 1. 5 牙喉音

4.1.5.1 牙音

(1) 見母・溪母・群母

見母

A		B
果 <kuâ> q'	剛 <kân> q̄w~qw	迦 <kiâ> k' 竟 <kian> ky
鉤 <kəu> qyw	廣 <kuân> qw~q̄w	句 <kiu> kw 經 <kien> ky
固 <ko> q̄w	光 <kuân> qw	記 <kiəi> ky 恭 <kion> kwnk
故 <ko> qw~q̄w	覺 <kək> qwq̄~qwq	其 <kiəi> ky 供 <kion> kwnk
解 <kaï> q'y~q'y	~q̄wq̄	究 <kiəu> kyw~k'w
界 <kăi> q'y		金 <kiəm> kym
皆 <kăi> q'y~qyy		堅 <kien> kyn
戒 <kăi> q'y		謹 <kiən> kyn
告 <kâu> q'w		緊 <kiěŋ> kyn
合 <kâp> q'p~q'p		吉 <kiět> kyr
間 <kăn> q'n~q'n		敬 <kian> ky
根 <kən> qyn		境 <kian> ky

⁽⁴³⁾ 高田(1988a) pp.100-101.

⁽⁴⁴⁾ 庄垣内(1987) p.36.

溪母

A

巧 <k'au> q'w

B

丘 <k'iau> kyv

器 <k'iəi> ky

群母

具 <giu> kw

勤 <giən> kyn

偈 <giɛi> ky

極 <giək> kyk

及 <giəp> kyp

チベット文字資料「十世紀河西方言」では見群は無気無声音として合流し、有気無声音の溪母と対立した⁽⁴⁵⁾。ここでは見母と溪母には q ḡ k の3種の表記がみられる。q と ḡ とは各声母を通して自由交替するので音声上の区別はなかった。q(ḡ) と k とは韻母の性質に依拠して補いあう関係にある。すなわち1・2等韻母に結合する声母は q で、3・4等韻母に結合する声母は k で表記される。上では前者をA類、後者をB類とした。ウイグル語では q は後舌母音と結合し、k は前舌母音と結合する。ここでも3・4等韻母は i あるいは iu 介音をもつので、k は前舌母音と結合したことになり、q は1・2等韻の後舌母音と結合したことになる。ウイグル語における q と後舌母音、k と前舌母音の結合は固く、子音、母音ともに口蓋の前後で大きな差異をもっている。もともと漢語音の1・2等韻と3・4等韻母の違い(前舌-後舌)が大きかったのか、それらに先行する声母の違い(軟口蓋前部-後部)が大きかったのか、あるいはその両方であったに違いない。ちなみに、ウイグル語では、サンスクリットからの借用語で後舌母音 a o u の前に文字 k はふつうに表記される。また、後期仏典では漢語からの借用語においても k は i 介音をもたない韻母に前接する。この q と k の使い分けは『慈恩伝』にも同様のものがみられ⁽⁴⁶⁾、やはり当時の漢語音の性質を反映していたものと考えられる。

群母は k で表記されている。有声と無声の違いはウイグル文字には表記できない。定母に有声音表記の目だつことを考慮すれば有声性の存在した可能性を否定できないが、ソグド文字資料でも群母の無声化は進んでいた⁽⁴⁷⁾、ここでは一応無声音として扱いたい。見母と溪母の気音の対立も表記されえない。見溪母の q(ḡ) がウイグル語音の q の範疇、見溪群母の k が k の範疇にあるものとしたい。ただし、

⁽⁴⁵⁾ 高田(1988a) p.108.

⁽⁴⁶⁾ 庄垣内(1987) pp.37-38.

⁽⁴⁷⁾ 吉田(1994) pp.34-35.

溪母 q k の音価が[q̣][ḳ]であった可能性はある。

(2) 疑母

A

我 <ŋâ> q' ~ q'

岸 <ŋân> q' n ~ q' n

C

言 <ŋien> kyn ~ yyn

B

語 <ŋio> kw

義 <ŋiě> ky

業 <ŋiep> kyp

願 <ŋiuən> kwn

月 <ŋiuət> kwr

仰 <ŋiân> kw

Aは介母をもたず q で表記され、Bは i 介母をもって k で表記されている。チベット文字資料では疑母は鼻音前出子音 ¹g が現れる⁽⁴⁸⁾。ソグド文字資料にもこの鼻音前出子音はみられる⁽⁴⁹⁾。ここでは、Cの言の1例をのぞいて見母などと同じ表記がおこなわれていて、鼻音性は表示されていない。すでに口音化したものと考えられる。言はテキストC(15)E(5)に y- で表記されている。疑母は中世漢語では影母に合流するが、この表記は影母への合流の過程を反映した形式と考えられる。文字 y は y 音の範疇にあった。Bの文字 k はウイグル語音 g の範疇にあるといえる。ただし、言の例から g の音価が閉鎖音というより摩擦音化された子音[ɣ^j]~[ɣ]であった可能性は大きい。チベット文字資料でも疑母を h で表記した例がみられる⁽⁵⁰⁾。文字 q(q̣)には、ウイグル語で g の口蓋位の対音となっている ɣ を当てることができる。音価は[ɣ]~[ɣ]が推定できる。

4.1.5.2 喉音

(1) 影母

於 <·io> 'w

因 <·iěŋ> 'yn

威 <·iuəi> 'w

一 <·iět> 'yr

畏 <·iuəi> 'wy

惡 <·âk> ''q̣

音 <·iəŋ> 'ym

應 <·iəŋ> 'ynk

安 <·ân> ''n

憶 <·iəŋ> 'yk

怨 <·iuən> 'wn

益 <·iəŋ> yyk~(y)yk

⁽⁴⁸⁾ 高田(1988a) p.86, p.109.

⁽⁴⁹⁾ 吉田(1994) p.34, p.36.

⁽⁵⁰⁾ 高田(1988a) p.86, p.91.

影母と結合する韻母の母音は常に初頭位に立つウイグル文字形で表記される: 'w qy 於行(A5) cy'wq̄d'y 持於廣大(B4) s'm''q̄sw 三惡趣(A18)。'w(於)や''q(惡)の''は初頭位の形式にかかわらず中位にも表記されている。この表記は'をもって前接する韻尾との区別を示しているとも考えられる。しかし、たとえば、lyšwyyn 令舒演(A17)の喻母演が yyn であって、'yyyn とは表記されないように、ほかの声母にはそのような表記はみられない。ここでは母音の初頭位の形式を用いることによって、声門閉鎖音を表示しようとしたものと推定できる。すなわち、'が声門閉鎖音を表示していると考えれば理解しやすい。ソグド文字文献においても同様の表記がみられる⁽⁵¹⁾。'は·[ʔ]を表示したと推定したい。ただし、益は yyk̄q' 益我(A7) lyyyk 利益(A20)⁽⁵²⁾のごとく常に y- で表記されていて'は無いので、喻母に合流した形式と考えて、y を推定した。

(2) 曉母・匣母

曉母

A	B
華 <χua> q̄'	諱 <χiuəi> ky
化 <χua> q-' ~ q' ~ q̄'	喜 <χiəi> ky
海 <χâi> q̄'y	顯 <χien> kyn
歡 <χuân> q̄'n	向 <χiân> kw

匣母

A	B
後 <χəu> qyw	横 <χuan> qw
壞 <χuăi> q'y	慧 <χiuei> kw
幻 <χuân> q̄'n ~ q'n	現 <χien> kyn
遇 <χât> k' ⁽⁵³⁾	形 <χien> ky
行 <χan> qy	

⁽⁵¹⁾ 吉田(1994) p.37.

⁽⁵²⁾ Dv1 では、利益は lyyk と表記されている。ウイグル語には文字 y が連続するときその一つを省略することはしばしばみられるので、ここでも lyyyk と書かねばならないところを省略して lyyk と表記したものと考えたい。

⁽⁵³⁾ 遇は『広韻』に従えば「烏葛切」(沈(1985)p.114.)とあって影母をもつが、『集韻』では「何葛切」(卷之九 入声上 曷第十二)とあり匣母をもつので、ここでは匣母として扱った。『集韻』北京市中国書店 1983年 下巻 pp.1417-1418.

中世漢語への過程で匣母は曉母に合流していた。チベット語文献にも両韻の区別はない⁽⁵⁴⁾。ここでは、両韻とも q ħ k で表記されている。q と ħ とは自由に交替するので音声上の違いはない。k, q(ħ) と韻母との結合は見母などと同じように i iu 介音をもつ B 類が前者と結合し、もたない A 類が後者と結合する。q(ħ) は χ, k は x を表示したと推定したい⁽⁵⁵⁾。遇 <yât> に対しては q' ではなく、k' (A6 Dr 3) が当てられている。遇はサンスクリットの非漢語経由の音写語 p' k' v' n 「末遇鏤」の構成要素であるから、上記議論に適合しない (cf. 4.2.7)。

(3) 喻母

A (開口)

與 <yio>4 yw ~ yww
有 <hiu>3 yw ~ yyw
餘 <yio>4 yw
異 <yio>4 yy
已 <yio>4 yy
以 <yio>4 yy
演 <yien>4 yyn
養 <yian>4 yw
亦 <yiek>4 yyk
雄 <hiun>3 ywnk

B (合口)

圍 <hiuæi>3 vy
爲 <hiuě>3 vy
遺 <yiuěi>4 yw
遠 <hiuæn>3 yyn
圓 <hiuæn>3 wyn
云 <hiuæn>3 ywn
王 <hiuân>3 ww
勇 <yion>4 ywnk
欲 <yioċ>4 ywq

中世漢語への過程で喻母は影母に合流するが、ここでは両者は明確に区別されている。喻母に関してチベット文字資料では、3等音と4等音との間、開口と合口との間には表記上の若干の違いがみられるが、高田氏はこれらは一まとめにできるものとし、「十世紀河西方言」音 /j/ を掲げている⁽⁵⁶⁾。一方、『慈恩伝』では、3等 <h> 4等 <y> とは無関係に、開口韻母と結合して y、合口韻母と結合して w で表記されている。ただ合口4等の唯と維は v- で表記されている⁽⁵⁷⁾。ここでは圓王

⁽⁵⁴⁾ 高田(1988a) pp.79-80, (1992) p.15.

⁽⁵⁵⁾ 先にウイグル語子音体系では x のみを掲げて χ は掲げなかった。しかし、ウイグル語では、xan 「ハーン」を表示するときには q' n と表記し、maxiřvari (<Skt. maheřvara) を表示するときには m' kyřv' ry と表記するので、実際にはウイグル語の x には χ と x の2種が存在したと考えておかしくない。

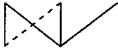
⁽⁵⁶⁾ 高田(1988a) pp.102-108.

⁽⁵⁷⁾ 庄垣内(1987) pp.41-43.

をのぞけば、合口は *v* と *y* で表記されている。しかし実際には、ほかの文献の草書体文字と同じく、文字 *y* と *v* との間には字形上の区別はない。ここで、3等合口の圓 <hiuən>3 wyn(C1) 王 <hiuân>3 ww(E5) は2例ではあるが *w* をもっている。この *w* は『慈恩伝』の合口の *w* と平行するものであり、やはりここでも、3等、4等に関係なく合口韻母の唇音性は声母に融合し、声母が唇音化したものと予め判断して、文字 *v* を与えたのである⁽⁵⁸⁾。すなわち、開口韻には *y* 音を、合口韻には *v* 音を推定できる。*v* の音価は接近音の [w] か両唇有声摩擦音の [β] であった可能性が大きい。圓王の *w* には *w*[w] を立てておきたい。ただし、ここで、云 ywn(A0 F12) 勇 ywnk(A1 A3 B14 C16) 遺 yw(B22 E4) 欲 ywq(B1 B18) のように韻母の核母音が円唇音 *w* をもつものは声母の唇音化はなかったと考えて、*y* 音を推定した。『慈恩伝』でも声母 *w*- *v*- と結合する韻母の核母音はすべて非円唇母音である。なお、ブラーフミー文字資料にも喻母は開口韻には *y* が、合口韻には *v*, *yv*, *uv* が表記されるという⁽⁵⁹⁾。

4. 1. 6 中古漢語音、ウイグル文字、ウイグル字音の関係図

破線で示した形式は例外的な存在である。

	重唇音				軽唇音			
	幫	滂	並	明	非	敷	奉	微
中古漢語	p	p'	b	m	f	f'	v	ɱ
								
ウイグル文字	v	p	p	m	p	v	v'	
ウイグル漢字音	f	p	b	m	p	f	v	
	1. 鼻韻韻尾をとまなう				1. w 表記と結合する			

⁽⁵⁸⁾ 『慈恩伝』では文字 *v* と *y* とは字形上の区別がある：庄垣内(1987) p.42 注28 参照。

⁽⁵⁹⁾ Cf. Emmerick/Pulleyblank(1993): Normally /H/, which occurred only before high front i or y, appears as y before LMC i, and as v, yv, or uv, representing alternative approximations of a front rounded [y], before LMC y. (p. 40).

舌頭音

端 透 定

t t' d

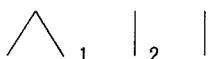


d~t

t

泥 娘 来

n n l



d~t n n l

d n n l

齒頭音

精 清 從 心 邪

ts ts' dz s z



s z

s z

1. 鼻音韻尾をとこなう

2. 尼

正齒音・舌上音

莊 照 穿 知 徹 澄

ts tg t' t' d



c

č

牀 神 山 審 禪 日

dz dz s q z nz



š

s

ž

s

š

š

ž

ž

牙音

見 溪 群

k k' g



q(č) k q(č) k y

q k y g y

喉音

影 曉 匣 喻(開) 喻(合)

· x y h/y h/y



' y q k y v w

· y x y v w

1. 3・4 等韻母に結合 2. 言 3. 益 4. 開口音韻母に結合

4. 1. 7 声母の特徴

4. 1~6で考察した結果をふまえて、「ペテルブルグ所蔵断片」の声母の特徴を、主に『慈恩伝』との比較において考えてみたい。

閉鎖音の気音の有無は『慈恩伝』と同じく、ここのウイグル文字でも表示できない。声の有無はウイグル文字としては t と d が区別できる。『慈恩伝』では観察できなかったが、ここでは定母が端母透母と比べて d 文字使用に優っているので、閉鎖音系列にも有声性が保たれている可能性は否定できなかった。

鼻音韻尾をもたない鼻音声母の脱鼻音化は『慈恩伝』においてもみられた。ここ

では、『慈恩伝』には例を得られなかった泥母の例が存在し、やはり脱鼻音化して d になっていることがわかった。また、難と念が鼻音韻尾をもちながらも脱鼻音化しており、それがソグド文字資料やチベット文字資料と平行することもわかった。

牙音と、喉音の曉母匣母が 1・2 等韻母と結合するときは q で表記され、3・4 等韻母のときは k で表記される点、あるいは、喻母が、開口音と結合するときは非唇音、合口音と結合するときは唇音で表示される点は『慈恩伝』と平行した。

一方、『慈恩伝』と比べて新しい形式と推定できるものもある。精清従の 3 声母は『慈恩伝』では ts で表記され [ts] を表示したのに、ここではすべて s で表記され、心母や邪母と同じく摩擦音を表示する。ウイグル文献中の借用漢語では、この s 表記はとくに後期文献にみられるので、やはり新しい時代の音表示と推定できる。また、重唇音に現れる v 表記や、軽唇音の p 表記もウイグル語内における発展形を表示したものと考えられる。さらに、微母の無聞網が影母化するのも新しい発展である。なお、疑母の言が k とならなで y 表記をもつのも影母化への過程を示すものといえる。

4. 2 韻母

ウイグル語の母音体系は次のごとくである：

	前舌		後舌		
高	i	e	ĩ	ü	u
低	ä	a	ö		o

中古漢語音形式は < > に括った。 e=[ɛ] ä=[ɛ] a=[ɑ]
ĩ=[ɪ]or[i] ü=[y] ö=[ø]

4. 2. 1 果仮摂

歌韻

多 <tâ>1 t'
他 <t'â>1 -d'
我 <ŋâ>1 q' ~ q'

戈韻

魔 <muâ>1 p'
坐 <dzuâ>1 z' ~ s'
果 <kuâ>1 q'

迦 <kiâ>3 k'

麻韻 3 等

者 <tqia> c'

麻韻 2 等

捨 <qia> s'

華 <χua> q' 化 <χua> q-' ~ q' ~ q̣-'

歌韻 1 等開口<â>が ' で表記されている点は『慈恩伝』と同じである。' はウイグル語音の a[u] を表示するので、ここでも同じ a の範疇に所属すると考えたい。戈韻 1 等合口の魔<muâ> p' は唇音声母をもつ。介音の唇音性はチベット文字資料あるいは『慈恩伝』などと同じく声母に吸収されるので、この場合の合口音は開口音と同じ扱いを受ける⁽⁶⁰⁾。魔の ' は歌韻と同じく a に所属するといつてよい。だが、坐<dzuâ> z' (A6)~s' (A16) と果<kuâ> q' (C12) あるいは、麻韻 2 等の華<xua> q' (C1), 化<xua> q-' (B5)~q' (B6 C20)~q-' (B6 Dv5) はいずれも介音の合口性が表示されていない。チベット文字資料では合口性はふつうに表示されているし⁽⁶¹⁾、『慈恩伝』においても華 qw' のごとく牙喉声母と結合して合口性は w で表示される⁽⁶²⁾。合口性が、牙喉音声母においてさえ表示されないのは、これら「ペテルブルグ所蔵断片」の特徴といえる。歌韻 3 等開口の迦<kiâ> k' (A17) は i 介音に対応する文字 y が表記されていない。見母が k' で表記されているのは韻母母音の前舌音性を示しているので、' が前舌音の範疇にあると考えたくなるが、漢字迦はここでも「釋迦」syk' に用いられるように、もともとサンスクリット音 ka kha ga の表記に作られたものである。したがってこの ' は a の範疇に所属するものとしたい⁽⁶³⁾。麻韻 3 等<ia>は ' で表記されている。チベット文字資料ではふつう ya で表記されているが、「口蓋子音」c j sh の後は a が表記されているという⁽⁶⁴⁾。上掲の、者<tqia> c' (A3 A9 A16 etc.) 捨<qia> š' (A15)の ' もそれと平行している可能性はある。この ' には ä を推定したい。

4. 2. 2 遇 撮

模 韻

普 <p'o>1 vw
固 <ko>1 qw
故 <ko>1 qw~qw

虞 韻

無 <miu>3 'w 具 <giu>3 kw
住 <diu>3 cw
趣 <tšiu>3 sw
主 <tgiu>3 cw
殊 <ziu>3 šw~sw
孺 <nziu>3 sw
句 <kiu>3 kw

⁽⁶⁰⁾ 高田(1988a) p.114,p.306 庄垣内(1987) p.75.

⁽⁶¹⁾ 高田(1988a) p.306.

⁽⁶²⁾ 庄垣内(1987) p.75.

⁽⁶³⁾ 高田(1988a) p.114 参照。

⁽⁶⁴⁾ 高田(1988a) p.115.

魚韻

慮 <lio>3 lw	汝 <nzio>3 sw
除 <dio>3 cw	語 <gio>3 kw
諸 <tqio>3 cw	於 <io>3 'w
舒 <qio>3 šw	餘 <yio>4 yw
如 <nzio>3 sw~šw	與 <yio>4 yw~yww

『一切経音義』⁽⁶⁵⁾では模韻<o>は u になる。ここでの模韻表示 w もウイグル語の u[u] の範疇に属すものと考えてよい。チベット文字資料では、魚韻<io>の音価を[y]、虞韻<iu>の音価を[iu]と推定しているのに対して⁽⁶⁶⁾、ここでは魚韻虞韻とも、ウイグル文字の w で表記されている。w は第2音節以下ではウイグル語の ü [y] も表示できる。例えば魚韻の慮は靜慮 sylw(B9)と書かれているので、末尾に表記された w が ü を表示したということもできる。しかし、第1音節では若干の制限はあるが、ü[y] は wy と表記されるのがふつうであるのに、ここでは、除罪 cw swy(A21) 具足 kwsqw(B9) のように、第1音節位にありながら、除<dio> 具<giu>は wy ではなく w で表記される。このような w 表記がウイグル語の ü の範疇に属すとするにはウイグル文字の表記法から若干の無理がある。また、虞韻がここで [iu] の音価をもっていたとするなら、たとえば尤韻には呪<tqiau> cyw(A13 A25 B15 B17) 究<kiu> kyw(A7 A9 A17 C10 C12 C19)のごとく yw による iu 表示がみられるので、ここでも同様の表記をしたにちがいない。『慈恩伝』においても、魚韻虞韻を表示する wy あるいは yw はみられない⁽⁶⁷⁾。したがって、この魚韻虞韻の w はウイグル語の u の範疇に入るものとせざるをえない。だが、魚韻の語<gio>、虞韻の句<kiu> 具<giu>は声母に q- ではなく、k- を立てている。ウイグル語音の k, g は借用語以外は前舌母音と結合するので、この魚虞韻の u が [u] よりは前よりの音価[ɯ]をもっていたと推定したい。ただ、軽唇音声母と結合する虞韻は模韻に合流するので、無 <miu> 'w(A3 A8 A15 A27 Dv8 E4 E6)の w は [u] の音価をもっていたといえる。また喻母と結合する開口3・4等の介母要素も声母に吸収されるとみなして、餘<yio> yw(A15)や與<yio> yw(A7 B2 B12 C9 Dr5 G2 G3 G4)の w が [u] の音価をもっていたと考えたい。『慈恩伝』には模韻、魚韻、虞韻ともに、ww の表記がしばしばみられた⁽⁶⁸⁾。ここでも、魚韻の與 に yww(H3 H4) と表記される

⁽⁶⁵⁾ 慧琳(736-820)撰。河野(1968)の記述を参照した。

⁽⁶⁶⁾ 高田(1988a) pp.118-119.

⁽⁶⁷⁾ 庄垣内(1987) p.76.

⁽⁶⁸⁾ 庄垣内(1987) p.76.

ものがある。ウイグル語には ww の表記が偶に現れて、長母音 ū を表示するので、この ww もその音に属するものとしたい。

4. 2. 3 蟹 韻

哈 韻

來 <lâi>1 l'y

在 <dzâi>1 s'y

海 <ɣâi>1 q'y

灰 韻

内 <nuâi>1 -dwy

類 <luâi>1 lwy

罪 <dzuâi>1 swy

摧 <dzuâi>1 swy

泰 韻

大 <dâi>1 t'y~d'y~-d'y

最 <tsuâi>1 swy

皆 韻

界 <kăi>2 q'y 壞 <ɣuăi>2 q'y

皆 <kăi>2 q'y~qyy

戒 <kăi>2 q'y

佳 韻

解 <kaï>2 q'y~q'y

祭 韻

世 <giei>3 sy

偈 <giei>3 ky

齊 韻

第 <diei>4 dy~ty

泥 <niei>4 ty

禮 <liei>4 ly

切 <tsiei>4 sy

慧 <yieui>4 kw

『一切経音義』では1等字の哈<âi>と泰<âi>、および2等字の佳<kaï>と皆<kăi>はそれぞれ合流して2類に収まる。チベット文字資料ではこの2類の区別は表示されている⁽⁶⁹⁾。これら4韻の開口音は『慈恩伝』ではすべて'yで表記され、この2類の違いは表示されていない⁽⁷⁰⁾。ここでも、大方は'yで表記されている。皆韻2等の皆qyy(B5)はほかの'yの'に対してyで表記されている。yの使用は明らかに'よりは狭い母音を表示しようとしたものである。qyyの-yyは-iiの範疇に所属するものと考えたい。iはウイグル語では[i]あるいは[ɯ]の音価を表すが、ここでは[ə]に近い音価をもっていたと推定したい。牙音声母をもつこの-iiは、牙喉音声母と結合する2等韻母の拗音化を示すものと考えられる。哈泰佳

⁽⁶⁹⁾ 高田(1988a) p.121.

⁽⁷⁰⁾ 庄垣内(1987) p.69.

皆の4韻を表記した 'y は後舌母音と結合する q をもつことから、ウイグル語音 ai の範疇に所属するが、佳皆の a はその拗音化を考慮するなら、ウイグル語の [a] よりは若干前よりの母音 [a] であったと推定できる。灰韻 <uâi> と、泰韻合口 <uâi> は『一切経音義』では合流している。チベット文字資料ではこの合流韻母は <円唇介音 + 核母音> で表示されているが⁽⁷¹⁾、ここでは泰韻灰韻は『慈恩伝』と同じく⁽⁷²⁾、wy で表記されている。すなわち円唇介音は核母音と縮合している。1等音であることを考慮してこの wy を oi の範疇に入れておきたい。ちなみにブラーフミ一文字ウイグル語文献中の借用漢語である槐 <yüăi>2 は hoy と綴られている⁽⁷³⁾。しかし『中原音韻』では灰韻は齊微韻と合流して ui となるし、泰韻合口の最 <tsuâi> も同じく ui となるので、ここの wy が ui に近い音をもっていた可能性もある。皆韻合口 <uăi> もチベット文字資料では <円唇介音 + 核母音> で表示されている⁽⁷⁴⁾。『慈恩伝』でも、槐 <yüăi> qwy 懷 <yüăi> qwy のごとく wy が表記され、介音の唇音要素は反映されている⁽⁷⁵⁾。だが、ここでは 壞 <yüăi> q'y (A9 A17 A23 A26 B13) の例がみられ、しかも喉音声母と結合しているにもかかわらず開口音と同じ表記がなされている。q'y の 'y は開口音と同じ ai の範疇に属するものと推定したい。

祭韻 <iei> と齊韻 <iei> は『一切経音義』では合流している。ここでは開口音は兩韻とも y で表記されている。『慈恩伝』には齊韻の例がみられ、同じように y で表記されている⁽⁷⁶⁾。この y が i の範疇に入るのか、e の範疇に入るのか、判断はむずかしい。ただ、『中原音韻』では祭韻齊韻の多くは齊微韻 i になっているので、i に所属するものとしておきたい。齊韻合口の慧 <yieui> kw (A4 B4 B9 B11 Dv 7) に対して、『慈恩伝』では kwy のごとく韻尾の i 形式を表示している⁽⁷⁷⁾。kw の -w は介音、核母音、韻尾が縮合した形式といえる。kw はすべて智慧 cykw として第2音節を構成するので w は u か ü の範疇に入る。ここではほかとの平行性を考慮して u[u] に所属するものとした。

⁽⁷¹⁾ 高田(1988a) p.121.

⁽⁷²⁾ 庄垣内(1987) p.70.

⁽⁷³⁾ 庄垣内(1987) p.70.

⁽⁷⁴⁾ 高田(1988a) p.121.

⁽⁷⁵⁾ 庄垣内(1987) p.70.

⁽⁷⁶⁾ 庄垣内(1987) p.69.

⁽⁷⁷⁾ 庄垣内(1987) p.70.

4. 2. 4 止 摂

微 韻

未 <ɱiuəi>3 vy
微 <ɱiuəi>3 vy
威 <·iuəi>3 'w
畏 <·iuəi>3 'wy
諱 <ɣiuəi>3 ky
圍 <ɦiuəi>3 vy

之 韻

事 <dʒiəi>2 sy
寢 <ʈiəi>3 cy
持 <ɖiəi>3 cy
治 <ɖiəi>3 cy
理 <liəi>3 ly
慈 <dʒiəi>4 sy~sw
詞 <ʒiəi>4 sy~sw
之 <tʂiəi>3 cy
時 <ʒiəi>3 šy
而 <nʒiəi>3 sy
記 <kiəi>3 ky
其 <kiəi>3 ky
喜 <ɣiəi>3 ky
異 <yɪəi>4 yy
已 <yɪəi>4 yy
以 <yɪəi>4 yy

支 韻

彼 <piě>3 py
離 <liě>3 ly
智 <ʈiě>3 cy
知 <ʈiě>3 cy
此 <tʂiě>4 sy
施 <qiě>3 šy
是 <ʒiě>3 šy~sy
義 <ɲiě>3 ky

爲 <ɦiuě>3 vy

脂 韻

師 <ʂiěi>2 šy
悲 <piěi>3 py~vy
比 <piěi>4 py
毘 <biěi>4 py~pw
地 <diěi> ty~-dy~-ty
尼 <niěi>3 ny
利 <liěi>3 ly
次 <tʂiěi>4 sy
自 <dʒiěi>3 sy~sw
四 <siěi>4 sy
器 <kiěi>3 ky

遺 <yiuěi>4 yw

『一切經音義』では止摂の支脂之微の4韻は合流していた。開口音は『慈恩伝』では y で表記された⁽⁷⁸⁾。ここでも基本的には y で書かれているが、w を持つ文献もある： 慈<dʒiəi> sy(A4 A7 A20)~sw(B10 Dv8) 自<dʒiěi> sy(A1 A4 A10 A16 A17 A19 H3)~sw(B10 B22 C1 C4 Dv8 F16)~šw(B18) 詞<ʒiəi> sy(A25)~sw

⁽⁷⁸⁾ 庄垣内(1987) p.72.

(C15) 毘<biěi> py(G2 G3)~pw(H2). これらのうち、毘をのぞけば、声母には歯頭音が立つ。同じく歯頭音と結合して、ブラーフミー文字資料には i から発展した母音 ɿ が現れるという⁽⁷⁹⁾。母音 ɿ は非円唇舌尖音であるが、後舌部分は軟口蓋へ盛り上がる。ウイグル文字の w はウイグル語音の u を表示する。おそらく w を用いて [ɿ] に類似する音価を表示しようとしたものであろう。少なくともテキスト B C, D, F の表記者のもつ漢字音には、歯頭音声母と結合する止摂開口音として [ɿ] か、それに類似する母音が存在した。それをウイグル語音 u の範疇に反映させたと推定できる。一方、ほかのテキストに同様の母音が無かったとはいえない。むしろ文字 y の中にそれが反映させられていると考えるのが自然であるので、ここでは、歯頭声母と結合する y は、ウイグル語の i の範疇にあったと考えたい。一方、毘に対する pw(H2) の表記は 2 つの可能性が考えられる。第 1 は、現代西北方言では毘が [pɿ] の音価をもつ地域があるので、それと同じ音が元代にはすでに存在し、それを pw によって表示しようとした⁽⁸⁰⁾。第 2 は、[ɿ] 音とは関係せず、単に唇音声母に韻母が同化した音形式 [pu] を表示しようとした。いずれが事実か判断できないが、唇音声母に結合する w はテキスト H の 1 例だけなので、ここでは第 2 の可能性を強調しておきたい。なお、『慈恩伝』には上のような、歯頭音声母と結合する w はみられない。

合口音は、y, w, wy で表記されている。wy をもつのは影母と結合する畏<·iuəi> 'wy(B15) のみである。一方、影母と結合する威<·iuəi> 'w(A3 C3) は -w で表記されている。w 表記には喻母と結合する遺<yiuēi> yw(B22 E4) もある。また喻母との結合形にはほかに圍<fiuəi> vy(B3), 爲<fiuē> vy(A8 A15 A18 A20 A22 B7) があり、-y で表記される。だが、これら wy と w, w と y の関係を明確にすることは今のところできない。微母と結合する未<miuəi> vy(A14), 微<miuəi> vy(A18) の -y は中世漢語の vi の -i と平行するが、これは介音の唇音性が声母に吸収された結果といえる。曉母と結合する微韻には『慈恩伝』で、微<xiuəi> kwy のごとく wy で表記されているのに⁽⁸¹⁾、ここでは、諱<xiuəi> ky(B23 E5) のごとく y が立ち、合口性の反映がみられない。ここでの特徴の 1 つといえる。チベット文字文献では止撮合口音には主として文字 u が表記され、他に wi u' i yu などがみられる。高田氏はこれらに対して *i を再構している⁽⁸²⁾。ここでは、文字 y はウイグル語

⁽⁷⁹⁾ Emmerick/Pulleyblank(1993) pp.48-49, 高田(1988a) pp.129-130.

⁽⁸⁰⁾ 『方言志(陝西北部)』『陝西省志』第 7 6 卷(陝西人民出版社 1986), p. 59 の「比」「批」参照。

⁽⁸¹⁾ 庄垣内(1987) p.73.

⁽⁸²⁾ 高田(1988a) p.127, p.180.

音の i、w は u、wy は ui の範疇にあったとしておきたい。

4. 2. 5 效 撮

豪 韻

到 <tâu>1 t'w

導 <dâu>1 t'w

惱 <nâu>1 d'w

草 <tsâu>1 s'w

告 <kâu>1 q'w

肴 韻

拋 <pâu>2 p'w

巧 <kâu>2 q'w

蕭 韻

調 <diêu>4 dyw~dyw

了 <liêu>4 lyw

宵 韻

妙 <miêu>4 pyw~p'w

超 <tiêu>3 cyw

笑 <siêu>4 syw

饒 <nziêu>3 šyv~s'w

豪韻<âu>と肴韻<au>とは中世漢語への過程で合流する。チベット文字資料でも表記上、両者間の明確な区別はないが、若干の異なりは認められている⁽⁸³⁾。ここでも、両韻間に違いがあったかもしれない。しかし、共に 'w と表記されていて表記上の区別はないので、すべてウイグル語の au の範疇に収まるものとして扱いたい。

宵韻<iêu>と蕭韻<ieu>は『一切経音義』においてすでに合流していた。『慈恩伝』では両韻の多くが yw で表記されるが、同時に宵韻には 'w も存在する⁽⁸⁴⁾。ここでは、3例をのぞいて yw で表記されている。宵韻の妙<miêu> 饒<nziêu> が p'w (B4) s'w (C9 Dr5) と表記されるのは、『慈恩伝』と平行するものであり、あるいは宵韻と蕭韻との間に音韻上の差異があったのかもしれない。'w は äu の範疇にあるものとしたい。äu の存在を考慮に入れて、yw には eu を推定したい。なお、饒の šyv の -yv (A7) は -yw の韻尾 -w を接近音化したもので、ウイグル文献中の借用語には平行例がみられる⁽⁸⁵⁾。-yv は -ev[ɛw] の範疇に属するものとしたい。

⁽⁸³⁾ 高田(1988a) pp.140-141.

⁽⁸⁴⁾ 庄垣内(1987) p.66.

⁽⁸⁵⁾ ウイグル文献中の借用語には、小<siêu>を säv, 道<dâu>を tav と表示した例がある。このような v は後期ウイグル文献に現れる。庄垣内(1987)pp.65-66 参照。

4. 2. 6 流 摂

尤 韻

覆 <fieu>3 pw 手 <qieu>3 syw
 謬 <mieu>4 pyw 究 <kieu>3 kyw~k'w
 不 <fieu>3 vw 丘 <kieu>3 kyv
 呪 <tqieu>3 cyw 有 <hieu>3 yw~yyw

侯 韻

鉤 <kəu>1 qyw
 後 <ɣəu>1 qyw

侯韻<əu>と尤韻<iəu>は『一切経音義』においては区別されている。チベット文字資料でも区別されている⁽⁸⁶⁾。ここでは、侯韻の鉤<kəu> qyw(B4), 後<ɣəu> qyw(C18)はともに -yw で表記されている。尤韻において、軽唇音声母と結合する韻母は『一切経音義』の時代には模韻に合流していたので⁽⁸⁷⁾、覆<fieu> pw(G4 H4), 不<fieu> vw(A8 B23 E5 G3 G5)の -w はそれを反映した表記といえる。これらの w は u の範疇に入るものと考えたい。ちなみに『中原音韻』では尤韻の覆不は魚模韻 u に、謬呪手究丘有は尤侯韻 iəu に所属する。有<hieu> には yyw(A4 A8 A20 A23 B13 B17 B22)のほか yw(A3 A9 A17 A26 B11 B22 Dr1 E4)もみられる。これは喻母との結合を条件として生じた変種と考えたい。すなわち、喻母と結合する i 介音はふつうは声母と縮合するが、有の -yw はなお i 介音を y によって反映していたと考えられる。ここでは有 yw の -w は u の範疇に所属するものとしたいが、表記上 yw が文字 y の重複を嫌い、yyw の代わりに用いられるということは、ウイグル語表記にしばしばみられるので、yw が yyw と等価であった可能性もある。尤韻はこの有と軽唇音声母と結合するもの、さらに丘 kyv(H1) 究 k'w(A6)をのぞけば、ほかは皆 yw で表記されている。また、侯韻では、鉤<kəu> qyw(B4)のように見母声母には q- を立てるのに対して、尤韻の究<kieu> kyw(A7 A9 A17 C10 C12 C19)は k- を立てているので、両韻の yw には音韻上の差異が有ったといえる。侯韻の yw はウイグル語音の iu、尤韻の yw は iu の範疇に所属するものと推定したい。丘の -yv は -iu のウイグル音化形 -iv[iw] と考えられる⁽⁸⁸⁾。なお、k'w は、究竟 k'wky(A6)に現れるが、テキストAの他の例では kywky(A9 A17)のように kyw が表記されているので、単純な書き誤りとしたい。

⁽⁸⁶⁾ 高田(1988a) p.180.

⁽⁸⁷⁾ 高田(1988a) p.144.

⁽⁸⁸⁾ 4. 2. 5 饒 <nziəu>3 šyv 参照。

4. 2. 7 咸 摄

合 韻

合 <kâp>1 q'p~q'p

談 韻

三 <sâm>1 s'm

凡 韻・乏 韻

梵 <viuəm>3 v'm

鏤 <ŋiuəm>3 v'n

塩 韻

尖 <tsiəm>4 sym

業 韻

法 <fiuəp>3 p'p

業 <ŋiəp>3 kyp

添 韻

念 <niem>4 dym~tym

覃 韻 <âm> と談 韻 <âm> は『一切経音義』では合流していた。したがって、合 韻の合<kâp> q'p(A6 A16)~q'p(C8 Dr4)の ' と談 韻の三<sâm> s'm(A1 A18 A19 B13)の ' とは同じ音価をもっていたと考えられる。両者の ' が a[a] の範疇に所属するものとしたい。『一切経音義』では塩 韻<iəm>, 殿 韻<iəm>, 添 韻<iəm>も合流して塩 韻となった。ここでは、これらの韻母母音はすべて y で表記されている。『中原音韻』(廉織韻)でも -iəm が対応する。y はウイグル語音の i ではなく、e[e] の範疇に所属するものと考えたい。業 韻<iəp>の y も同じ e に所属するものとしたい。軽唇音声母と結合する凡 韻<iuəm>は中世漢語への過程で寒山 韻 an に合流し、乏 韻の法は家麻 韻 fa になる。ここでは、梵<viuəm> v'm(A0 F12), 法<fiuəp> p'p(G1)の介音は表示されていないが、それらは唇音声母に吸収された。' はウイグル語音の a の範疇に所属するものといえるが、1 等字に立てた a よりは前よりの音価[a]をもっていた可能性が大きい。韻尾 -m はウイグル語の m の範疇にあった。鏤<ŋiuəm>(A6 Dr3)は v'n のように -m にかかわって例外的に -n をもつ。鏤は単語「末過鏤」 p'k'v'n の構成要素である。この単語はサンスクリット bhagavān (世尊)に対応する。過<yât> k' の声母と韻母の表記(cf.4.1.5.2(2), 4.2.9)、末<muât> p' の韻母表記(cf.4.2.9)などから判断して、ウイグル文字表記の p'k'v'n は中古音とは対応しない。また、末過鏤の中古音形式 muât-yât-ŋiuəm 自体もサンスクリット bhagavān の漢語音写としては不自然である。末過鏤の音写形式を中世漢語音 mau-xɔ-van として考えれば、韻尾においてはサンスクリット形式と一致する。末の声母が脱鼻音化していたと考えるなら、元朝期の西北漢語音が音写された形式であると考えておかしくはない。一方、ウイグル文字表記の p'k'v'n は、末過鏤の漢語音形式を反映しているというよりは、むしろ漢語を仲介せずに別途経由で

定着していた bhagavān の音形式を使用したと考えるのが自然である。ちなみに、テキスト A には冒頭に漢語を仲介しないサンスクリットの音写形式がみられた (cf. p.7 注6)。したがって、鏝はここでの議論の対象とすべきではない。

ところで漢語において、入声韻尾の -p -t -k がどういう過程を経て消失したのかはむずかしい問題であって諸説あるが、ここでは単純に、ウイグル語音韻の範囲で漢語の反映形を立て、これについての詳細な議論は避けた。中古漢語の -p に対して、法 <fiuep> p'p(G1)や、業 <ɲiep> kyp(A21)のごとく韻尾には文字 p が表記されている。『慈恩伝』も同じく -p が表記されている。他のウイグル語文献には借用漢語に -v 表記もみられるので、もとの -p が摩擦音化していたともいえるが、ここでは単純にこの v の存在から有声性の情報のみを採用して、文字 p がウイグル語の有声の両唇閉鎖音 b の範疇に所属するものとしておきたい⁽⁸⁹⁾。

4. 2. 8 深摂

侵韻・緝韻

心 <siəm>4 sym	執 <tqiəp>3 cyp
深 <qīəm>3 šym	十 <qīəp>3 šyp~syp
甚 <ziəm>3 šym	及 <giəp>3 kyp
金 <kiəm>3 kym	
音 <·iəm>3 'ym	

韻母母音として、すべて y が表記されている。チベット文字資料でも i が表記される⁽⁹⁰⁾。『中原音韻』では侵韻には iəm が立つ。牙音声母が前舌母音と結合する k をもつことから、y はウイグル語音の i の範疇に所属すると考えられる。韻尾は咸摂と同じく -m -b の範疇にある。

4. 2. 9 山摂

寒韻・曷韻

難 <nân>1 t'n~d'n	
岸 <ɣân>1 q'n~q'n	
安 <·ân>1 ''n	
達 <dât>1 t'r	遏 <yât>1 k'

桓韻・末韻

半 <pûân>1 p'n	末 <muât>1 p'
滿 <muân>1 m'n	
端 <tuân>1 t'n~-d'n	
亂 <luân>1 l'n	
歡 <xuân>1 q'n	

⁽⁸⁹⁾ 庄垣内(1987) pp.84-85.

⁽⁹⁰⁾ 高田(1988a) p.148.

山 韻

間 <kǎn>2 q' n ~ q' n

幻 <yǎn>2 q' n ~ q' n

仙 韻・薛 韻

便 <biɛn>4 pyn

面 <miɛn>4 myn

善 <ziɛn>3 syn ~ šyn

演 <yiɛn>4 yyn

別 <piɛt>3 pyr

滅 <miɛt>4 pyr

舌 <dziɛt>3 šyr

旋 <ziuɛn>4 swyn

圓 <hiuɛn>3 wyn

説 <giuɛt>3 šwr ~ swr

元 韻・月 韻

言 <ɣiɛn>3 yyn ~ kyn

煩 <viuɛn>3 v' n

願 <ɣiuɛn>3 kwn

怨 <·iuɛn>3 'wn

遠 <hiuɛn>3 vyn

月 <ɣiuɛt>3 kwr

先 韻

遍 <piɛn>4 pyn

邊 <piɛn>4 pyn

蓮 <liɛn>4 lyn

前 <dziɛn>4 syn

人 <nziɛn>4 syn

堅 <kien>4 kyn

顯 <xien>4 kyn

現 <yien>4 kyn

寒 韻<ân>は 'n で表記されている。この 1 等韻を an の範疇に所属するものとしたい。曷 韻の達<dât>は t' r(A9) と表記されている。核母音は寒 韻と同じ a に所属する。韻尾 t に対して文字 r が対応するのは『慈恩伝』と同じである⁽⁹¹⁾。この r はウイグル語の r の範疇に入りたいが、ウイグル語音 r はふるえ音として扱える。だが、実際の漢字音の音価は、弾き音[r]か、接近音[ɹ]であった可能性が大きい。遇<yât> k' (A6 Dr3)と未<muât> p' (A6 Dr3)とは、先に述べたように漢語以外を経由して、サンスクリット bhagavān (世尊) の bha と ga を音写した形式なので (cf.4.2.7)、ここでは除外する。桓 韻<uân>にはすべて 'n が表記されていて、唇音声母と結合しないものにも u 介母の表示はない。『慈恩伝』には觀<kuân> qw' n ~ qwwn 館<kuân> qw' n のごとくとりわけ牙喉音には u 介母が表示される⁽⁹²⁾。ここ

⁽⁹¹⁾ 庄垣内(1987) p.82.

⁽⁹²⁾ 庄垣内(1987) p.60.なお、桓 韻は『中原音韻』では uon となるので『慈恩伝』のこの qwwn がその形式に近いものといえる。

で、u 介母表示のない 'n はウイグル語音 an の範疇に入るが、核母音は若干唇音性を保有して、[ɒn] に類似する音価をもっていたかもしれない。『中原音韻』では山韻<ǎn>と寒韻<ân>とは合流し、間<kǎn> は寒山韻に所属して、kian が推定されているが⁽⁹³⁾、ここでは q'n(A14)~q'n(A24)のごとく声母に q(ǰ) を立てており、i 介母の反映はない。'n はウイグル語音の an の範疇に入る。ただし、核母音は寒韻よりは若干前よりの音価[a]をもっていたものと推定したい。合口音の幻<yüǎn>が q'n(B6 B7 C20)~q'n(A7 A13 B5 B6 Dv5)のごとく、u 介母を表示していないのは桓韻と同じである。この 'n も an の範疇にはいる。幻の韻母は『中原音韻』では uan となるので、この an の核母音の音価が上の「間」よりは後よりのものであった可能性はある。

『一切経音義』では元仙先の3韻は合流する。ここでも、開口の元韻<iɛn>、仙韻<iɛn>、先韻<iɛn> はすべて yn で表記されている。ブラーフミー文字ウイグル文献中の漢語借用形式では元韻（開3）先韻（開4）の核母音が e で表記されているので⁽⁹⁴⁾、この yn は en の範疇に所属するものと考えたい。薛韻 iet も yr で表記されているので、er に入れたい。元韻の合口<iuɛn>は 'n wn yn の3種の韻母形式で表記されている。軽唇音声母と結合する元韻は『中原音韻』では寒山韻 an に入る。煩<viuɛn> v'n(A8 A15 B4)の 'n は上の寒韻と同じ an の範疇に入るものと考えたい。元仙先の合口音には『慈恩伝』では wyn が表記される⁽⁹⁵⁾。ここでも、仙韻の旋<ziuɛn>が -wyn(C15)と表記されている。この wyn は uen の範疇に所属するものとしたい。ただし u は若干前よりの音価 [ɯ] をもっていたであろう。圓<hiuɛn>も wyn(C1)のごとく表記されているが、初頭の w- は元韻の遠<hiuɛn> vyn(A15)の初頭音 v- と交替する声母形である。すなわち喻母と結合して開口音と同じ -yn を表記したのである。一方、願<ɲiuɛn> kwn(A7 A14 B9 C10)、怨<·iuɛn> 'wn(A18)が -wn で表記されているが、ウイグル文献中の借用漢語にもこの平行例はある⁽⁹⁶⁾。wn は un の範疇にある。月<ɲiuɛt> kwr(G1 H1)と、説<qiuɛt> šwr(A15 A16 Dv2 E6 H1)~swr(C19 E5 G1)の -wr は ur の範疇にはいる。un と ur の u の音価も [ɯ]であったと推定したい。

⁽⁹³⁾ 楊(1981) p.128, 寧(1985) p.76.

⁽⁹⁴⁾ 庄垣内(1987) p.62.

⁽⁹⁵⁾ 庄垣内(1987) p.62.

⁽⁹⁶⁾ 庄垣内(1987) p.63.

4. 2. 10 臻 撮

痕 韻

根 <kən>1 qyn

魂 韻・沒 韻

本 <puən>1 pyn

門 <muən>1 mwn

尊 <tsuən>1 swm

沒 <muət>1 pyr

文 韻・物 韻

忿 <fiuən>3 pyn

聞 <miuən>3 'wn

云 <hiuən>3 ywn

佛 <viuət>3 vyr

欣 韻

謹 <kiən>3 kyn

勤 <giən>3 kyn

真 韻・質 韻

進 <tsiën>4 syn

眞 <tqiën>3 cyn

神 <dziën>3 šyn~syn

伸 <qïën>3 syn~šyn

身 <qïën>3 šyn~syn

忍 <nziën>3 šyn

緊 <kiën>4 kyn

因 <·iën>4 'yn

畢 <piët>4 pyr

密 <miët>3 pyr

七 <tšiët>4 syr

疾 <dziët>4 syr

悉 <siët>4 syr

實 <dziët>3 šyr~syr

吉 <kiët>4 kyr

一 <·iët>4 'yr

術 韻

出 <tqiuët>3 cwr

術 <dziuët>3 šwr

開口音の痕韻1等<ən>と欣韻3等<iən>はともに -yn で表記されている。両韻は『一切経音義』や『中原音韻』でも区別されているので、痕韻は -in, 欣韻は -in の範疇に入るものと考えたい。i は [ə], i はそれより前よりの音価をもっていたと推定できる。合口音である魂韻<uən>と文韻<iuən>は yn~wn で表記されている。yn は唇音声母と結合する本<puən> pyn(C20)と忿<fiuən> pyn(A3 C2)とに現れる。これは介音が唇音声母に吸収され、韻母母音が非円唇音として現れたもので、『慈恩伝』においても同様である⁽⁹⁷⁾。一方チベット文献ではこれらに un が立つ⁽⁹⁸⁾。魂韻、文韻の yn は in の範疇に所属するものとしたい。同じように、沒<muət>

⁽⁹⁷⁾ 庄垣内(1987) p.57.

⁽⁹⁸⁾ 高田(1988a) pp.157-159.

pyr(C11)と佛<viuet> vyr(A13)の -yr は -ir の範疇に所属する。魂韻の門<muən> は mwn(A17)のごとく、韻母母音が円唇音で表記されている。ウイグル語に借用された門には後期文献すなわち元朝時代のものに mwn が現れる⁽⁹⁹⁾。門の -wn は -un の範疇にあるとしたい。文韻の聞<ɠiuən>も軽唇音声母をもつのに 'wn(B4)のごとく円唇母音が表記されているが、声母も影母化して '(・) で表記されている。この聞の音形も『中原音韻』形式や明代に書かれた『高昌館訳語』表記形式と類似する：ɠiuən(中古) → vuən(中原) → ·uən(明代) 'wwn(高昌館)⁽¹⁰⁰⁾。『慈恩伝』には文<ɠiuən> 問<ɠiuən> が共に vyn と表記されているので⁽¹⁰¹⁾、'wn はやはり新しい時代の漢語音形と考えられる。聞の -wn は un の範疇に入るが、母音 u の音価は若干前よりの [u] であったと推定したい。そのほかの非唇音声母と結合する、尊<tsuən> swn(A5 A14 B7 B15 B20 Dr2) 云<ɠiuən> ywn(A0 F12) の -wn は -un の範疇にはいる。

『一切経音義』では眞韻<iĕn>は欣韻<iĕn>と合流していた。ここでは、両韻とも常に yn で表記されているので in の範疇に入るものと思いたい。質韻<iĕt>も常に yr で表記されているので、これも ir に入りたい。術韻<iuĕt>は wr が表記されている。wr は ur[ur]の範疇に入る。

4. 2. 1 1 宕摂

唐韻・鐸韻

當 <tâŋ>1 tw

剛 <kâŋ>1 qw~qw

樂 <lâk>1 l'q̃~l'q

作 <tsâk>1 s'q̃~s'q

惡 <·âk>1 ''q̃

光 <kuân>1 qw

廣 <kuân>1 qw~q̃w

陽韻・萊韻

網 <ɠiân>3 'w 若 <nziâk>3 s'q̃~s'q

量 <liân>3 lw

兩 <liân>3 lw 方 <fiuân>3 vw

長 <ɢiân>3 cw 王 <ɠiuân>3 ww

相 <siân>4 sw

祥 <ziân>4 sw

像 <ziân>4 sw

掌 <tqiân>3 cw

上 <ziân>3 sw~šw

仰 <ɠiân>3 kw

向 <ɣiân>3 kw

養 <yîân>4 yw

⁽⁹⁹⁾ 庄垣内(1987) p.58.

⁽¹⁰⁰⁾ 庄垣内(1987) p.107.

⁽¹⁰¹⁾ 庄垣内(1987) p.59.

宕摂のもつ本来の韻尾 $-ŋ$ は一様に表記されていない。これは、『慈恩伝』と同様であり、また、チベット文字資料の多く、あるいはソグド文字資料も同じ表記を示す⁽¹⁰²⁾。さらに、核母音はすべて w で表記されている。韻尾 $-ŋ$ のどんな痕跡もみられないので、この w が鼻音要素をもっていたとはいいがたい。したがって、ここでは w を純粹に口音として扱いたい。

唐韻 $\langle aŋ \rangle \langle u a ŋ \rangle$ の w は開合ともにウイグル語の o の範疇に所属するものとしたい。陽韻 $\langle i a ŋ \rangle \langle i u a ŋ \rangle$ の w も o の範疇に所属するが、陽韻は唐韻より前よりの音価 $[ɔ]$ をもっていたと考えられる。ただし、輕唇音声母をもつ綱 $\langle m i a ŋ \rangle$ 'w(A7 C20), 方 $\langle f i u a ŋ \rangle$ vw(B9 B11)の介音は声母に吸収されたといえる。『中原音韻』においてもこれらの韻母は $-aŋ$ または $uaŋ$ と推定されているので、 w が唐韻と同じ音価 $[o]$ をもっていた可能性は大きい。また喻母をもつ養 $\langle y i a ŋ \rangle$ yw(Dv3) 王 $\langle h i u a ŋ \rangle$ ww(E5)の韻母 w も $[o]$ であったにちがいない。鐸韻 $\langle a k \rangle$ と藥韻 $\langle i a k \rangle$ は 'q ~ 'q̄ で表記されている。q と q̄ との間にここでは音声上の差異はない。この韻尾が有声音であったと考えたい(cf.4.2.7)。文字 q q̄ はウイグル語音の q と ɣ を表示できる。摩擦音化していた可能性も大きいので、ここでは ɣ の範疇に入るものとしたい⁽¹⁰³⁾。

『慈恩伝』でも韻尾は q で表記されている。核母音は鐸韻藥韻ともに a の範疇にあるものといえる。ただし藥韻の a は鐸韻の $[a]$ よりは前よりの音価 $[a]$ をもっていたと推定できる。

4. 2. 12 曾 摂

登韻・徳韻

等 $\langle t a ŋ \rangle 1$ -dynk ~ tynk

能 $\langle n a ŋ \rangle 1$ nynk

默 $\langle m a k \rangle 1$ pyk

得 $\langle t a k \rangle 1$ dyk

徳 $\langle t a k \rangle 1$ tyk

蒸韻・職韻

称 $\langle t a i a ŋ \rangle 3$ cynk

乘 $\langle d a i a ŋ \rangle 3$ synk

勝 $\langle q i a ŋ \rangle 3$ synk ~ ſynk

應 $\langle i a ŋ \rangle 3$ 'ynk

色 $\langle s i a k \rangle 2$ ſyq

力 $\langle l i a k \rangle 3$ lyk 極 $\langle g i a k \rangle 3$ kyk

勅 $\langle t i a k \rangle 3$ cyk 憶 $\langle i a k \rangle 3$ 'yk

即 $\langle t s i a k \rangle 4$ syk

識 $\langle q i a k \rangle 3$ ſyk

⁽¹⁰²⁾ 庄垣内(1987) pp.51-52, 高田(1988a) p.161, 吉田(1994) p.52.

⁽¹⁰³⁾ 庄垣内(1987) p.95.

曾撰の韻尾 η はすべて保存されている。これは『慈恩伝』においてもそうであり、チベット文字資料、ソグド文字資料でも同じである⁽¹⁰⁴⁾。登韻1等<əŋ>の ynk は iŋ, 蒸韻3等<iəŋ>の ynk は iŋ の範疇に所属するものとしたい。徳韻<ək>、職韻<iək>の韻尾は k で表記されている。この k は g の範疇に入るものと考えたいが、先の -q との関係から摩擦音の音価をもっていた可能性は大きい(cf.4.2.11)。『慈恩伝』も k で表記される。ただ、『慈恩伝』の徳韻合口音は q で表記されている : ex. 国<kuək> qwq⁽¹⁰⁵⁾。ここには同じ合口音の例はないが、有ればおそらく韻尾は q で表記されたであろう。登韻1等は『中原音韻』においても庚青韻に所属し、əŋ の音価をもっているの、上でも ynk に iŋ のごとく後舌核母音を立てた。一方、徳韻の表記は yk のごとく韻尾に k が立っている。中古漢語においては梗摂だけではなく、曾撰の韻尾 -ŋ -k も口蓋化されていた可能性がある⁽¹⁰⁶⁾、徳韻を表すウイグル文字表記の yk の -k もそれを表示しており、韻母母音のみは登韻と同じ母音 i をもっていたと考えることもできる⁽¹⁰⁷⁾。しかし、次にみる梗摂においては陌韻、麦韻韻尾に -q が表記されているので、やはり -k -q の表記が前接する母音との関係において区別されているものと考えべきである。したがって、ここでは徳韻の yk が前舌母音をもつものとして、ig の範疇にあるものと推定したい。ちなみに、『中原音韻』で徳<tok>と得<tək>は齊微韻 ei に入り、韻尾を欠くが、前舌母音をもっている。なお、チベット文字資料では登韻1等は大体が ing で表記されており、蒸韻3・4等の表記と区別が難しい⁽¹⁰⁸⁾。ブラーフミー資料では明確な区別があり、登韻1等は[ɣ]を、蒸韻は[i]を表示するという⁽¹⁰⁹⁾。2等の色<ɕiək> šyq(B2 B3)は -yq で表記されているので、これは -iɣ の範疇にはいる。色に対しては、チベット文字資料でも shag のごとく、ほかの2等の -ig -eg と異なった表記をもっている⁽¹¹⁰⁾。ブラーフミー文字資料でも śaihä:/śaihi: として表記され、韻母母音には[ɛ]が推定されている⁽¹¹¹⁾。

⁽¹⁰⁴⁾ 庄垣内(1987) p.56, 高田(1988a) p.166, 吉田(1994) p.55.

⁽¹⁰⁵⁾ 庄垣内(1987) pp.80-81.

⁽¹⁰⁶⁾ 太田(1988) p.47, 注(4).

⁽¹⁰⁷⁾ 庄垣内(1987) p.95.

⁽¹⁰⁸⁾ 高田(1988a) p.166.

⁽¹⁰⁹⁾ Emmerick/Pulleyblank(1993) p.50.

⁽¹¹⁰⁾ 高田(1988a) p.167. 高田は「仏家における特殊な読みであろうか」としていう。

⁽¹¹¹⁾ Emmerick/Pulleyblank(1993) p.50.

4. 2. 1 3 梗 摂

庚 韻 2 等・陌 韻

猛 <maŋ> m'
生 <saŋ> s(y)
行 <ɣaŋ> qy

白 <bak> p'q̃

横 <ɣuaŋ> qw

耕 韻・麦 韻

諍 <tɕǎŋ>2 cy

獲 <ɣuǎk>2 q'q̃

庚 韻 3 等

明 <miaŋ> my
敬 <kiaŋ> ky
竟 <kiaŋ> ky
境 <kiaŋ> ky

青 韻・錫 韻

頂 <tien>4 ty 覓 <miek>4 pyk
定 <dien>4 -dy~(t)y 溺 <niek>4 dyk
經 <kien>4 ky 寂 <dziek>4 syk
形 <ɣien>4 ky

清 韻・昔 韻

井 <piɛŋ>4 py
名 <miɛŋ>4 my
令 <liɛŋ>3 ly
精 <tsiɛŋ>4 sy
清 <tɕiɛŋ>4 sy
淨 <dziɛŋ>4 sy
情 <dziɛŋ>4 sy
靜 <dziɛŋ>4 sy
性 <siɛŋ>4 sy
正 <tɕiɛŋ>3 cy
聖 <ɕiɛŋ>3 s'
成 <ziɛŋ>3 šynk~šw~šy

擲 <ɕiek>4 cyk

釋 <ɕiek>3 šy(k)

益 <·iek>4 yyk~yk

亦 <yiek>4 yyk

『一切經音義』では耕韻2等<ǎŋ>は庚韻2等<aŋ>に、庚韻3等<iaŋ>と青韻<ien>は清韻<iɛŋ>に合流していた。ここでは、宕摂と同じく韻尾のŋを落としている。庚韻2等と、耕韻は、行<ɣaŋ> qy(A5 C6), 諍<tɕǎŋ> cy(G1)が y で、猛<maŋ> m' (A1 A3 C3)が ' で表記されている。『慈恩伝』ではこの2韻は y で表記される⁽¹¹²⁾。猛は2つのテキストに都合3度現れ、すべて同一表記を示すので、書き誤りとはいえない。行の声母が k ではなく、q で表記されているので、諍も含めて、韻

⁽¹¹²⁾ 庄垣内(1987) p.54.

母の y が i の範疇に入るものと推定できる。i は[ə]か[ɤ]の音価に近かったと考えられる。猛の ' は a の範疇にあるものとしたい。唇音声母をもっているのではかと異なった音形になったのか？ a は[ɔ]～[ɒ]の音価をもっていた可能性が大きい。合口音の横<yuaŋ>は qw(A17)と表記されている。w は後舌母音 u か o の範疇にあると考えられるが、ここでは非狭母音と考えて o を選択したい。陌韻の白<bak> p'q̄(A2 A16)の -'q̄ は -ay の範疇にあった。麦韻の獲<yuǎk>は q'q̄(A8) と表記されている。喉音声母をもつにもかかわらず、ここでも u 介母の表示はない。この -'q̄ も -ay の範疇に入れたい。

庚韻 3 等、清韻、青韻はともに y で表記されている。庚韻 3 等の敬<kiaŋ> ky(A 6 C8 Dr3 F13)や青韻の經<kien> ky(H1)などにみられるように、牙喉声母は k で表記されているので、この y も前舌母音 i e のいずれかに所属するものと考えられる。1 例ではあるが、清韻の聖<qieŋ> š'(A0)のように ' で表記されるものがある。この ' は ä の範疇に入ると考えられるので、y は i ではなく e に所属する可能性が大きい⁽¹¹³⁾。清韻の成<zieŋ>は、šy(B6 C10)のほかに、šynk(A7), šw(A14)の表記がある。šw は「願成」 kwñšw に現れるが、šw の w は kwñ の w に引かれた誤写の可能性が大きい。šynk は「成究竟」 šynkkywky に現れ、-ñk はやはり ŋ に所属するものと考えねばならないが、これが、脱落前の ŋ を保存した形式とは考えにくい。ウイグル語の後期文献には中世漢語の形式を反映して ŋ を表示する例が多くみられる⁽¹¹⁴⁾。ここでは、元朝期の韻母音が字音に混入した結果 ŋ が現れたと考えたい。昔韻<iek>と錫韻<iek>は yk で表記されている。ig か eg に所属しているが、清韻との関連から eg の範疇にあるものとしたい。

4. 2. 14 通摂・江摂

東韻 1・屋韻 1

通 <tug> -dwnk~twnk

童 <dug> twnk~dwnk

速 <suk> swq̄

覚韻

覺 <kɔk>2 qwq̄~qwq~q̄wq̄

東韻 3・屋韻 3

中 <tiug> cwnk

衆 <tqiug> cwnk

雄 <fiug> ywnk

復 <viuk> vwq̄

伏 <viuk> vwq̄~vwq

⁽¹¹³⁾ ブラーフミー文字ウイグル語文献中の漢語借用語には、青韻が e で表記された例がみられる。庄垣内(1987) p.55 参照。

⁽¹¹⁴⁾ 庄垣内(1987) p.56.

鐘韻・燭韻

頤 <zioŋ>4 swnk	足 <tsiok>4 swq̄~swq
誦 <zioŋ>4 swnk	續 <ziok>4 swq
種 <tqioŋ>3 cwnk~cywnk	辱 <nziok>3 šwq̄
恭 <kioŋ>3 kwnk	欲 <yioŋ>4 ywq
供 <kioŋ>3 kwnk	
勇 <yioŋ>4 ywnk	

ここでは、鐘韻の1例をのぞいて通摂はすべて wnk で表記されている。ブラーフミー文字ウイグル文献の借用語には、通<tug>の核母音が u で表示されているので⁽¹¹⁵⁾、東韻1等<uŋ>は uŋ に所属するものと推定したい。東韻3等<iuŋ>と鐘韻<iŋ>との間には『一切経音義』ではなお区別があったが、チベット文字資料には区別はない⁽¹¹⁶⁾。『慈恩伝』にも区別はみられない。『慈恩伝』には東韻3等と鐘韻に wnk が現れる。この wnk はウイグル語音の üŋ に所属し、韻母母音が前舌音であったことを示している⁽¹¹⁷⁾。ここで鐘韻に例外的にみられる種<tqioŋ> cywnk (E3) の y は i 介母の反映形と受け取れるので、cywnk(E3) と交替する cwnk(E3 E4) の w が後舌母音[u]をもっていたとは考えにくい。また、恭 <kioŋ> kwnk(A6 A16 C7 C8), 供 <kioŋ> kwnk(Dv3)のように、牙音声母は q ではなく k が立ち、後舌母音との結合を好まない。したがって、東韻3等と鐘韻の wŋ を uŋ に所属させるが、音価はウイグル語のものよりは前よりの [uŋ]をもっていたと考えたい。ただし、『慈恩伝』では軽唇音声母と喻母には wnk の結合がみられず、これらの声母とは後舌母音表示の wnk が結合した⁽¹¹⁸⁾。ここでも喻母と結合する wnk は uŋ に所属し、[uŋ]の音価をもっていたと推定したい。屋韻1等の速<suk>は swq̄(B12)と表記されている。-wq̄ は -uɣ に所属していた。屋韻3等<iuk>と燭韻<iok>も一様に wq̄ で表記されている。これらも uɣ に所属しているといえるが、軽唇音声母あるいは喻母と結合するもの以外は、やはり[uɣ]の音価をもっていたと考えたい⁽¹¹⁹⁾。覚韻の覚<kɔk>も qwq(A6 A17 A26)~qwq̄(A5)~q̄wq̄(A9 A14)と表記されている。核母音は東韻1等<uŋ>より広いと考えて -oɣ の範疇に所属させたい。

⁽¹¹⁵⁾ 庄垣内(1987) p.49.

⁽¹¹⁶⁾ 高田(1988a) pp.176-177.

⁽¹¹⁷⁾ 庄垣内(1987) p.50.

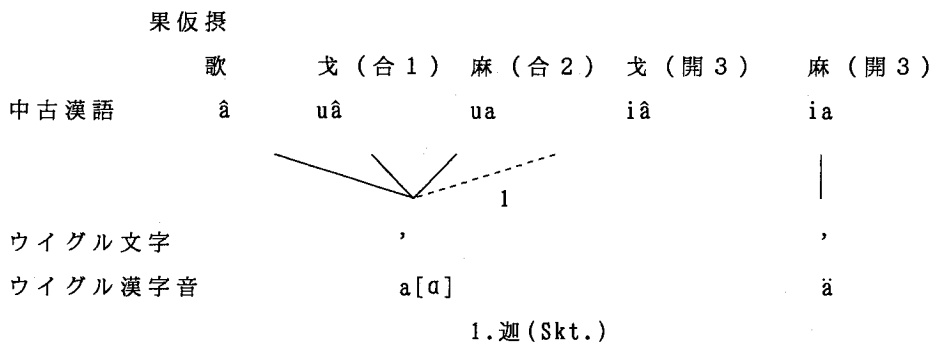
⁽¹¹⁸⁾ 庄垣内(1987) p.50.

⁽¹¹⁹⁾ 『慈恩伝』には、燭韻に王<ŋiok> kwyq のごとく、韻尾に -q をもつにもかかわらず、wy によって明確に ü を表示した例もある。庄垣内(1987) p.78, 参照。

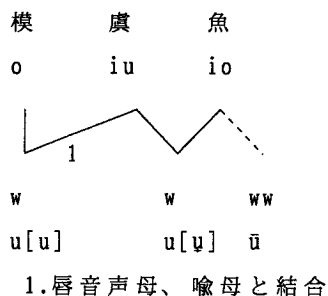
4. 2. 15 中古漢語音、ウイグル文字表記、ウイグル字音の関係

4. 2. 1～14で議論したことがらを踏まえて中古漢語音に対するウイグル漢字音の韻母表記を図示してみれば次のようになる。ただし、上で述べたことのすべてを図示するのは煩瑣となるので、あくまでその概略を示すものである。

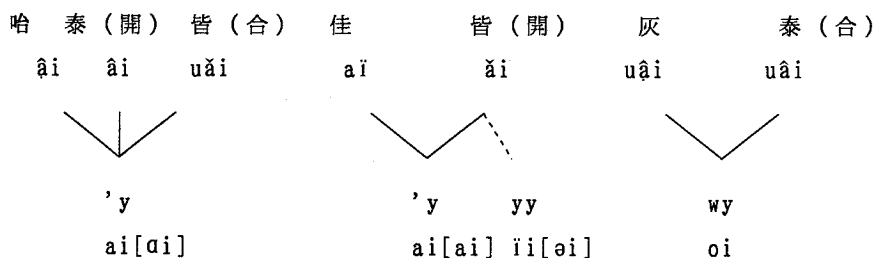
なお、破線で示した形式は例外的な存在である。



遇摂



蟹摂



祭 齊 (開 4) 齊 (合 4)

iɛi

iei

iuei



y

i



w

u[u]

止 撮

之 (2) 之 支 (開) 脂 (2) 脂 (開)

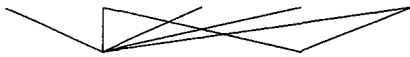
iəi

iəi

iě

iěi

iěi



y

i

i l

w

u l

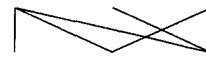
1. 齒頭声母と結合

微 支 (合) 脂 (合)

iuəi

iuě

iuěi



wy

ui

w

u

y

i

效 撮

豪

肴

宵

蕭

âu

au

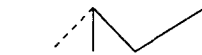
iəu

ieu



'w

au



yv

ev

'w

äu

yw

eu

流 撮

侯

尤

əu

iəu



yw

īu

w

u

yw

iu

yv

iv

1. 輕唇音声母と結合

咸 撮

談

凡

塩

添

合

乏

業

âm

iuəm

iəm

iem

âp

iuəp

iəp



'm

'm

ym

'p

'p

yp

am[am]am[am]

em

ab[ab]ab[ab] eb

深 撮

侵

緝

iəm

iəp



ym

im

yp

ib

山 撮

寒	山 (開)	山 (合)	桓	曷
ân	ăn	uăn	uân	ât

an

ar

仙 (開)	元 (開)	先
iɛn	iɛn	ien

yn

en

仙 (合)	元 (合)
iuɛn	iuɛn

wyn

yn(1)wn 'n(2)

uen[ɥen] en un[ɥn] an

1. 喻母と結合 2. 唇音声母と結合

薛 (開)	薛 (合)	月
iɛt	iuɛt	iuɛt

yr

er

wr

ur[ɥr]

臻 撮

痕	魂	文	欣	真	沒	物	質	術
ən	uən	iuən	iən	iĕn	uət	iuət	iĕt	iuĕt

yn

wn

in

un

yn

in

yr

ir

yr

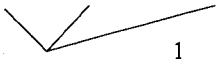
ir

wr

ur

1. 唇音声母と結合 2. 唇音声母・喻母と結合

宕 摄

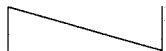
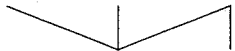
唐 (開)	唐 (合)	陽 (合)	陽 (開)	鐸	藥
âŋ	uâŋ	iuâŋ	iâŋ	âk	iâk
					
w			w	'q	'q
o[o]			o[ɔ]	aɣ[aɣ] aɣ[aɣ]	

1. 輕唇音声母・喻母に結合

曾 摄

登	蒸	德	職	職 (2)
əŋ	iəŋ	ək	iək	ïək
				
ynk	ynk	ik	yq	1. 色
ïŋ	iŋ	ig	ïɣ	

梗 摄

庚 (開 2)	耕	庚 (開 3)	青	清	庚 (合 2)
aŋ	ǎŋ	iaŋ	ieŋ	iɛŋ	uaŋ
					
'	y	y	'	w	
a	ĩ	e	ä	o	

陌	麥	昔	錫
ak	uăk	iɛk	iek
			
'q		yk	
aɣ		eg	

通摂・江摂

東 (1)	東 (3)	鐘	覺	屋 (1)	屋 (3)	燭
uŋ	iuŋ	ioŋ	ɔk	uk	iuk	iok
						
wnk	wnk	ywnk	wq	wq	wq	
uŋ[uŋ]	uŋ[ɥŋ]	iuŋ	oɣ	uɣ[uɣ]	uɣ[ɥɣ]	

4. 2. 16 韻母の特徴

かつて『慈恩伝』における漢語韻母の特徴について論じたが⁽¹²⁰⁾、ここではその議論に沿って、「ペテルブルグ所蔵断片」がどんな特徴をもつのか説明してみたい。

『慈恩伝』では韻母の特徴は介音と韻尾の形式から説明できた。

介音 i をもつ「齊齒呼」において、『慈恩伝』では、介音を直接表示した例が現れた：

射<dzia> sy' šia 極<giək> kyyk kieg.

介音を直接表示するものは、ここでは例外的な1例(種<tqion> cywnk(E3))のみが現れる。一方、『慈恩伝』においても i 介音の表示はむしろ希で、ふつうは介音は核母音と縮合して前舌母音化する。

東<iuŋ>3 wyŋk üŋ~wnk uŋ (: 東<uŋ>1 wn k uŋ)

鐘<ioŋ>3 wyŋk üŋ~wnk uŋ (: 冬<oŋ>1 wn k uŋ)

燭<iok>3 wyq üɣ (: 沃<ok>1 wq uɣ)

業<iep>3 yp eb (: 合<âp>1 'p ab)

「ペテルブルグ所蔵断片」でも、業<ŋiep> kyp /keb/(A21) (: 合<kâp> q'p /qab/(A6 A16 C8 Dr4))のごとく、同様の表示がみられる。ただ、核母音が円唇音の場合は、『慈恩伝』では wy の表記をもってウイグル語音の ü や ö を表示することが多いのに、ここでは常に w で表記されている：衆<tqiun> cwnk(A5 Dr2) 續<ziok> swq(C20)。これは単に表記上の問題だけではなく、音韻的にも w 表記音がウイグル語の u の範疇にあったことを示している。ただし、表記者のもつ漢字音価はウイグル語本来のもの[u]よりは若干前よりの音価[ɥ]であった可能性が大きい。また、声母が軽唇音あるいは喻母の場合、『慈恩伝』では拗音性はなくなり、直音扱いされるが、その点も一致している。

『慈恩伝』では、介音に u をもつ「合口呼」において、介音は核母音と縮合し、核母音は後舌円唇音になるのがふつうである：魂<uən> wn un 灰<uâi> wy oi. だ

⁽¹²⁰⁾ 庄垣内(1987) pp.90-96.

が、牙喉音声母と結合する場合、介音は直接に表示される：觀<kuân> qw'n quan
華<ɣua> qw' ɣua. これらに対して、「ペテルブルグ所蔵断片」も 尊<tsuən> swn
(A5 A14 B7 B15 B20 Dr2) 内<nuâi> dwy(A18 A27 B6 Dv5) のごとく介音は核母音
と縮合するが、牙喉声母と結合しても介音は表示されない：華<ɣua> q'(C1) 壞
<yuaĩ> q'y(A9 A17 A23 A26 B13) 幻<yuañ> q'n(A7 A13 B5 B6 Dv5)~q'n(B6 B7
C20) 果<kuâ> q'(C12) 歡<ɣuân> q'n(Dv3) 獲<yuaǎk> q'q(A8). これは、「ペテ
ルブルグ所蔵断片」の大きな特徴といえる。また、唇音声母と結合して介音の唇音
性が声母に吸収されるのは『慈恩伝』と同じである：本<puən> pyn(C20), 滿
<muân> m'n(A19 C1). しかし例外もある：門<muən> mwn(A17).

「撮口呼」の介音 iu は『慈恩伝』では、唇音声母・喻母と結合する場合をのぞ
けば、前舌円唇単母音として反映され、韻母母音は2重母音となる：濬<siuě>
swyyn süin 倫<liuě> lwyn lwin 微<ɣiuəi> kwy kui. しかし、「ペテルブルグ
所蔵断片」では 旋<zuiən> swyn(C15)の1例をのぞけば、介音は、核母音と、ある
いはそれに韻尾を含めて縮合し、韻母母音は単母音となる：願<ɣiuən> kwn(A7 A14
B9 C10) 怨<·iuən> 'wn(A18) 月<ɣiuət> kwr(G1 H1) 諱<ɣiuəi> ky(B23 E5). ま
た、『慈恩伝』では唇音声母・喻母と結合するときは核母音は非円唇母音となる：
文<ɣiuən> vyn vin 遠<ɣiuən> wyn wen. ここでも同様の表示がみられる：遠
<ɣiuən> vyn(A15) 忿<ɣiuən> pyn(A3 C2). だが、ときには非円唇母音も現れる：
聞<ɣiuən> 'wn(B4) 云<ɣiuən> ywn(A0 F12).

韻尾に関して、『慈恩伝』の最大の特徴は西北方言で一般にみられる、軟口蓋鼻
音 ŋ が宕摂、梗摂において脱落することである。核母音は宕摂で円唇母音、梗摂で
非円唇母音になることである。ここでも基本的にこのパターンと一致している
(121)。

韻尾が軟口蓋閉鎖音の場合は、『慈恩伝』では、通江宕の3摂に所属するものは
q で表記され、曾摂と梗摂は韻母の種類によって、q と k とに書き分けられた。こ
こでも通江宕は q で表記されている：速<suk> swq̄(B12) 覺<kək> qwq̄(A5)~qwq
(A6 A17 A26)~q̄wq̄(A9 A14) 樂<lāk> l'q̄(A5 B2). 『慈恩伝』では曾摂の徳(合1)
に q, 職(開3) 徳(開1)に k が表記され、梗摂のうち、陌(開2)に q, 昔
(開3)に k が表記された例が現れている。ここでは、曾摂の職(開2)に q (色
<s̄iək> šyq(B2 B3)) が、徳(開1) 職(開3)に k (默<mək> pyk(B17) 力<liək>
lyk(A19 B9 B12 B13 Dv10)) が表記され、梗摂の陌(開2) 麦(合2)に q (白
<bak> p'q̄(A2 A16) 獲<yuaǎk> q'q̄(A8)) が、昔(開3. 4) 錫(開4)に k (擲

(121) 梗摂には若干の例外もみられる：猛<maŋ> m'(A1 A3 C3) 横<yuaŋ> qw(A17).
横の所属する庚韻(合2)の例は『慈恩伝』にはない。

<diək> cyk(A2 C2)) が表記された例が現れる。この表記の仕方は『慈恩伝』のものと矛盾しない。

韻母において『慈恩伝』にはみられない際立った特徴として、歯頭音声母と結合する止摂開口韻に[ɿ]音を表示する w 表記が現れる：慈<dziqi> sy(A4 A7 A20)～sw(B10 Dv8) 自<dziēi> sy(A1 A4 A10 A16 A17 A19 H3)～sw(B10 B22 C1 C4 Dv8 F16)～šw(B18) 詞<ziqi> sy(A25)～sw(C15)。これらの韻母は『中原音韻』では支思韻に所属するもので、ブラーフミー文字資料とも平行する。また、牙喉音声母と結合する2等韻母の拗音化を暗示する表記 yy も現れる：皆<kāi> q'y(A5)～qyy(B5)。これも『慈恩伝』にはみられなかった。

なお、チベット文字資料にみられる3、4等重紐2類の区別は、『慈恩伝』同様、ここでも表示されていない：偈<giei>3 ky (A25 祭韻) 義<ŋiē>3 ky (B21 C1 E3 支韻) 器<kiēi>3 ky (B4 脂韻) 金<kiəm>3 kym (A1 A2 A3 A16 A21 B14 F15 侵韻)。牙音声母の例ばかりを出したが、もしこれら3等韻を表す y が中舌位のものであったなら、声母は k ではなく、q で表記されていたにちがいない。k はもちろん4等韻にも表記されている：緊<kiēn>4 kyn (B14 真韻)。

『慈恩伝』と「ペテルブルグ所蔵断片」の声母韻母併せた音韻上の違いは、『慈恩伝』が訳出当時（五代末～宋初）使用されていた漢語音を忠実に音写しようとしたものに対して、「ペテルブルグ所蔵断片」はある程度定着していた漢字音を用いて漢文を音写したものであり、音写当時（元代）の漢語音を直接反映したものではないところから生じている。しかし、「ペテルブルグ所蔵断片」の漢字音体系は『慈恩伝』の漢語音体系と概ね重なり合うものと判断して間違ではない。

5. テキストの相違

『聖妙吉祥真実名経』に所属する、テキストAとテキストBは内容が重複しないし字体もよく似ているので、一見同一文献から分かれた断片のように見える。だが、Aは、韻文の1節を1行に書いているのに対してBは節末の記号を挿入しながら行間を無視して書いている。またBは歯頭音声母と結合する止摂開口音韻母に[ɿ]音を表示すべく w を使用したり（：慈<dziqi> sw(B10 Dv8)～sy(A4 A7 A20)，自<dziēi> sw(B10 B22)～šw(B18)～sy(A1 A4 A10 A16 A17 A19))、皆韻2等の拗音化を表示する yy を使用している（：皆 <kāi>2 qyy(B5)～q'y(A5)）。これらの点を考慮するなら、AとBが同一文献の2断片とはいいがたい。

テキストCはAと内容が重複する。だが、表記の仕方と表示音について両者には大きな違いがみられる。Aの第 dy(A3) 難 d'n(A3) に対してCでは ty(C2) t'n(C

3)と書かれるように、表記文字の違いのほか、たとえば、'wsyñ kwnkky syñq'pcw:(A1.6)「於前 恭敬 伸合掌」が <'w syn k>wynk ky syn q'p cw (C1.8)「(於前) 恭敬 伸合掌」と書かれるように、綴字の分節の違いもみられる。また、Bと同じくCでは歯頭音声母と結合する止摂開口音韻母に [ɿ] 音が w で表示されている：自 sw(C4)~sy(A4)。

テキストDの表面(r)の内容はA Cと重複する。<'w kw>nk ky šyn q'pcw:(Dr1.4)「(於前) 恭敬 伸合掌」は上にも掲げたが、綴字の分節の仕方はAともCとも一致していない。だが、DはAよりはCに近いものといえる：

pyñcw ywq' s' qšyvyk:(A1.7)
 < >ywq-' s' <q> s' w yyk:(C1.9)
 < y>wq' s' q s' w yy<k>(Dr1.5)

「遍主與我作饒益」。

この句においてはDはCと綴字の分節において合致しているし、「饒」の表記がAの šyv に対してCと同じ s'w を用いている。Dの裏面(v)の内容はBと重複する。Bと同じく「自」を w で表記するし(Dv1.8)、綴字の分節もよく似ているが、分節に一致しないところもある：

t'yq'nq'dwy kycw< >:(Dv1.5)「大幻化内 喜中(喜)」
 t'yq'n q'dwy kycwnk ky :(B1.6)「大幻 化内 喜中 喜」。

テキストEはBと部分的に重複する。両者には綴字の分節に異なるところがみられる：

kwywsypcwnk< >(E1.4)「具有十種 (大自在)」
 kwyw šypcwnk t'ysw<s'y>:(B1.22)「具有 十種 大自在」。

一方、テキストEはDと重複部分をもたないが、字体などから判断してDと連続したものと推定できる。

テキストFはAの冒頭部分とわずかに重複する。Aの「自」が sy(A1)と表記されているのに対して、Fでは sw(F16)を用いるので、やはり書き手が異なるものと考えられる。

テキストGとHは『四分律比丘戒本』に所属するもので上の6点とは内容が異なる。Gに対してHは若干特異な表記を示している。「毘尼」はGでは pyny(G2 G3)と表記されているのに、Hでは pw ny(H2)と表記されている。「毘」を pw で表記するのは「ペテルブルグ所蔵断片」の漢字音としては不規則な形式である。同じく「與」にGは yw(G2 G3 G4)を用いるのにHでは常に yww(H2 H3 H4)を使用するが、これもほかとは異なる。

以上のことから、DとEがその字体から判断して同一人の手によるものと推定できる外は、これらテキストはすべて異なった手で書かれた可能性が大きい。少なく

とも同一ウイグル文字テキストからの単純な書写でないことは明白である。

6. ウイグルの漢字音について

『慈恩伝』の漢語音写形式と「ペテルブルグ所蔵断片」の音写形式とを比べてみれば、後者は全体的にウイグル語音化された形式が現れる。たとえば、『慈恩伝』では 潜<siuěŋ> swyyn süin 觀<kuân> qw'n quan のように⁽¹²²⁾、ウイグル語の音韻構造には馴染まない表記をもって漢語音を表示しようとしたが、このような表記は「ペテルブルグ所蔵断片」にはふつう現れない。しかし、韻尾形式の一致などから判断して両者は基本的には同一の漢語音韻体系に所属するものといえる。ただ、『慈恩伝』中の漢語音写形式は、そのウイグル語訳作成時代である、五代末から宋初にかけての漢語西北方言の形式を直接表示したとしてもおかしくはないが、元朝時代に書かれたと推定できる「ペテルブルグ所蔵断片」が、その書かれた時代の西北方言音を直接に音写したものとは考えにくい。やはり、ここで扱った漢語音というのは「字音」として伝わった形式が使用されたと推定すべきである。「ペテルブルグ所蔵断片」には複数のテキストがあったが、それらは基本的に同じ音韻体系の字音を使用した。ただ、同一字音体系とはいっても、テキスト毎に若干の変種が現れることを考慮すれば、字音の完成度はなお十分ではなかったといえる。

ところで、高田時雄氏は以前に『慈悲道場懺法』と『法華経』に対する難字音注を記した漢文写本断片を扱い、声母を材料に、これがウイグルの漢字音体系を示すものであることを論じた⁽¹²³⁾。声母においては確かにウイグル語音化された体系をもっており、同氏の記述に誤りはない。しかし、筆者は、この断片の韻母において、宕攝と梗攝に軟口蓋鼻音をもっているとして、少なくとも『慈恩伝』中のウイグル文字表記形式はこの「ウイグル字音」を使用していないと述べたことがある⁽¹²⁴⁾。その後、高田氏はこの断片の韻母においても言及し、「ウイグル字音」に2種の存在を提唱した⁽¹²⁵⁾。すなわち難字音注『慈悲道場懺法』『法華経』に使用されたものを「長安方言に基づく」字音とし、先に述べた、カラ氏紹介のベルリン所蔵ウイグル文字音写漢文に使用されたものを「河西方言型」の字音とした。

ここで、高田氏の扱った「難字音注」と「ペテルブルグ所蔵断片」とを比べてみたい。

⁽¹²²⁾ 庄垣内(1987) pp.59-60.

⁽¹²³⁾ 高田(1985).

⁽¹²⁴⁾ 庄垣内(1987) pp.121-123.

⁽¹²⁵⁾ 高田(1990).

直音と反切によって注音されたこの「難字音注」は、平上去3声調の区別がほとんど無視されているという⁽¹²⁶⁾。「ペテルブルグ所蔵断片」も声調に関する関与的表記はなかった。

声母において、声母間の相通関係から高田氏の示した結果は「ペテルブルグ所蔵断片」とほぼ一致する。『慈恩伝』には区別されていた歯頭音の精清從(ts)と心邪(s)とが、「ペテルブルグ所蔵断片」には存在せず、すべて s で表示されているが(cf.4.1.3.1)、「難字音注」でもその相通関係からこの区別があったとは考えられない。この点はとりわけ大きな共通特徴といえる。細かな点においても、喻母と疑母の通用⁽¹²⁷⁾、あるいは泥母の念が韻尾に尾子音をもつにもかかわらず、脱鼻音化していること⁽¹²⁸⁾などは、「ペテルブルグ所蔵断片」とよく一致している。

韻母において、「難字音注」の通用面で高田氏は、「一・二等間の母音の区別がなされないこと」「合口要素がしばしば捨象されること」「拗音要素も時に無視されることがある」という特徴を挙げて、これを「ウイグル的な側面」と述べている⁽¹²⁹⁾。確かにこれは「ウイグル的な側面」であり、『慈恩伝』においてもこの特徴を認めることができる。しかし、「難字音注」を「ペテルブルグ所蔵断片」と比べてみれば、より細かな点においてまで特徴の一致することがわかる。すなわち、「難字音注」には、合口要素が捨象されて開口と通用するものに次のものがある：

「駝音唾」(開1歌 dā - 合1過 tuā)

「怪音蓋」(合2怪 kuǎi - 開1泰 kâi)

「関音間」(合2刪 kuan - 開2山 kǎn)⁽¹³⁰⁾

『慈恩伝』では、開合の区別はよく表示され、とりわけ牙喉音では確実に区別されていた。高田氏もこれら開合の通用に、「駝音唾」には「ウイグル字音では合口要素が捨象されていたものであろうか」と⁽¹³¹⁾、また「怪音蓋」には「一・二等の違い以外に開合の区別も無視されている。これは頭子音が牙音で、本来開合の区別がもっとも現れやすい条件にある。それでもなおかつ合口要素が捨象されていることは注意を引くものである」⁽¹³²⁾のごとくその特徴を強調している。実はこの特徴

⁽¹²⁶⁾ 高田(1985) 四頁。

⁽¹²⁷⁾ 例：塩音嚴(高田(1985) 六頁)。参照：言 <ɲien> yyn(C15 E5)~kyn(H3)。

⁽¹²⁸⁾ 例：點音念(高田(1985) 五頁)。参照：念 <niem> dym(A6)~tym(H2)。

⁽¹²⁹⁾ 高田(1990) p.336。

⁽¹³⁰⁾ 高田(1990)p.334 では「開2山」に対して「合二山」が入っているが、「合」は「開」の誤りである。

⁽¹³¹⁾ 高田(1990) p.330。

⁽¹³²⁾ 高田(1990) p.331。

は先にも述べたように「ペテルブルグ所蔵断片」に共通するものであり、両者の類似関係をよく表している。また、高田氏が撰の粹組みを越えて注音するものとして提出した多くは、「ペテルブルグ所蔵断片」の字音体系内でも通用するものである。中でも「慰音於」と「委音於」の止摂－遇摂の通用は一見特異にみえ、高田氏も「注目すべき相違点である」⁽¹³³⁾としている。だが影母未韻合口3等の慰・iuəiと平行するウイグル文字表記例として威<·iuəi>3 'w(A3 C3)を挙げることができ、影母魚韻合口3等の於・ioには同じ字が'w(A5 A6 A7 A15 etc.)とウイグル文字表記されているので、「ペテルブルグ所蔵断片」からみれば両者に通用があってもおかしくはない。委<·iuě>に関して、「ペテルブルグ所蔵断片」には支韻合口3等として喻母をもつ爲<fiuě> vy(A8 A15 A18 A20 A22 B7)の例しか存在せず、影母をもつ例はない。vyは於の'wと韻母形式が一致しない。しかし、同じ止摂に所属する微韻においては喻母と結合するものは圍<fiuəi> vy(B3)のように支韻と同じvyで表記されるが、威<·iuəi>'w(A3 C3)のごとく影母との結合に際しては韻母は-wで表記されるので、もし、「ペテルブルグ所蔵断片」に影母と結合する支韻が存在したなら、おそらくこの微韻と同じく'wと表記されたにちがいない。そして、影母支韻合口3等の委は於と通用したであろう。

先に述べたように、筆者は、この「難字音注」の韻母が宕摂と梗摂に軟口蓋鼻音をもっていたとして、少なくとも『慈恩伝』はこの「ウイグル字音」を使用していないと論じたことがある。一方、高田氏もこの両摂に軟口蓋鼻音の存在を認め、この「難字音注」の基づく「ウイグル字音」の体系は、「おそらく長安方言（あるいはそのトルファン的な変異形）を基礎としていたと思われる」と述べている⁽¹³⁴⁾。「ペテルブルグ所蔵断片」において、宕摂と梗摂が互いに通用する可能性のあるのは、唐（開1 âŋ）と庚（合2 uaŋ）で、ともにウイグル語のo音に所属する。ただ、庚（合2）は横<yuaŋ> qw(A17)の1例のみが現れるので、確実なものとはいいがたい。これら2摂間を離れては、梗摂の庚（開2 aŋ）と耕（開2 äŋ）のi音が止摂の之<iəi>支<iě>脂<iěi>の歯頭声母と結合する場合に一致するが、梗摂のiには[ə]～[ɤ]止摂のiには[ɪ]が音価として推定できるので、相通することはないだろう。これら以外はウイグル文字表記においても、宕摂、梗摂の表示はそれぞれの摂の中に収まり、相通することはない。なお、宕摂の唐<âŋ>養<iâŋ>の直音と拗音はともにwで表記され、ウイグル音のoの範疇に入れたが、[o]と[q]の2種の音価を推定したので相通することはないし、梗摂もyで表記されたが、直音にi拗音にeを推定したので相通しない。ただ、「難字音注」で宕摂の開合が「湯音

⁽¹³³⁾ 高田(1990) p.336.

⁽¹³⁴⁾ 高田(1990) p.338.

當」(開1唐-開1唐)、「遑音皇」(合1唐-合1唐)、「獎音賞」(開3養-開3漾)、「諷音岡」(合3養-合3養)のごとく正確に区別される理由はウイグル文字表記からは理解しにくい。一方、撰の枠組みを越えて注音するものに「冰音平」(曾撰開3蒸-梗撰開3庚)と「頃音強」(梗撰合3靜-宕撰開3陽)がある。強<giân>と同じ陽韻には「ペテルブルグ所蔵断片」では仰<ŋiân> kw(A2)のごとく w で表記され、o[ɔ] 音を表示する。頃 kiuɛŋ と同じ梗撰合3等に所属する例はみられない。『慈恩伝』には庚(合3)に永 hiuaŋ が wy で、環 kiuaŋ が kyy で表記されているので⁽¹³⁵⁾、「ペテルブルグ所蔵断片」でも頃は -y(-yy) で表記されるであろうと考えたくなる。しかし、庚(合2) uan がチベット文字資料では円唇母音化されていないのに⁽¹³⁶⁾、「ペテルブルグ所蔵断片」では w と表記され o を表示するので、その3等字がやはり w と表記され o[ɔ] を表示した可能性はある。もし o なら、頃と強の相通は理解できる。なお『慈恩伝』には庚(合2)の例はない。ところで「ペテルブルグ所蔵断片」では、冰 piəŋ と同じ韻母である開3蒸は ynk と表記されて iŋ を表示する：e.x. 称 <tŋiəŋ>3 /čiŋ/ cynk(B13)。それに対して、平 biəŋ と同じ開3庚は y と表記されて e を表示する：e.x. 明<miaŋ> /me/ my (B3 B17)。したがって、「ペテルブルグ所蔵断片」からはこの両者が通用することはないであろう。

上記のことがらを整理してみると、「ペテルブルグ所蔵断片」がこの「難字音注」の基づく字音と同じ体系内にあるとして、いかにも不都合とするところは2点ある。1点は宕撰内での開合の相通の可能性を実現していないこと、もう1点は「冰音平」の相通である。

この軟口蓋鼻音の問題をのぞけば「ペテルブルグ所蔵断片」は「難字音注」の基づく字音の体系とよく符号する。今あえてこの両者を同一体系の使用と仮定するならば、宕撰の開合の相通は「難字音注」の資料の量的制限から偶然そこに現れなかったということができるかもしれない。あるいは、4章ではたとえば、唐(開) âŋ と唐(合) uân とを同一音 o[o] として再構したが、実際には音価は開合で区別されていて、前者が [ɔ] 後者が [o] のような音価をもっていたといえるかもしれない。また、「冰音平」に関しては、「ペテルブルグ所蔵断片」に平と同じ梗撰に所属する清韻の成 ziɛŋ が中世漢語の影響下で synk/siŋ/(A7)と表記される例のあることから判断して、ここに混入したと考えることができる。

いずれにしても「ペテルブルグ所蔵断片」は「難字音注」と同じ音韻体系に基づいて書かれた可能性が極めて大きいといえる。また、高田氏の提唱したカラ氏紹介

⁽¹³⁵⁾ 庄垣内(1987) p.54.

⁽¹³⁶⁾ 高田(1988a)p.402「横」。

の「河西方言型」と「長安方言型」の字音の区別は不要となるであろう⁽¹³⁷⁾。

次に、テキストHにみられた漢字漢語について考えてみたい。

ウイグル文字音写漢文に併記された3行の漢字漢語列の2行目と3行目は『四分律比丘戒本』の内容と一致するので「大正藏經」の漢文と対照させて掲げてみる：

ウイグルテキスト

「大正藏經」

龜音惠驚音敬

(No.1429 p.1022a)

月：：説戒竟衆來若

月説戒經中來若

佛當與現先 mw ny 應與

毘尼當與現前毘尼應與

ウイグルテキストの「漢文」が漢文原典のものと符号しないのは、この「漢文」がウイグル文字音写形式から漢字を推定して当てられたためと考えられる。「月説戒經中來若」に相当するウイグル文字音写形式は同じテキストHのウイグル文 *kw̃r šwr q'y ky cwnk l'y š'q* に当たる (cf. p.27, l.1)。ウイグルテキスト中の漢文の「竟衆」は、もとの漢文の「經中」を音写した *ky cwnk* に対して当てられた漢字である。「經」<見母-青韻4等 *kien*>と「竟」<見母-庚韻3等 *kiaŋ*>、「中」<知母-東韻3等 *tiuŋ*>と「衆」<照母-東韻3等 *tɕiuŋ*>はウイグル文字ではそれぞれ同一形式 *ky, cwnk* で表記され、同一漢字音 /ke/, /čüŋ/ をもつので (cf. 4.1.6, 4.2.15)、文意を考慮せずにこの2つの漢字音に「竟衆」を与えたものと推定できる。一方「毘尼當與現前毘尼應與」に相当するものはテキストHには存在しないが、テキストGに平行する文がみられる：*pyny twyw kynsyn py<ny 'ynk yw>* (cf. p.26, l.2)。「前」<從母-先韻4等 *dzien*>の音写形 *syn* がここでは「先」<心母-先韻4等 *sien*>に入れ換えられているが、両者は同一表記形 *syn* をもち、いずれも /sen/ と表音された。「毘尼」<biēi niēi>に対して与えられた「佛」については、「毘尼」がテキストHでは *pyny* ではなく、*pw-ny*(H2) と表記されていることから理解できる。「佛<viuət>」は、『真實名經』テキストAに現れ、*vyr*(A13 /fīr/)と表記されているが、テキストHの *pw-ny* はその字体から *pw-r* あるいは *pw-ry* とも読める。覆 <fiəu> が *pw* (G4 H4)と表記されるように、輕唇音声母は *v-* にかかわって *p-* で表記されることもあるので、ここでは、*pw-ny* を「佛」の音写と判断したものと推定できる。一方、漢字に混じって *mw ny* と書かれているのも、もとは「毘尼」に相当する単語である。先にはこれに当たる単語に「佛」を入れ、

⁽¹³⁷⁾ 吉田豊氏も筆者とは異なった方法でこの2つの型について議論し、その区別の不要を説いている。吉田(1994) pp.68-70 参照。

ここでは判読できずに、pw ni ではなく mw ny と誤写したものと考えられる。

なお、1行目の「懃音恵」「驚音敬」は「音」の字を挟んで前後の漢字が同音であることを示すもので、高田氏の扱った「難字音注」と同じ方法の音注である。前者の懃は残念ながら知らない「漢字」である⁽¹³⁸⁾。後者の「驚音敬」は「見庚開3：見映開3」に所属し、平声と去声の声調を無視した「同音」であって、ウイグル文字ではいずれも ky と表記され /ke/ と再構できるもので(cf.4.2.13)、「難字音注」と内容的にも一致する。

ところで、ベルリン所蔵のウイグル文字表記漢文に対するカラ氏の紹介はただ4句1節の韻文を提出したのみで、全体の詳細は明らかにされていないが、そこに掲げられた音写形式は、実はここで扱ったものと同種の字音体系を用いているといつてよい。次の1句がそのことをよく示している：

ši qu kili sisi ši 是故敬禮清淨師 ⁽¹³⁹⁾

この7つの漢字はここで扱った「ペテルブルグ所蔵断片」にすべて現れ、まったく同じ形式 šy, qw, ky, ly, sy, sy, šy で表記されている。梗摂の敬清淨も等しく鼻音韻尾を欠落させている。特に清(tsiɛŋ) 淨(dziɛŋ)の声母が『慈恩伝』では ts で表記されるのに、両者が s を使用している点は大きな共通特徴である。

ベルリン所蔵のこの仏典はウイグル文字音写の韻文漢文とそのウイグル語訳とかななるもので、漢文の漢字音による音読とそのウイグル語訳が同時に行われていたことを示すものといえる。

7. 結び

筆者はかつてウイグル語における漢文訓読の存在について論じたことがある⁽¹⁴⁰⁾。すなわち元代において、『阿毘達磨俱舍論実義疏』や『阿含経』など若干のウイグル語仏典は漢文そのものをウイグル語に訓読していた可能性があるとして述べた。その際、訓読とは別にウイグルが漢文の音読をもっていたか否かは不明のままであった。今こうしてサンクトペテルブルグ所蔵のウイグル文献中にまとまった漢文音読資料が発見され、それらが「ウイグル漢字音」によって元代に書かれたものであることが明白になった以上、漢文の音読はウイグルに定着していたというべきであ

⁽¹³⁸⁾ 「恵」は匣霽合4に所属する。

⁽¹³⁹⁾ Kara(1991) p.132.

⁽¹⁴⁰⁾ 庄垣内(1982) pp.105-119, (1993b) pp.20-34. 以下、ウイグルの「漢文訓読」に関する記述内容についてはこの拙論を参照されたい。

る。しかし、ウイグルにおける漢文の音読は、その内容を漢語音によって得るためではなく、むしろ聖語化された仏典漢語をその漢語音で朗読することが宗教上有意義であると考えられたためにちがいない。上のテキストHでみたように、漢語音とその内容との結合はかなり不十分なものであった。漢語音とその内容が直接に結びつかないことを示す例は、断片的ではあるが元代の他のウイグル語仏典にもしばしばみられる。またこの時代のウイグル語仏典にはウイグル文中に音読された漢字の句や文が現れ、直下に同じ内容のウイグル語訳が続いている例が現れる。これは日本語におけるいわゆる「文選読み」に当たるもので、漢文訓読の発達的一段階を示すものといえるが、このような漢字もやはりここで扱ったものと同じ音韻体系に所属する漢字音で読まれたにちがいない。先のカラ氏紹介のウイグル文献の読み方に類似するものであったろう。いずれにしても、ウイグルにおける漢文の音読は、漢字音をもっておこなわれ、内容把握は訓読をもっておこなわれていたものと推定できる。

ウイグル文字表記漢文文献は、ベルリンのトルファン蒐集品中のものを含めてもそう多くは残っていないと考えられるが、今後は一片でも多くの文献を集めて「ウイグル漢字音」についてのさらに詳細な記述をおこないたい。

8. ウイグル漢字音と出典（ / / 内は再構漢字音）

8. 1 果仮撰

歌韻

多 <tâ>1 /ta/ t' G4
 他 <tâ>1 /ta/ -d' B13
 我 <ḡâ>1 /ʁa/ q' A7 q' A21 A22
 C9 C10
 迦 <kiâ>3 /ka/ k' A17

戈韻

魔 <muâ>1 /ba/ p' A18
 坐 <dzuâ>1 /za//sa/ z' A6
 s' A16
 果 <kuâ>1 /qa/ q' C12

麻韻 2 等

華 <ḡua> /ʁa/ q' C1
 化 <ḡua> /ʁa/ q' B5 q' B6 C20
 q' B6 Dv5

麻韻 3 等

者 <tḡia> /čä/ c' A3 A9 A16 A19
 A20 B2 B3 B5 B15 B20 B21 C3
 C14 C16 Dv3 E3
 捨 <qia> /šä/ š' A15

8. 2 遇撰

模韻

普 <p'o>1 /fu/ vw B4
 固 <ko>1 /qu/ q̄w B8 B14
 故 <ko>1 /qu/ qw A7 A15 A22
 q̄w C12

魚韻

慮 <lio>3 /lu/ lw B9
 除 <ḡio>3 /ču/ cw A21 G2
 諸 <tḡio>3 /ču/ cw A8 A13 A15
 A18 A27 G1 G5
 舒 <ḡio>3 /šu/ šw A17
 如 <nḡio>3 /žu/ sw A2 A26 Dr3 G4
 šw A6 A7 A16 H4
 汝 <nḡio>3 /žu/ sw A20 A22
 語 <ḡio>3 /gu/ kw G4
 於 <·io>3 /·u/ 'w A5 A6 A7 A15
 A17 A19 A21 B2 B4 B14 B16 B20
 C6 Dv6 E2 E3
 餘 <yio>4 /yu/ yw A15
 與 <yio>4 /yu//yū/ yw A7 B2 B12
 C9 Dr5 G2 G3 G4 yww H3 H4

虞韻

無 <ḡiu>3 /·u/ 'w A3 A8 A15 A27
 Dv8 E4 E6
 住 <ḡiu>3 /ču/ cw B8 B16 B20 E2 E6
 趣 <tḡiu>3 /su/ sw A18
 主 <tḡiu>3 /ču/ cw A7 A19 A22 A25
 B7 B17 C15
 殊 <zḡiu>3 /šu/ šw A9 Dv2 sw C5
 濡 <nḡiu>3 /žu/ sw F13
 句 <kiu>3 /ku/ kw C13 E5
 具 <ḡiu>3 /ku/ kw A3 A18 B9 B11
 B12 B17 B22 C3 E4

8. 3 蟹撰

哈韻

來 <lâi>1 /lai/ l'y A5 A6 A16

Dr3 H1
在 <dzâi>1 /sai/ s'y A1 A16
A19 B16 B20 C1 E2
海 <ɣâi>1 /ɣai/ q'y B10

泰韻

大 <dâi>1 /tai/ t'y A13 A19 B2
B3 B4 B5 B6 B7 B9 B10 B11 B12
B13 B14 B15 B16 B17 B22 C20
Dv3 Dv5 Dv8 Dv10 d'y B11 B18
Dv1 -d'y A4 A9 A20 B2 B3 B4
B5 B8 B9 B10 B11 B12 B14 B17
C13 C17 Dv4 Dv6 Dv7 G1 G5
最 <tsuâi>1 /soi/ swy B7 B16

佳韻

解 <kaï>2 /qai/ q'y A8 B5 q'y
A15 B11

皆韻

界 <kăi>2 /qai/ q'y A1 A18
皆 <kăi>2 /qai//qīi/ q'y A5
qyy B5
戒 <kăi>2 /qai/ q'y B7 G1 H1
壞 <yuaï>2 /qai/ q'y A9 A17 A23
A26 B13

祭韻

世 <qiei>3 /ši/ sy A14 A18 A19
A24
偈 <giei>3 /ki/ ky A25

齊韻

第 <diei>4 /ti/ ty C2 dy A3
泥 <niei>4 /di/ ty A8

禮 <liei>4 /li/ ly A0 F13
切 <tsiei>4 /si/ sy A8
慧 <yieui>4 /xu/ kw A4 B4 B9 B11
Dv7

灰韻

內 <nuâi>1 /doi/ -dwy A18 A27 B6
Dv5
類 <luâi>1 /loi/ lwy A8
罪 <dzuâi>1 /soi/ swy A21 H3
摧 <dzuâi>1 /soi/ swy B13

8. 4 止攝

微韻

未 <miuei>3 /vi/ vy A14
微 <miuei>3 /vi/ vy A18
威 <·iuēi>3 /·u/ 'w A3 C3
畏 <·iuēi>3 /·ui/ 'wy B15
諱 <ɣiuēi>3 /xi/ ky B23 E5
圍 <fiuei>3 /vi/ vy B3

之韻

事 <dzīəi>2 /ši/ sy A22
癡 <tiəi>3 /či/ cy G3
持 <diəi>3 /či/ cy A1 A2 A13 A16
A21 B4 B5 B7 B9 B14 Dv7 G6
治 <diəi>3 /či/ cy H3
理 <liəi>3 /li/ ly B18
慈 <dziəi>4 /sī//su/ sy A4 A7
A20 sw B10 Dv8
詞 <ziəi>4 /sī//su/ sy A25
sw C15
之 <tqiəi>3 /či/ cy A5 A25 A27
C6 C12
時 <ziəi>3 /ši/ šy A2

而 <nziəi>3 /ʒi/ sy A16 C11
 記 <kiəi>3 /ki/ ky C13
 其 <kiəi>3 /ki/ ky A8 A16 A19
 喜 <xiəi>3 /xi/ ky A5 B2 B6 Dv3
 Dv5
 異 <yiəi>4 /yi/ yy A15
 已 <yiəi>4 /yi/ yy A16
 以 <yiəi>4 /yi/ yy A16 B8 Dv7

支韻

彼 <piě>3 /pi/ py A6 B16 B19
 B20 C7 E2
 離 <liě>3 /li/ ly A15
 智 <tiě>3 /či/ cy A4 B4 B9 B10
 B11 C16 Dv7
 知 <tiě>3 /či/ cy A9
 此 <tšiě>4 /sī/ sy A22
 施 <qiě>3 /ši/ šy B7 B14
 是 <ziě>3 /ši/ šy A16 B2 B3 B10
 B10
 B11 B14 B19 C17 Dv1 Dv4 Dv8
 sy A9 A26 B4 G1 G5
 義 <ŋiě>3 /gi/ ky B21 C1 E3
 爲 <fiuě>3 /vi/ vy A8 A15 A18
 A20 A22 B7

脂韻

師 <šiěi>2 /ši/ šy B15 C13
 悲 <piěi>3 /pi//fi/ py A4 A7 A20
 Dv8 vy B10
 比 <piěi>4 /pi/ py H1
 毘 <biěi>4 /pi//pu/ py G2 G3
 pw H2
 地 <diěi> /ti/ ty E2 G4 -dy B20
 G4 -ty H4

尼 <niěi>3 /ni/ ny G2 G3 H2
 利 <liěi>3 /li/ ly A20 B6 Dv1 E4
 次 <tšiěi>4 /sī/ sy A13 A17 C2
 自 <dziěi>3 /sī//su/ sy A1 A4
 A10 A16 A17 A19 H3 sw B10
 B18 B22 C1 C4 Dv8 F16
 四 <siěi>4 /sī/ sy A18
 器 <kiěi>3 /ki/ ky B4
 遺 <yiuěi>4 /yu/ yw B22 E4

8. 5 效撰

豪韻

到 <tâu>1 /tau/ t'w B19
 導 <dâu>1 /tau/ t'w C13
 惱 <nâu>1 /dau/ d'w A8 A15 B4
 草 <tšâu>1 /sau/ s'w G4 H4
 告 <kâu>1 /qau/ q'w A16

肴韻

拋 <p'au>2 /pau/ p'w A2 C4
 巧 <k'au>2 /qau/ q'w A22

宵韻

妙 <miəu>4 /beu//bäu/ pyw A0 A2
 A10 A20 A22 p'w B4
 超 <tiəu>3 /čeu/ cyw A1
 笑 <siəu>4 /seu/ syw A18
 饒 <nziəu>3 /žev//žäu/ šyv A7
 s'w C9 Dr5

蕭韻

調 <diəu>4 /teu/ dyw A3 A8
 -dyw A1 A3 C3
 了 <liəu>4 /leu/ lyw A9

8. 6 流 攝

侯 韻

鉤 <kəu>1 /qiu/ qyw B4
後 <yəu>1 /χiu/ qyw C18

尤 韻

覆 <fiəu>3 /pu/ pw G4 H4
謬 <miəu>4 /biu/ pyw A15
不 <fiəu>3 /fu/ vw A8 B23 E5 G3
G5
呪 <tqieu>3 /čiu/ cyw A13 A25
B15 B17
手 <qieu>3 /šiu/ syw A2 A4 C4
s(yw) C1
究 <kiəu>3 /kiu/ kyw A7 A9 A17
C10 C12 C19 k'w(?) A6
丘 <kiəu>3 /kiv/ kyv H1
有 <fiəu>3 /yu//yiu/ yw A3 A9
A17 A26 B11 B22 Dr1E4 yyw A4
A8 A20 A23 B13 B17 B22

8. 7 咸 攝

合 韻

合 <kâp>1 /qab/ q'p A6 A16
q'p C8 Dr4

談 韻

三 <sâm>1 /sam/ s'm A1 A18 A19
B13

凡 韻 · 乏 韻

梵 <viuəm>3 /fam/ v'm A0 F12
鏤 <miuəm>3 (Skt.) v'n A6 Dr3
法 <fiuəp>3 /pab/ p'p G1

塩 韻

尖 <tsiəm>4 /sem/ sym A4

業 韻

業 <ɲiəp>3 /geb/ kyp A21

添 韻

念 <niem>4 /dem/ dym A6 tym H2

8. 8 深 攝

侵 韻 · 緝 韻

心 <siəm>4 /sim/ sym A8 A9 A15
深 <qiem>3 /šim/ šym C17
甚 <ziəm>3 /šim/ šym C17
金 <kiəm>3 /kim/ kym A1 A2 A3
A16 A21 B14 F15
音 <·iəm>3 /·im/ 'ym A19
執 <tqiəp>3 /čib/ cyp A2 B5
十 <qiep>3 /šib/ šyp B19 B22 E3
syp B20 B21 B21 E3 E4
及 <giəp>3 /kib/ kyp A4 A24 B3
B12 C18

8. 9 山 攝

寒 韻 · 曷 韻

難 <nân>1 /dan/ t'n A1 C3
d'n A3
岸 <ɲân>1 /ɣan/ q'n B19 q'n B19
安 <·ân>1 /·an/ ''n B2
達 <dât>1 /tar/ t'r A9
遏 <·ât>1 (Skt.) k' A6 Dr3

桓 韻 · 末 韻

半 <puân>1 /pan/ p'n G1
滿 <muân>1 /man/ m'n A19 C1

端 <tuân>1 /tan/ t'n A6 -d'n A2
 亂 <luân>1 /lan/ l'n A8
 歡 <ɣuân>1 /ɣan/ q'n Dv3
 未 <muât>1 (Skt.) p' A6 Dr3

山韻

間 <kǎn>2 /qan/ q'n A24 q'n A14
 幻 <ɣuǎn>2 /ɣan/ q'n A7 A13 B5
 B6 Dv5 q'n B6 B7 C20

元韻・月韻

言 <ɣiɛn>3 /yen//gen/ (y)yn A16
 A25 yyn C15 E5 kyn H3
 煩 <viuɛn>3 /fan/ v'n A8 A15 B4
 願 <ɣiuɛn>3 /gun/ kwn A7 A14 B9
 C10

怨 <·iuɛn>3 /·un/ 'wn A18
 遠 <ɣiuɛn>3 /ven/ vyn A15
 月 <ɣiuɛt>3 /gur/ kwr G1 H1

仙韻・薛韻

便 <biɛn>4 /pen/ pyn B9 B11
 面 <mien>4 /men/ myn A2 A17
 善 <ziɛn>3 /ʃen/ syn A11
 ʃyn C18
 演 <yien>4 /yen/ yyn A17 A25 C19
 別 <piet>3 /per/ pyr A15
 滅 <miet>4 /ber/ pyr G1 G2
 舌 <dziɛt>3 /ʃer/ ʃyr A17
 旋 <zuiɛn>4 /suen/ swyn C15
 圓 <ɣiuɛn>3 /wen/ wyn C1
 說 <ɣiuɛt>3 /ʃur/ ʃwr A15 A16
 Dv2 E6 H1 swr C19 E5 G1

先韻

遍 <prien>4 /pen/ pyn A7 A17 A19
 邊 <prien>4 /pen/ pyn A3 A13 B10
 Dv8

蓮 <lien>4 /len/ lyn A2 C1
 前 <dzien>4 /sen/ syn A6 A16 G2
 人 <nzien>4 /ʒen/ syn G4
 堅 <kien>4 /ken/ kyn B8 B14
 顯 <ɣien>4 /xen/ kyn A18 B5 Dv4
 現 <ɣien>4 /xen/ kyn A3 A18 C2
 C19 G2

8. 10 臻攝

痕韻

根 <kən>1 /qīn/ qyn A9

魂韻・沒韻

本 <puən>1 /pīn/ pyn C20
 門 <muən>1 /mun/ mwn A17
 尊 <tsuən>1 /sun/ swn A5 A14 B7
 B15 B20 Dr2
 沒 <muət>1 /bīr/ pyr C11

欣韻

謹 <kiən>3 /kin/ kyn C7
 勤 <giən>3 /kin/ kyn A21

文韻・物韻

忿 <fiuən>3 /pīn/ pyn A3 C2
 聞 <ɰiuən>3 /·un/ 'wn B4
 云 <ɣiuən>3 /yun/ ywn A0 F12
 佛 <viuət>3 /fīr/ vyr A13

真韻・質韻

進 <tsiën>4 /sin/ syn B8

眞 <tqiēn>3 /čin/ cyn A0 A9 B23
C10 E5 E6

神 <dziēn>3 /šin/ šyn B12 Dv9
syn B12

伸 <qīēn>3 /šin/ syn A6 C8
šyn Dr4

身 <qīēn>3 /šin/ šyn A16 A20 B2
B9 syn C7 Dv7

忍 <nziēn>3 /žin/ šyn B8 Dv6

緊 <kiēn>4 /kin/ kyn B14

因 <·iēn>4 /·in/ 'yn Dv2

畢 <piēt>4 /pir/ pyr A16

密 <miēt>3 /bir/ pyr A1 A13 A16
A19 A25 B15 B17 B18 F15

七 <tšiēt>4 /sir/ syr G1

疾 <dziēt>4 /sir/ syr B12

悉 <siēt>4 /sir/ syr B13

實 <dziēt>3 /šir/ šyr A0
syr A7 A14 B23 C10 E5 E6 F13

吉 <kiēt>4 /kir/ kyr A0 A1 A10
A20 A21 C16

一 <·iēt>4 /·ir/ 'yr A8

術韻

出 <tqiuēt>3 /čur/ cwr A1 A4 A9
A14 A17 A23 A24 A26 A27

術 <dziuēt>3 /šur/ šwr B7

8. 1 1 宕攝

唐韻·鐸韻

當 <tāŋ>1 /to/ tw C19 G2 G3 G4
H3 H4

剛 <kāŋ>1 /qo/ qw A1 A2 A16
qw A4 A19 A21 B14 F15

樂 <lāk>1 /lay/ l'q A5 B2

l'q B2

作 <tsāk>1 /say/ s'q A2 A7
s'q Dr5

惡 <·āk>1 /·ax/ ''q A18

光 <kuāŋ>1 /qo/ qw A4

廣 <kuāŋ>1 /qo/ qw A17 B2 B3 C17
Dv4 qw B3 B4 B5

陽韻·葉韻

網 <ŋiāŋ>3 /·o/ 'w A7 C20

量 <liāŋ>3 /lo/ lw B10 Dv8

兩 <liāŋ>3 /lo/ lw A17

長 <điāŋ>3 /čo/ cw A17

相 <siāŋ>4 /so/ sw A18 B16 B21
C6 E3 H3

祥 <ziāŋ>4 /so/ sw A0 A1 A10 A20
A21 C16

像 <ziāŋ>4 /so/ sw A3 B3

掌 <tqiāŋ>3 /čo/ cw A6 A16 C8 Dr4

上 <ziāŋ>3 /šo/ sw A2 A4 C4
šw A8 B15

仰 <ŋiāŋ>3 /go/ kw A2

向 <xiāŋ>3 /xo/ kw A4 A6 A16 C4
C7

養 <yīāŋ>4 /yo/ yw Dv3

若 <nziāk>3 /žax/ s'q C1 s'q H1

方 <fiuāŋ>3 /fo/ vw B9 B11

王 <fiuāŋ>3 /wo/ ww E5

8. 1 2 曾攝

登韻·德韻

等 <təŋ>1 /tīŋ/ -dynk A3 A14 C2
tynk C19

能 <nəŋ>1 /nīŋ/ nynk B13

默 <mək>1 /big/ pyk B17

得 <tək>1 /tig/ dyk B18
德 <tək>1 /tig/ tyk G1 G5

蒸韻・職韻

称 <tɕiəŋ>3 /çin/ cynk B13
乘 <dziəŋ>3 /šin/ synk B16
勝 <ɕiəŋ>3 /šin/ synk A1 A2 A4
F14 šynk A9 A17 B4 B7 B10
B10 B15 B16 C5 Dv1 Dv2 Dv6
應 <·iəŋ>3 /·in/ 'ynk G2 G3 G4
H2 H3
色 <sɿək>2 /šɿy/ šyq B2 B3
力 <liək>3 /lig/ lyk A19 B9 B12
B13 Dv10
勅 <ɕiək>3 /çig/ cyk A13
即 <tsiək>4 /sig/ syk B2 B5 B8
B11 B14 B15 B19 Dv4 G2
識 <ɕiək>3 /šig/ syk C16
極 <ɕiək>3 /kig/ kyk C5
憶 <·iək>3 /·ig/ 'yk H2

8. 1 3 梗攝

庚韻 2 等・陌韻

猛 <maŋ> /ma/ m' A1 A3 C3
生 <saŋ> /šɿ/ sy(?) A27
行 <ɣaŋ> /ɣi/ qy A5 C6
白 <bak> /pay/ p' q̄ A2 A16
橫 <ɣuaŋ> /ɣo/ qw A17

耕韻・麥韻

諍 <tɕsǎŋ>2 /čī/ cy G1
獲 <ɣuǎk>2 /ɣay/ q' q̄ A8

庚韻 3 等

明 <mian> /me/ my B3 B17

敬 <kiəŋ> /ke/ ky A6 C8 Dr3 F13
竟 <kiəŋ> /ke/ ky A6 A7 A9 A17
C10 C12 C1

境 <kiəŋ> /ke/ ky A27

清韻・昔韻

井 <piəŋ>4 /pe/ py B3
名 <miəŋ>4 /me/ my A0 B12
令 <liəŋ>3 /le/ ly A8 A15 A17
A22 B9 B13 C4 Dv3 Dv7
精 <tsiəŋ>4 /se/ sy A21 B8
清 <tɕiəŋ>4 /se/ sy A18 A19 A21
B19 B21 E3 G5
淨 <dziəŋ>4 /se/ sy A18 A21 B19
B21 E3 G5
情 <dziəŋ>4 /se/ sy A8
靜 <dziəŋ>4 /se/ sy B9
性 <siəŋ>4 /se/ sy A9 A24 B10
B18 Dv8
正 <tɕiəŋ>3 /če/ cy A2 A6 A9 A17
C6 C12

聖 <ɕiəŋ>3 /šä/ š' A0
成 <ɕiəŋ>3 /še//šəŋ/ šy B6 C10
šynk A7 šw(?) A14
擲 <ɕiək>4 /čeg/ cyk A2 C2
釋 <ɕiək>3 /šeg/ šy(k) A17
益 <·iək>4 /yeg/ yyk A7 A20 B6
C5 C9 Dr5 E4 (y)yk Dv1
亦 <yɿək>4 /yeg/ yyk A3 A9 B10
C13 Dv8

青韻・錫韻

頂 <tien>4 /te/ ty C15
定 <dien>4 /te/ -dy B8 (t)y A14
經 <kien>4 /ke/ ky H1

形 <yien>4 /xe/ ky A2 B3 C6
覓 <miek>4 /beg/ pyk H3
溺 <niek>4 /deg/ dyk C11
寂 <dziek>4 /seg/ syk B17

辱 <nziok>3 /žuy/ šwq̄ B8 Dv6
欲 <yioek>4 /yuy/ ywq B1 B18

覺韻

覺 <kɔk>2 /qoy/ qwq̄ A5 qwq A6
A17 A26 q̄wq̄ A9 A14

8. 1 4 通攝・江攝

東韻 1・屋韻 1

通 <tun> /tun/ -dwnk B12 Dv9
twnk B13

童 <dun> /tun/ twnk A0 dwnk F13
速 <suk> /suy/ swq̄ B12

東韻 3・屋韻 3

中 <tiun> /čun/ cwnk A1 A5 A7 A8
A11 A13 A19 B3 B4

衆 <tqiun> /čun/ cwnk A5 Dr2

雄 <hiun> /yun/ ywnk B14

復 <viuk> /fuy/ vwq̄ A1 B12 C2

伏 <viuk> /fuy/ vwq̄ A3 B13 F14
vwq A18

鐘韻・燭韻

頌 <zion>4 /sun/ swnk A25

誦 <zion>4 /sun/ swnk A0 A20

種 <tqiun>3 /čun//čiu/ cwnk A18
A19 B15 B21 B21 B22 E3 E4
cywnk E3

恭 <kion>3 /kun/ kwnk A6 A16 C7
C8

供 <kion>3 /kun/ kwnk Dv3

勇 <yion>4 /yun/ ywnk A1 A3 B14
C16

足 <tsiok>4 /suy/ swq̄ A5 A17 B9
swq A20 sw<q> B2

續 <zioek>4 /suy/ swq C20

参考文献

- Barat, K. (1995): A Turkic Chinese Transcription System. Paper presented at PIAC 38th Meeting, Aug. 7-12, Kawasaki Japan.
- 沈兼士編(1985 再版): 『広韻声系』 中華書局 1945.
- Csongor, B. (1952): Chinese in the Uighur Script of the T'ang-Period. *AOH* 2 pp.73-121.
- (1954): Some more Chinese Glosses in Uighur Script. *AOH* 4 pp.251-257.
- Emmerick R./E.Pulleyblank (1993): *A Chinese Text in Central Asian Brahmi Script*. Roma.
- 平山久雄(1967): 「中古漢語の音韻」 『中国文化叢書 1 - 言語』 pp.112-166.
- Kara, G. (1991): *Mittelchinesisch im Spätuigurischen*. Klengel, H./ W.Sundermann (ed.), *Ägypten Vorderasien Turfan*. Berlin, 129-133.
- Karlgren, B. (1923): *Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese*. Paris
- (1957): *Grammata Serica*. Stockholm.
- 河野六朗(1968): 『朝鮮漢字音の研究』, 天理時報社.
- 羅常培(1933): 『唐五代西北方音』, 上海.
- Maspero, H. (1920): Le dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang. *BEFEO* XX pp.1-124.
- 三根谷徹(1993): 『中古漢語と越南漢字音』 汲古書院.
- 水谷真成(1958): 「Brāhmī 文字転写『羅什訳金剛經』の漢字音」 『名古屋大学文学部十周年記念論集』, pp.748-774.
- (1994): 『中国語史研究 - 中国語学とインド学との接点』, 三省堂.
- 寧繼福(1985): 『中原音韻表稿』, 吉林文史出版社.
- 太田斎(1988): 「中国語にみられる 'Metathesis' について」 『開篇』 早稲田大学文学部 pp.36-51.
- Ölmez, M. (1994): Uygurca Xuanzang-Biyografisindeki Çince Alıntılar. *Türk Dilleri Araştırmaları*, Cilt 4.
- Pulleyblank, E.G. (1984): *Middle Chinese: A Study in Historical Phonology*. Vancouver.
- 庄垣内正弘(1982): 『ウイグル語・ウイグル語文献の研究』 I, 神戸市外国語大学外国学研究所.
- (1987): 「ウイグル文献に導入された漢語に関する研究」 『内陸アジア言語の研究』 II, pp.17-156.

- (1993a): 『古代ウイグル文阿毘達磨俱舍論実義疏の研究』II, 松香堂.
- (1993b): 『古代ウイグル文阿毘達磨俱舍論実義疏の研究』III, 松香堂.
- 高田時雄(1985): 「ウイグル字音考」『東方学』第七十輯, pp.134-150 (一頁～一七頁).
- (1988a): 『敦煌資料による中国語史の研究』, 創文社.
- (1988b): 「コートン文書中の漢語語彙」『漢語史の諸問題』, 京都大学人文科学研究所, pp.71-128.
- (1990): 「ウイグル字音史大概」『東方学報』第62冊, pp.329-343.
- (1991): 「レニングラードにあるチベット文字転写法華經普門品」『内陸アジア言語の研究』VI, pp.1-34.
- (1992): 「レニングラードにあるチベット文字転写法華經普門品(続)」『内陸アジア言語の研究』VI, pp.13-41.
- (1993): 「チベット文字書写「長巻」の研究(本文編)」『東方学報』第65冊, pp.329-343.
- 梅村坦(1982): 「ジョルジ=カラ教授の講演」『東洋文庫書報』第14号, pp.67-91.
- 楊耐思(1981): 『中原音韻音系』, 中国社会科学出版社.
- 吉田豊(1994): 「ソグド文字で表記された漢字音」『東方学報』第66冊, pp.271-380[1-110].

本研究は、科学研究費補助金(「中央アジア古代語文献の日・ロ共同研究」御牧克己代表 06044227)に基づいておこなわれたものである。所蔵文献の研究とその出版許可および複製写真の掲載許可を与えてくださったロシア科学アカデミー・東方学研究所・サンクトペテルブルグ支所に対して感謝の意を表しておきたい。

(しょうがいと まさひろ、神戸市外国語大学)

Chinese Buddhist Texts in Uighur Script

Masahiro Shōgaito

Summary

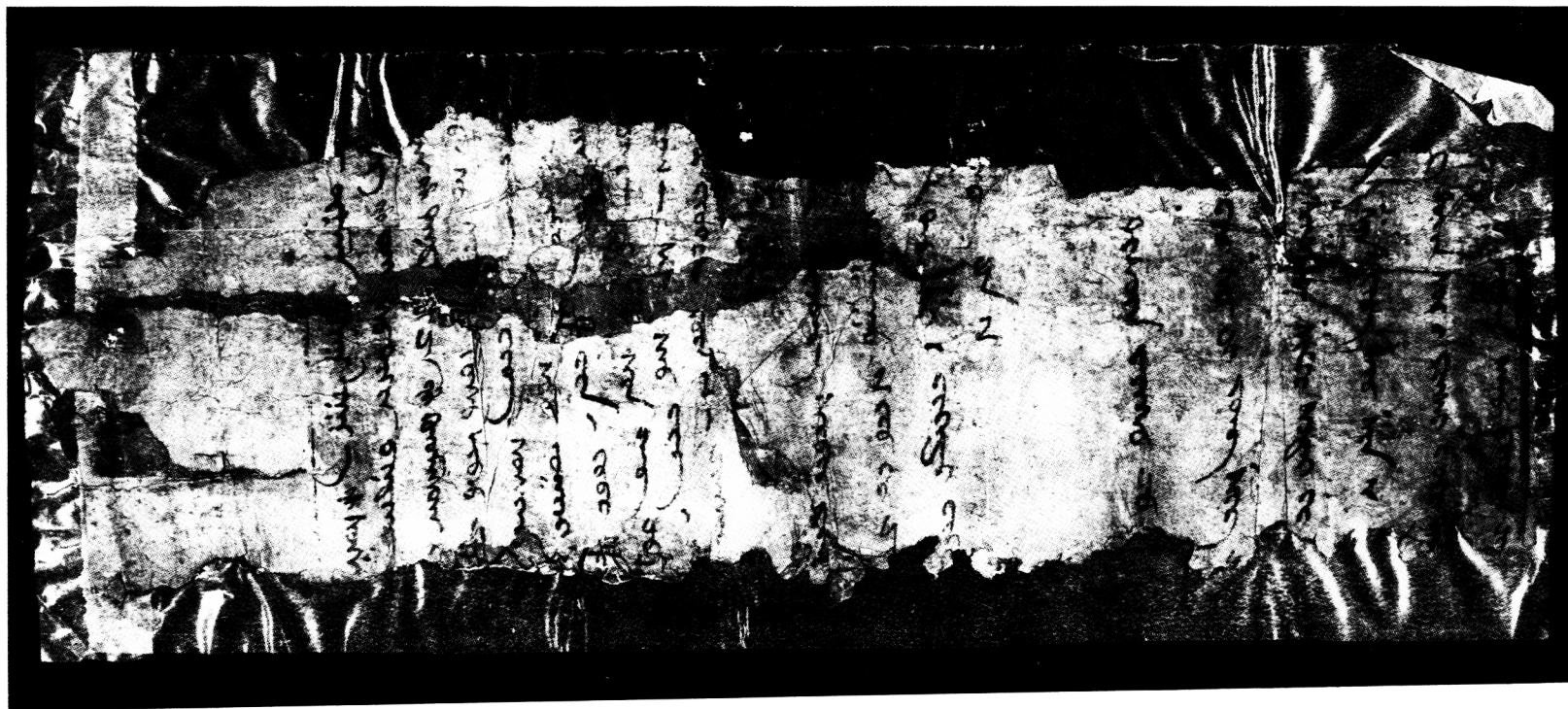
It has so far been acknowledged that among old texts from Central Asia there exist some which were transcribed from Chinese characters into alphabetic scripts. For example, texts transcribed into Tibetan script and Brāhmī script are well-known and such texts provide crucial information for the phonological study of the north-west dialect of Middle Chinese.

Dr. G. Kara has briefly mentioned that a Chinese Buddhist text transcribed in Uighur script is included in the Turfan Collection of the Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften. When the author of this paper visited the St.Petersberg Branch for Oriental Studies of Russian Academy of Sciences in the summer of 1994, he found ten fragments of Chinese texts in Uighur script. All of them have turned out to be Buddhist texts, eight of which the author identified as based on 『聖妙吉祥真實名經』 (*sheng miao ji xiang zhen shi ming jing*) and 『四分律比丘戒本』 (*si fen lu bi qiu jie ben*).

In the present paper, the author discusses these newly identified fragments from the linguistic point of view. First, they are transliterated into Roman alphabet with their corresponding Chinese characters attached alongside. Second, the pronunciation of the Chinese used there is discussed and reconstruction of the phonological system involved is attempted. The system has been recognized as similar to that which is utilized in the Chinese loan words appearing in the Uighur version of 『大慈恩寺三藏法師傳』 (Xuan-Zang-Biography). The Chinese phonological system of 『大慈恩寺三藏法師傳』 can be inferred to be that of north-west dialect of the late Tang Dynasty or the early Song Dynasty. The fragments here dealt with are found to have been written during the Yuan Dynasty and it is argued that the Chinese pronunciation used in them is an inherited pronunciation of Chinese characters. It is also argued that this inherited pronunciation of Chinese characters accords with the phonological system which is used in the Chinese Buddhist text in the Turfan Collection. It can be surmised that, at the time of the Yuan Dynasty, Chinese Buddhist texts were generally recited with the pronunciation of Chinese characters. Furthermore, it is maintained that one of these fragments conforms to the author's view (cf. Shōgaito 1982, pp.105-119) that Chinese Buddhist texts were read in the Uighur reading of Chinese characters, a practice similar to the Japanese reading of Chinese characters.

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 860. 861. 862. 863. 864. 865. 866. 867. 868. 869. 870. 871. 872. 873. 874. 875. 876. 877. 878. 879. 880. 881. 882. 883. 884. 885. 886. 887. 888. 889. 890. 891. 892. 893. 894. 895. 896. 897. 898. 899. 900. 901. 902. 903. 904. 905. 906. 907. 908. 909. 910. 911. 912. 913. 914. 915. 916. 917. 918. 919. 920. 921. 922. 923. 924. 925. 926. 927. 928. 929. 930. 931. 932. 933. 934. 935. 936. 937. 938. 939. 940. 941. 942. 943. 944. 945. 946. 947. 948. 949. 950. 951. 952. 953. 954. 955. 956. 957. 958. 959. 960. 961. 962. 963. 964. 965. 966. 967. 968. 969. 970. 971. 972. 973. 974. 975. 976. 977. 978. 979. 980. 981. 982. 983. 984. 985. 986. 987. 988. 989. 990. 991. 992. 993. 994. 995. 996. 997. 998. 999. 1000.

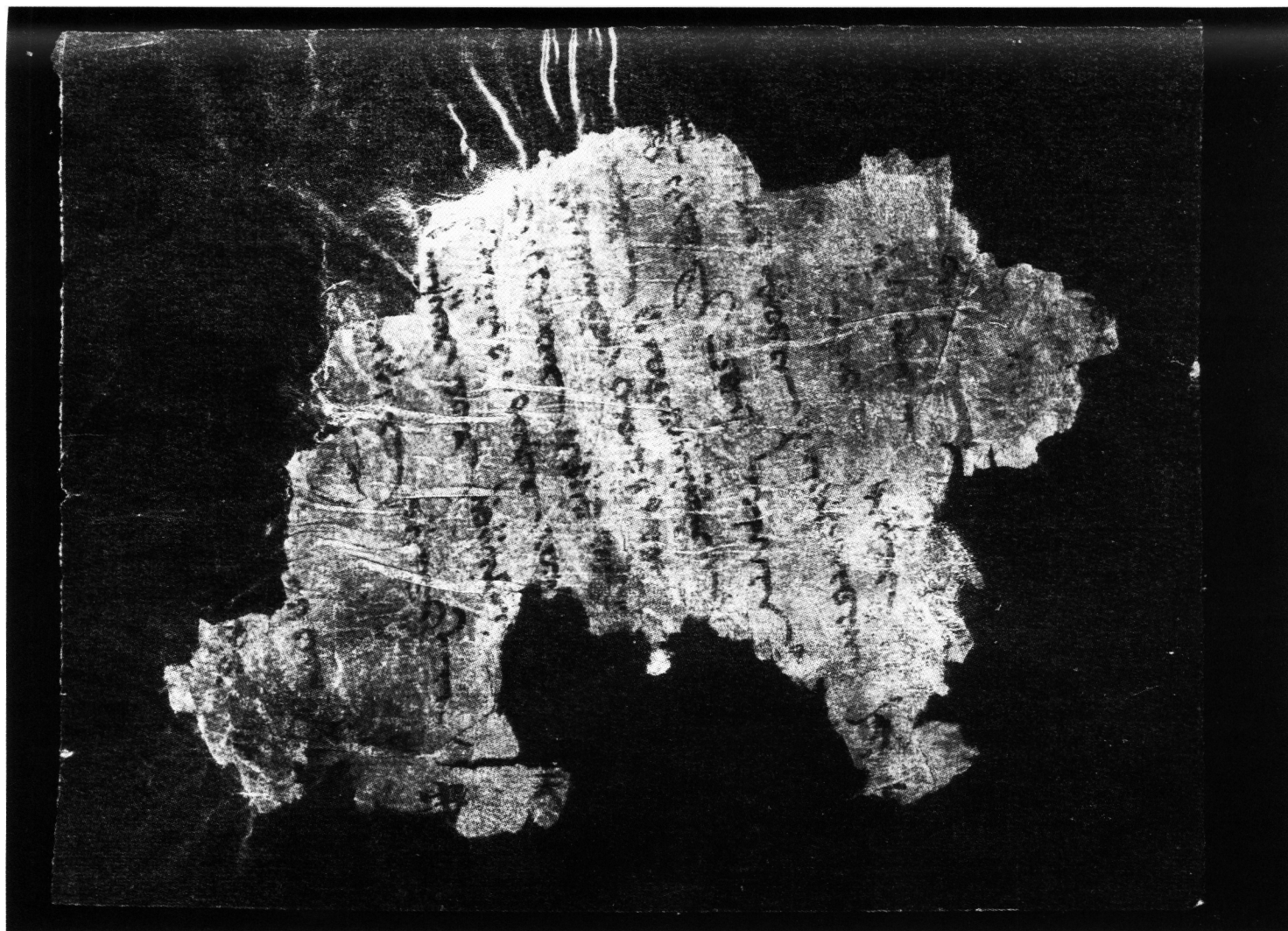
Handwritten text in a cursive script, likely a manuscript. The text is written on a piece of paper that is heavily stained and discolored, particularly in the center where there is a large, dark, irregular mark. The handwriting is dense and fills most of the page, with some lines appearing to be written in a different hand or ink. The text is oriented vertically on the page.



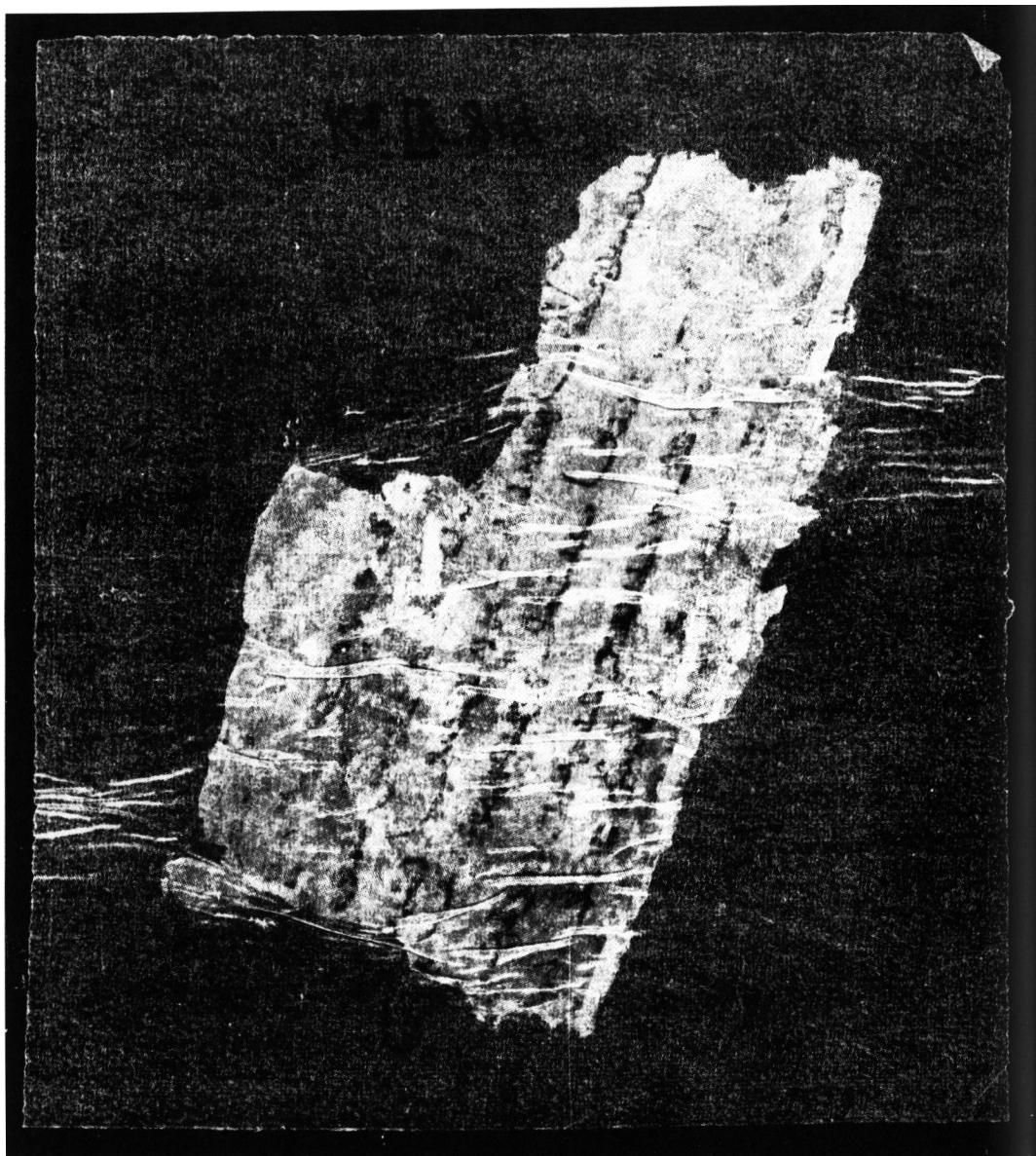
テキストC Kr. IV 821



テキスト Dr KrIV819(recto)



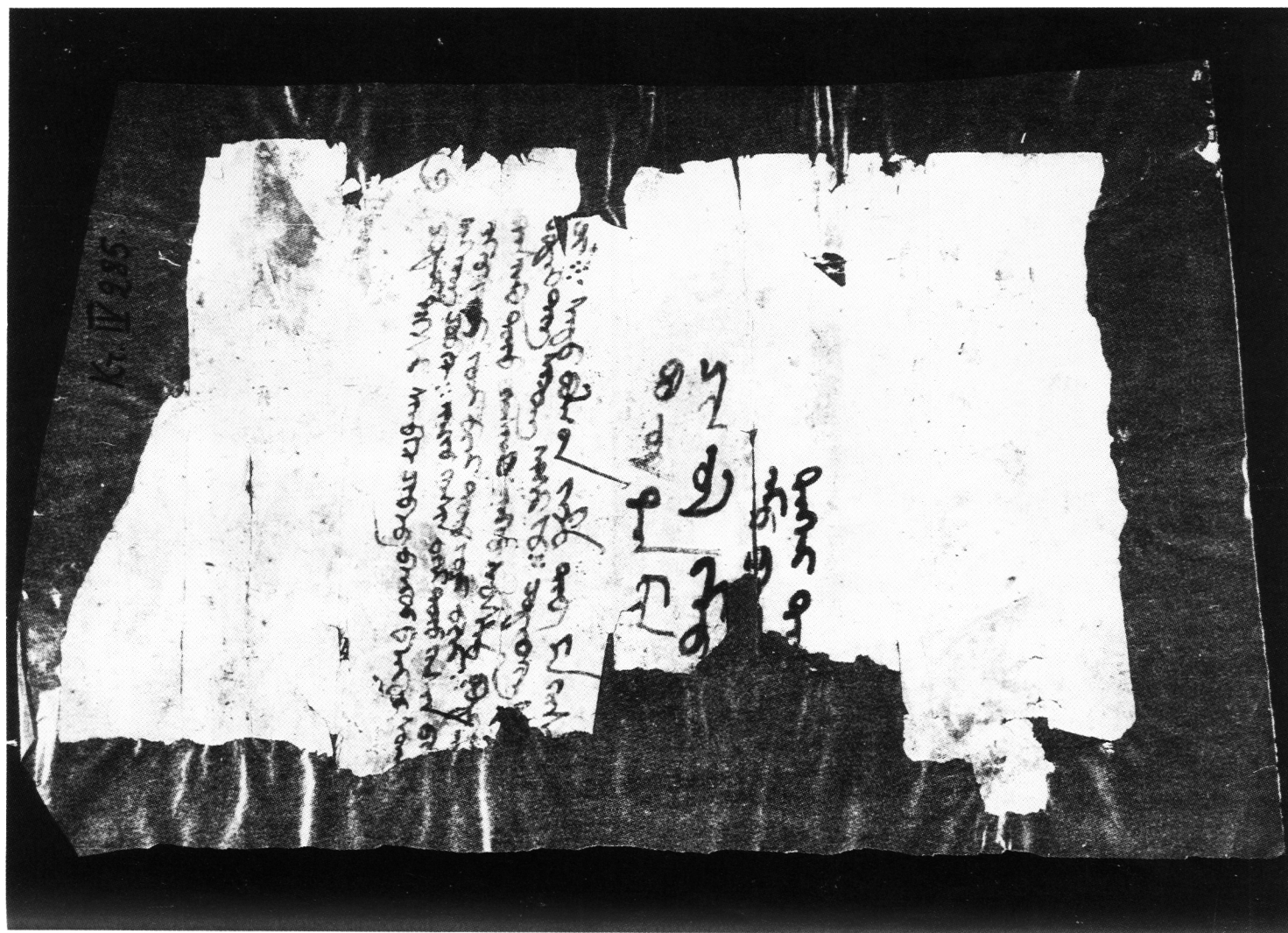
テキストD v KrIV819(verso)



テキスト E K r . IV 8 1 7



テキスト F Kr. IV 291



テキスト G Kr. IV 285

Kr IV 309

Handwritten text in Devanagari script, likely a religious or philosophical passage. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. The rightmost column contains a title or heading, followed by several lines of text. The middle column contains a large, stylized character, possibly a deity's name or a significant symbol. The leftmost column contains a concluding phrase or a signature.